舞　台　場

長野県佐久市岸野舞台場遺跡発掘調査報告書

昭和56年度

長野県佐久市教育委員会

序　　文

佐久市教育委員会
教育長　戸塚平一郎

舞台場遺跡の発掘調査を終えて

佐久平は原始古代における先住民のオアシスとして弥生文化の米づくりが伝播普及した地域であるといわれている。したがって極めて貴重な文化財が地下に存在することは明らかであり、これらを保護していくことは現代に生きる私共の責務であると考える。

最近の市行政の中で各種開発事業が進行するに伴って埋蔵文化財の発掘調査は益々盛んに行われるようになりつつある。

佐久市大字根岸字反り田他の舞台場遺跡調査は昭和56年５月から10月にかけて真夏の暑い盛りに県営圃場整備事業の施行に伴って実施された。この遺跡は宮川と堂ノ入川とにはさまれた北にのびる舌状台地の上にあり、現場は粘土質に加えて地山が礫層であり、まるで河原を掘りおこすようなものであり、さらに炎天と重なり合って調査員の方々は発掘調査に当って可成りの苦労をされている。

遺構は住居址、土壙等75基を数え、遺物は壺、甕、坏、高坏、石鏃等を検出、出土した。これらはまた考古学の上からも或いは佐久の郷土史の上からも、その道の専門家の方々により充分究明される資料となり得ることであろう。調査団の方々は思いを古代に馳せながら、まさに祈る気持で、そこに破壊されるものがなく、またあったとしても無事地下に現存される条件が保たれていることを期待しながら調査活動を続けたものである。

本調査は佐久平土地改良区及び東信土地改良事務所の関係者の皆様の深いご理解と並々ならぬご協力により行われたものであり、そのご厚意に対して深甚なる謝意を表するとともに調査団の藤沢平治団長外担当者、調査員、その他関係の方々のご協力に対し、厚く御礼を申しあげて巻頭の言葉といたします。

例　　言

1　本書は、昭和56年５月25日～同年10月９日にわたって、発掘調査された長野県佐久市大字伴野1896－１・２、1897－１、根岸3577－１に所在する舞台場遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、東信土地改良事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施し、農家負担分については国庫補助事業として実施した。

3　本調査は、林幸彦を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員、専修大学生、東海大学生を調査員補助員とし、地元岸野地区の方々外多くの人々の協力を得て実施した。

4　本書に挿入したは遺構の実測図作成は、調査員、調査補助員があたり、遺物の実測図作成は飯島篤、三石宗一が主に担当し、トレスは茂木智里、堺益子が担当した。

5　本書の執筆者は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ章については文末に記し、Ⅳ章に関しては、Ｙ１・13、Ｈ１・２・３・19・20・21・22号住居址、掘立柱建物址、溝状遺構、特殊遺溝を小山岳夫が担当し、上記以外はすべて工藤かよ子が担当した。

6　本書の編集は、工藤かよ子、高村博文が担当し、林幸彦が校閲した。

7　本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また、調査にあたり長野県教育委員会関孝一、郷道哲章、臼田武正指導主事には適切な御指導をいただきました。さらに、東信土地改良事務所においても、期間の猶予等御理解をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

凡　　例

1　各遺構の略号は次の通りである。

Ｙ－弥生時代住居址、Ｈ－鬼高・真間・国分期住居址、Ｄ－土壙、Ｆ－掘立柱建物址、Ｍ－溝状遺構、Ｔ－特殊遺構

2　遺構の実測図は縮尺$\frac{1}{80}$に統一し、異なる場合は明記してある。土器の実測図及び拓影図の縮尺は$\frac{1}{4}$、石器（石鏃等小形品は$\frac{2}{3}$でのぞく）、鉄製品、土製円板は$\frac{1}{3}$に統一してある。

3　図版中の遺物の縮尺は約$\frac{1}{4}$である。本文中及び表、図版の遺物番号を簡略化した。例えば「第44図１」は「44－１」。

目　　次

序　文
例　言、凡　例
目　次、挿図目次
Ⅰ　発掘調査の経緯……1
　1　調査に至る動機……1
　2　調査の概要……2
　3　調査日誌……2
Ⅱ　遺跡の環境……3
　1　舞台場遺跡の地形、地質の概況……3
　2　歴史的環境……4
Ⅲ　層序……5
Ⅳ　遺構と遺物……7
　1　住居址……7
　1）Ｙ１・Ｙ13号住居址……7
　2）Ｙ２号住居址……8
　3）Ｙ３号住居址……8
　4）Ｙ４号住居址……9
　5）Ｙ５号住居址……11
　6）Ｙ６号住居址……11
　7）Ｙ７号住居址……12
　8）Ｙ８号住居址……13
　9）Ｙ９号住居址……14
　10）Ｙ10号住居址……15
　11）Ｙ11号住居址……15
　12）Ｙ12号住居址……16
　13）Ｈ１・Ｈ2号住居址……17
　14）Ｈ３号住居址……17
　15）Ｈ４号住居址……19
　16）Ｈ５号住居址……19
　17）Ｈ７号住居址……21
　18）Ｈ８号住居址……21
　19）Ｈ６・Ｈ９号住居址……22
　20）Ｈ10・Ｈ11号住居址……23
　21）Ｈ12号住居址……25
　22）Ｈ13号住居址……25
　23）Ｈ14号住居址……25
　24）Ｈ15号住居址……26
　25）Ｈ16・Ｈ17号住居址……26
　26）Ｈ18号住居址……26
　27）Ｈ19・Ｈ20・Ｈ21号住居址……27
　28）Ｈ23号住居址……28
　29）Ｈ24号住居址……29
　30）Ｈ25・Ｈ26号住居址……29
　31）Ｈ27・Ｈ28号住居址……30
　32）Ｈ29・Ｈ30号住居址……30
　33）Ｈ31号住居址……32
　34）Ｈ32号住居址……32
　35）Ｈ33号住居址……33
　36）Ｈ34号住居址……33
　37）Ｈ35号住居址……33
　38）Ｈ36号住居址……34
　39）Ｈ37号住居址……35

40）H38号住居址……35　41）H39号住居址……36
2　土壙……36
3　掘立柱建物址……37
1）F１号掘立柱建物址……37
2）F２号掘立柱建物址……38
3）F３号掘立柱建物址……39
4）F４号掘立柱建物址……39
4　溝状遺構……39
1）M１号溝状遺構……39
2）M２号溝状遺構……40
5　特殊遺構……40
1）T１号特殊遺構……40
6　グリッド出土遺物……40
V　総　　括……83
引用参考文献……95

挿　図　目　次

第１図　舞台場遺跡地形及び発掘区設定図……1
第２図　周辺遺跡分布図……4
第３図　層序模式図……5
第４図　舞台場遺跡遺構全体図……6
第５図　Y１・Y13号住居址実測図……7
第６図　Y２号住居址実測図……8
第７図　Y３号住居址実測図……9
第８図　Y４号住居址実測図……9
第９図　Y５・H10・H11号住居址実測図……10
第10図　Y６号住居址実測図……11
第11図　Y７号住居址実測図……12
第12図　Y８号住居址実測図……14
第13図　Y９号住居址実測図……15
第14図　Y10号住居址実測図……15
第15図　Y11号住居址実測図……16
第16図　Y12号住居址実測図……16
第17図　H１・H13号住居址実測図……18
第18図　H４・H５号住居址実測図……19
第19図　H６号住居址実測図……20
第20図　H７号住居址実測図……20
第21図　H８号住居址実測図……21
第22図　H９号住居址実測図……22
第23図　H12・H13・H14号住居址実測図……24
第24図　H15号住居址実測図……26
第25図　H18号住居址実測図……27
第26図　H19・H20・H21・H22号住居址実測図……28
第27図　H23号住居址実測図……28
第28図　H24号住居址実測図……29

第29図　H27・H28号住居址実測図……30
第30図　H29・H30号住居址実測図……31
第31図　H31号住居址実測図……32
第32図　H32号住居址実測図……32
第33図　H33号住居址実測図……33
第34図　H34号住居址実測図……34
第35図　H35号住居址実測図……34
第36図　H36号住居址実測図……34
第37図　H37号住居址実測図……35
第38図　H38号住居址実測図……35
第39図　H39号住居址実測図……36
第40図　F１号掘立柱建物址実測図……37
第41図　F２号掘立柱建物址実測図……38
第42図　F４号掘立柱建物址実測図……39
第43図　M１号溝状遺構、T１号特殊遺構実測図……40
第44図　Y１・Y２号住居址出土土器実測図……41
第45図　Y３・Y４・Y５・Y６号住居址出土土器実測図……42
第46図　Y６号住居址出土土器実測図……43
第47図　Y７・Y８号住居址出土土器実測図……44
第48図　Y８号住居址出土土器実測図……45
第49図　Y９・Y10・Y11・Y12号住居址出土土器実測図……46
第50図　M１号溝状遺構、グリッド出土土器実測図……47
第51図　H７・H４・H13号住居址出土土器実測図……48
第52図　H13・H16号住居址出土土器実測図……49
第53図　H16・H17・H18・H19号住居址出土土器実測図……50
第54図　H23・H24・H25号住居址出土土器実測図……51
第55図　H９・H10・H12号住居址出土土器実測図……52
第56図　H37・H１・H３号住居址出土土器実測図……53
第57図　H５・H６・H８号住居址出土土器実測図……54
第58図　H11・H14号住居址出土土器実測図……55
第59図　H15・H20・H21・H22・H28号住居址出土土器実測図……56
第60図　H30・H31・H32・H33・H34・H35号住居址出土土器実測図……57
第61図　H36・H38・H39号住居址、D７号土壙出土土器実測図……58
第62図　D９・D15・D12号土壙、T１号特殊遺構出土土器実測図……59
第63図　T１号特殊遺構、F４号掘立柱建物址出土土器実測図……60
第64図　グリッド出土土器実測図〈１〉…61
第65図　グリッド出土土器実測図〈２〉…62
第66図　グリッド出土土器実測図〈３〉…63
第67図　グリッド出土土器実測図〈４〉…64
第68図　舞台場遺跡出土石器実測図〈１〉…65
第69図　舞台場遺跡出土石器実測図〈２〉…66
第70図　舞台場遺跡出土石器、鉄製品、土製円板実測図……67

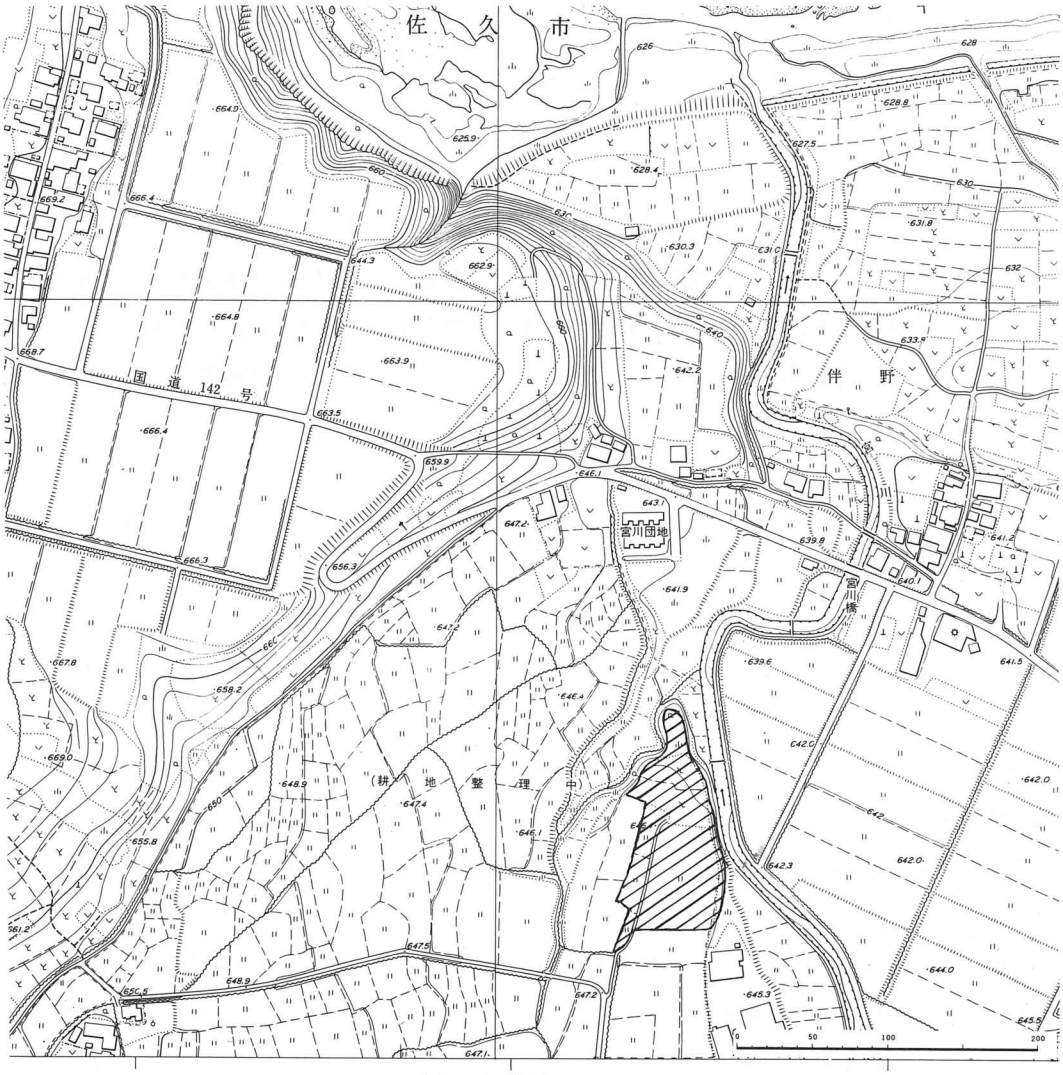
Ⅰ　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

佐久市岸野において、東信土地改良事務所による長野県営圃場整備事業に際し、舞台場遺跡の破壊がやむなき事態となり、緊急に記録保存を要するに至った。

佐久市教育委員会は、長野県教育委員会文化課の指導を受けながら記録保存することとし、発掘担当者には林幸彦があたり、昭和56年５月25日より発掘調査を実施する運びとなった。

（事務局）



18－1(25)

第１図　舞台場遺跡地形及び発掘区設定図（１：5,000）

2　調査の概要

遺 跡 名　　舞台場遺跡

所 在 地　　長野県佐久市大字伴野1896―１・２、1897―１、根岸3577―１

発掘期間　　昭和56年５月25日～同年10月９日

検出遺構　　弥生時代後期住居址13棟、古墳時代鬼高期住居址10棟、真間期住居址９棟、国分期住居址20棟、土壙22基、掘立柱建物址４棟、溝状遺構２基、特殊遺構１基

出土遺物　　縄文式土器、弥生時代後期箱清水式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、土鍋、石器、鉄製品、土製品、古銭

調査に関する事務局

戸塚平一郎（佐久市教育委員会教育長）市川弥四郎（教育次長）臼田幸作（社会教育課長）井出喜平（社会教育係長）堀内美喜男（社会教育係）

調査団の構成

（団長）藤沢平治、（担当者）林幸彦、（調査員）白倉盛男、井上行雄、大井今朝太、工藤かよ子、島田恵子、森泉定勝、高村博文（調査補助員）飯島篤、五十嵐博子、小山岳夫、佐々木宗昭、堤隆、三石宗一、茂木智里、本橋宏己、堺益子、（協力者）土屋益子、橋詰操、並木ことみ、丸山勝子、碓井知恵子、篠原つる子、井出うまじ、井出たけ、上野まさ子、木内初恵、松川房子、工藤けさえ、木内千代子、木内やよひ、木内寛子、工藤郷子、掛川祐次、掛川ますい、大井和子、青木久恵、三村美穂子

3　調査日誌

昭和56年５月25日～５月30日、器材の手入れ等準備を行い、現地において発掘区設定のため測量等準備調査を行う。７月16日よりグリッドを設定し重機を使って表土剝ぎを行う。同時に遺構の確認作業も進める。８月より検出遺構の覆土掘り下げを行うと共に、確認精査を併行して行う。遺構の平面図及び土層断面図の作成は、覆土掘り下げに伴って随時実施し、完掘後写真撮影する。これらは、段丘先端部分の発掘区について９月４日まで行なった。

遺構は、さらに南側の水田（トマトを作っていた）におよんでおり、東信土地改良事務所・土地改良区・県文化課・市教委により再三の協議が持たれた後、９月28日より南側の地区について調査を再開した。再開後、10月９日までに遺構の全体図の作成、写真撮影等を終了し、器材を撤収した。

なお、遺物整理・図面修正は、発掘調査中も随時資料室にて行なった。昭和56年10月より昭和57年３月20日にわたって、遺物水洗い、注記、復元、遺物実測、遺物写真、図面のトレス等を行い原稿執筆し、報告書を完成した。　（林幸彦）

II　遺跡の環境

1　舞台場遺跡の地形、地質の概況

佐久平は臼田町附近の標高700m、佐久市伴野で640mの間、東西８km、南北14kmの菱形の高原性盆地であり、その中央を千曲川が多くの支流を集めて南から北へ長辺の対角線状に貫流している。

その佐久平の中心部西端の立科火山のゆるやかな北斜面の山麓傾斜面と沖積平地の交る地点、千曲川左岸の小支流、東立科附近から流出して大字伴野倉瀬で千曲川に合流する宮川の下流部左岸平井部落東方500m地点に舞台場遺跡がある。この宮川の千曲川合流点附近が佐久市の標高で最低の640m以下の地点である。

昭和46年度水田基盤整備が実施され宮川の流路も改修され、その際地層断面を確認することが出来たが基盤は洪積層の相浜層で凝灰質の砂岩・頁岩・礫岩の水平層が相浜の千曲川断崖に好露出しており、根岸の山麓尾根末端部には全般的に分布が見られる。この地層の石突川の河床からナウマン象の歯化石、その他の個所からはメタセコイヤ等の化石を産している。この相浜層の上部には火山集塊岩が厚く重なっている。

伴野の水田地帯は相浜断崖浸触以前の淡水湖底堆積物の微粒子粘土地帯で有機物を含む黒色粘土の厚層があり、これが相浜瓦の原料となっている。

舞台場遺跡附近にはこの黒色粘土層上面に厚さ２～３mの宮川の氾濫原現河床礫を含んだ地層が分布している。

尚相浜断崖には国際保護鳥チョウゲンボウが生息しており佐久市天然記念物に指定されている。

（白倉盛男）

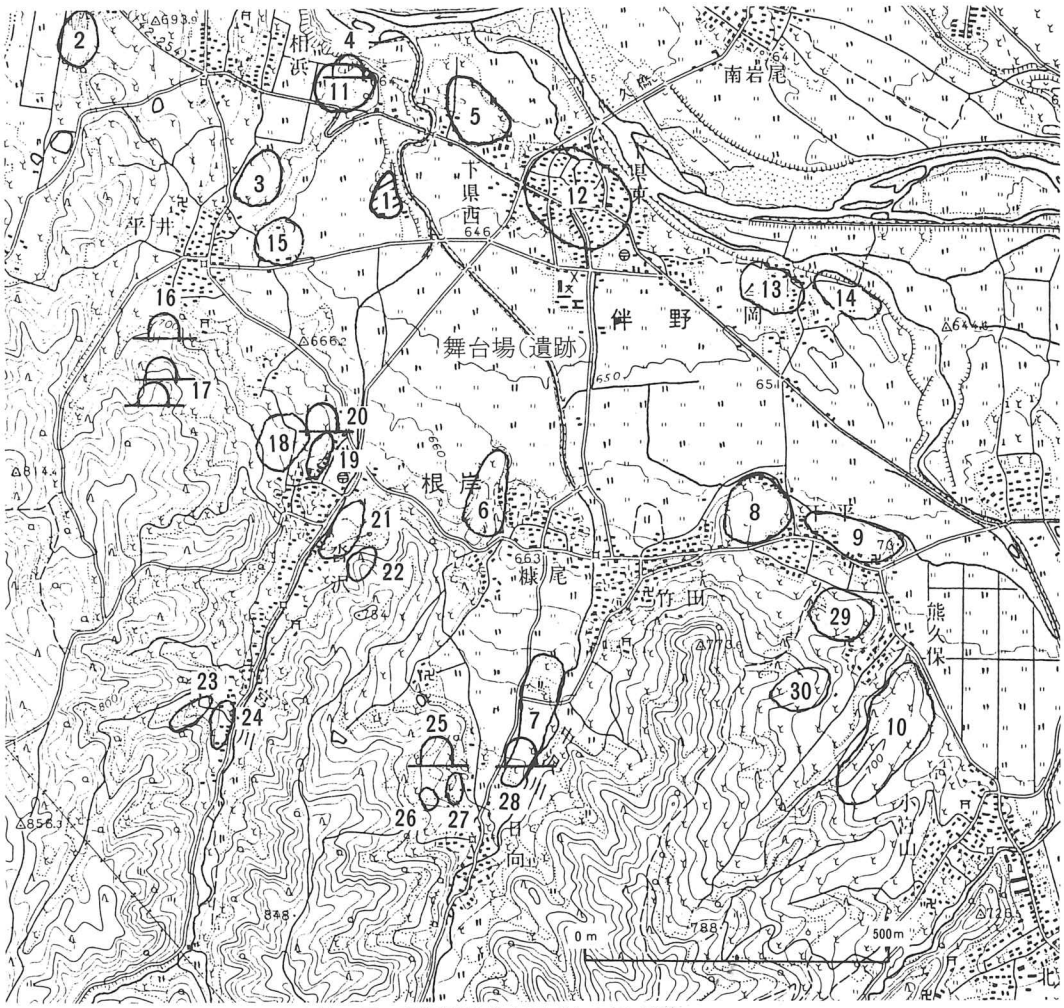
第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	縄	弥	古	歴	備考
1	舞台場	伴野舞台場	段丘		○	○	○	本調査
2	石附	根岸石附	傾斜地			○		昭和55年度調査、窯址
3	小金平	〃 小金平	台地	○		○	○	昭和56年度調査
4	火の雨塚	伴野	〃			○		古墳
5	休石	〃 休石	段丘				○	昭和52年度確認調査、火葬墓
6	伊勢山	根岸伊勢山	台地		○	○		
7	中村	〃 中村	谷口扇状地	○	○	○	○	昭和57年度調査
8	西裏	伴野西裏	台地		○		○	
9	北裏	〃 北裏	〃	○	○	○	○	
10	後沢	小宮山後沢	〃	○	○	○	○	昭和51・52年度調査

2　歴史的環境

岸野地区の遺跡は、立科火山の北傾斜面が南から北へ北流する千曲川流域がつくる沖積低地と接する台地上に多くの遺跡が分布している。

ことに縄文時代の遺跡はこの地点の丘陵上及び谷口扇状地にみられる。沓沢坪の内・大日影A・B遺跡、下平の北裏、小宮山後沢遺跡では縄文前期、中期では大日影・中村遺跡等がある。後期では大日影遺跡で表採されている。また、先土器時代にあたるのではないかと思われる頁岩製の



第2図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

11　東唐松坂遺跡、12　下県遺跡、13　門口遺跡、14　二束遺跡、15　中島遺跡、16　富士塚古墳、17　滝の峯古墳、18　棒名平遺跡、19　坪ノ内遺跡、20　坪ノ内古墳、21　大日影B遺跡、22　大日影A遺跡、23　西の窪遺跡、24　村上遺跡、25　釜塚古墳、26　十二遺跡、27　十二下遺跡、28　墓陵古墳、29　西東山遺跡、30　一の坂遺跡

尖頭器が棒名平遺跡で表採されている。

弥生時代の遺跡は後期にあたるものが多く、この期以降沖積低地にも遺跡の分布がみられるようになる。小宮山の後沢遺跡では36棟、舞台場で13棟の後期の住居址が調査され、伊勢山・西裏・北裏等いずれも後期の土器が多く表採される。

古墳時代の住居址は岸野地区では本遺跡で発掘調査されたのみであるが、唐松坂・坪ノ内遺跡等でもみられるようである。石附遺跡では古墳時代の末にあたるであろう須恵器の窯跡が調査され、今後の調査で石附窯産の須恵器が他遺跡で出土することが期待される。また古墳はいずれも円墳で副葬品は玉類、剣等であるが火の雨塚古墳では埴輪が出土している。

奈良時代は、本遺跡・小金平遺跡で住居址が確認されている。

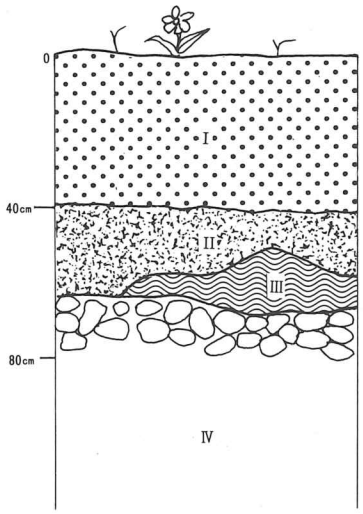
平安時代は、弥生・古墳時代の遺跡等とはほぼ重なり広範囲の分布を示している。ここで注目される遺跡に休石遺跡があり、須恵器の大甕と小形の甕・長頸壺が組合せになり配石群を伴って出土している。火葬墓としての性格が現在捉えられている。　（工藤　かよ子）

III　層　　序

図示した模式図にはみられないが、基盤をなすのは相浜地区一帯に広がる頁岩の相浜層であり、その上に数メートル堆積したIV層黄褐色を呈す礫層上に舞台場遺跡がある。

台地の先端部つまり北域は礫層上にII層暗褐色土層が堆積しており、遺構構築面はII層である。遺構覆土は若干黒味の強い黒褐色土層で、粘性が強く、握りこぶし大の河床礫が混入しているため、遺構確認及び掘り下げは困難を極め、遺構確認は礫層上面まで下げて行った。そのためII層暗褐色土層に床面ないし底面を持つ遺構は把握できず未確認に終ったものもある。(特に浅い国分期のものに多い。)

南域は礫層上に砂層の第III層明茶褐色土が堆積し、水田下のため鉄分を含む層で覆土との差異が明瞭であり砂層のない所は礫層上で確認することができ容易であった。



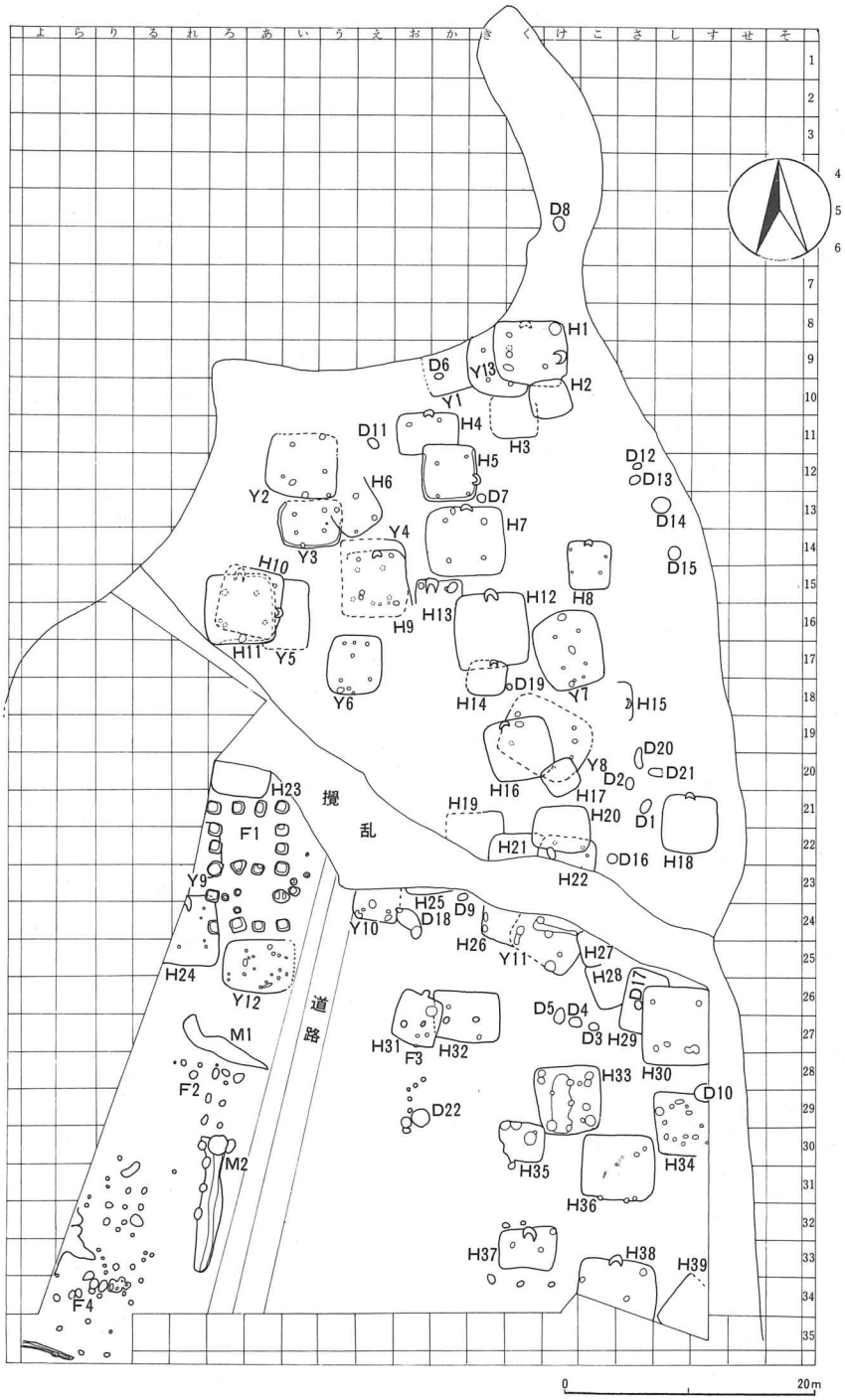
第3図　層序模式図

I層　黒褐色土層　（耕作土）

II層　暗褐色土層　（粘性あり、砂粒・礫含む）

III層　明茶褐色土層（粘性なし、砂層）

IV層　黄褐色礫層　　（工藤かよ子）



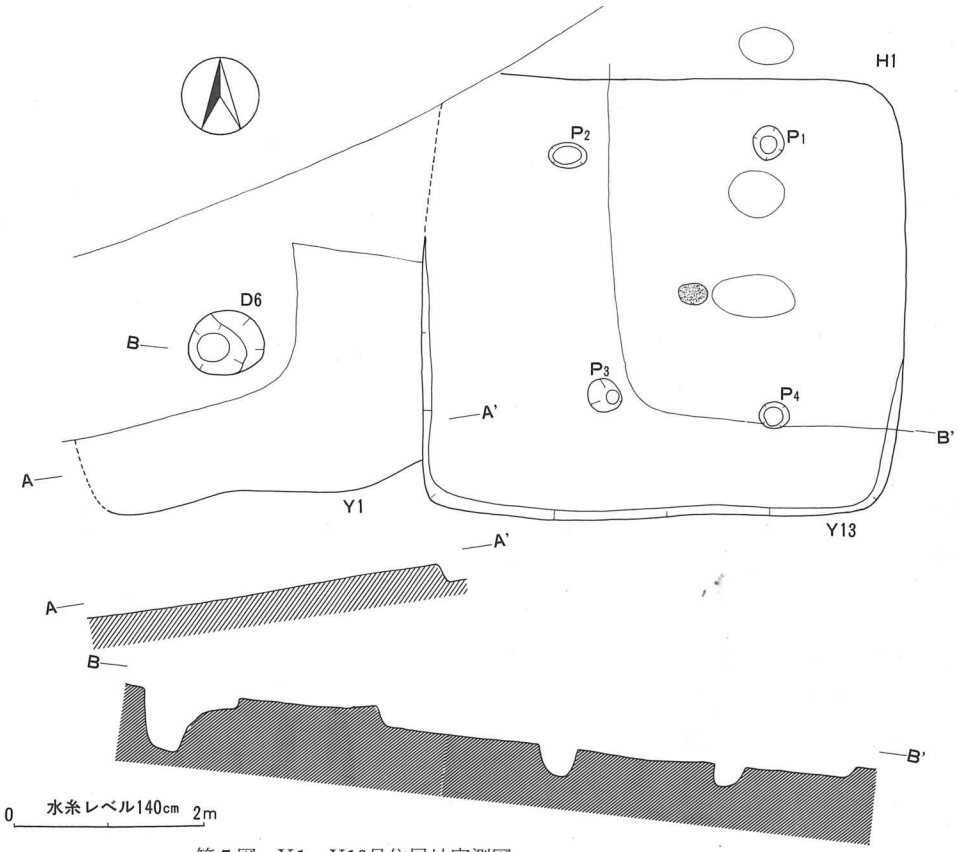
第４図　舞台場遺跡遺構全体図（１：600）

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居址

1）Ｙ１・Ｙ13号住居址

Ｙ１・Ｙ13号住居址は、お～き－９・10グリッドからＨ１・３、Ｄ６と重複して検出された。Ｙ１は北壁が崖で崩落、東側はＹ13に破壊され、黄褐色層を主体とする堅緻な床面が僅かに残存するのみである。床面上には弥生時代の壺・甕・坏形土器破片が分布していた。Ｙ13は北東壁を破壊されるが、南北460cm、東西510cmの隅丸方形を呈し、西側に黒色土、東側に暗褐色土が充填される。床面、南壁面は礫層上に暗褐色土を敲いて平坦に構築されるが、東西壁は不明瞭であった。柱穴は円形状のものが４個あり、床面中央やや西寄りには焼土範囲が分布していた。遺物は覆土上層で平安時代の土器がみられ、弥生土器は床面に密着して小破片が少量検出された。



第５図　Y1・Y13号住居址実測図

2）Ｙ２号住居址

遺跡の北西、グリッドあ～う―11～13に位置し、南壁でＹ３号住居址北壁と重複し、上部影響をうけ、東にＨ６号住居址、北には未確認に終わったが国分期の住居址があり、Ｙ２号住上面にも住居址があったと思われ、国分期の土器片が多量に混入しており、また住居址範囲の把握も困難なものとなり、不明確な住居址プランである。

規模は南北420cm、東西560cmを測り、歪の大きい隅丸長方形を呈す。壁残高は南壁側が残存するが北壁は残らず０～24cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、礫層上面を床面としており、南側及び中央部は暗褐色土を敲いた床面が確認された。柱穴は６個あるが不規則な配置で比較的深さ10～20cmと浅く、プラン不明瞭なこともあって柱穴の検出も困難であった。

炉址は検出されていない。

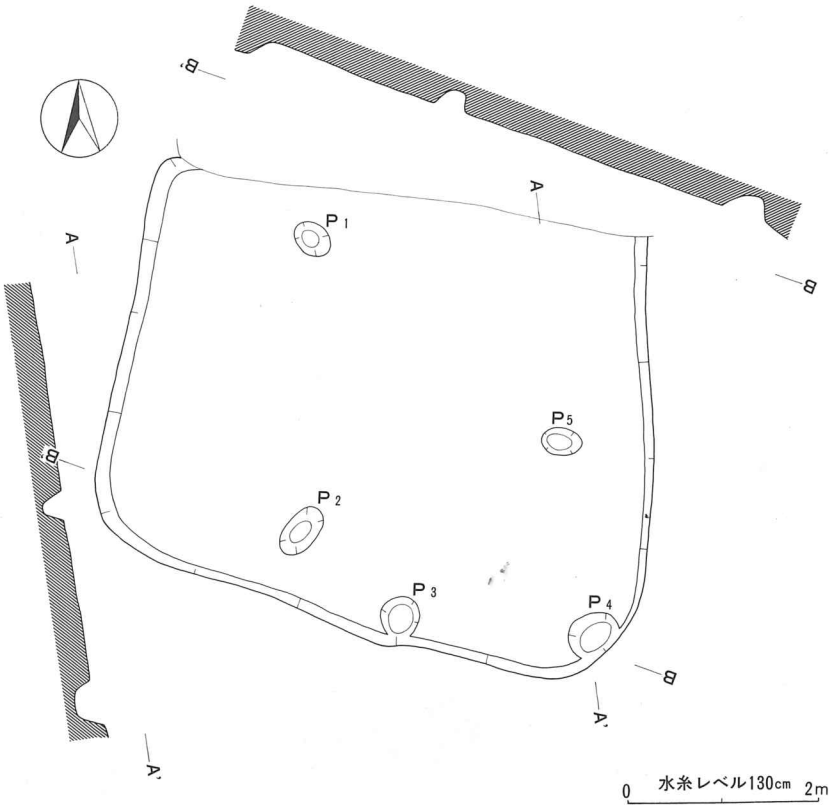
出土遺物は、壺・甕・高坏形土器があり、南西区に集中して出土している。壺・高坏形土器は塗彩される。甕形土器は破片のみであるが、大・小あり波状文が施されている。

3）Ｙ３号住居址

い・う―13・14グリッドに位置し、北東隅でＨ６号住居址により上部を壊されている。壁残高が少なく、北側は床面範囲のみで一部推定線である。

住居址規模は、南北376cm東西500cmを測る隅丸長方形を呈し、主軸方位は真東を指す。

覆土は暗褐色を呈し、粘性なく小礫を多量に含む。床面は礫層上に暗褐色土で固めており堅緻であ

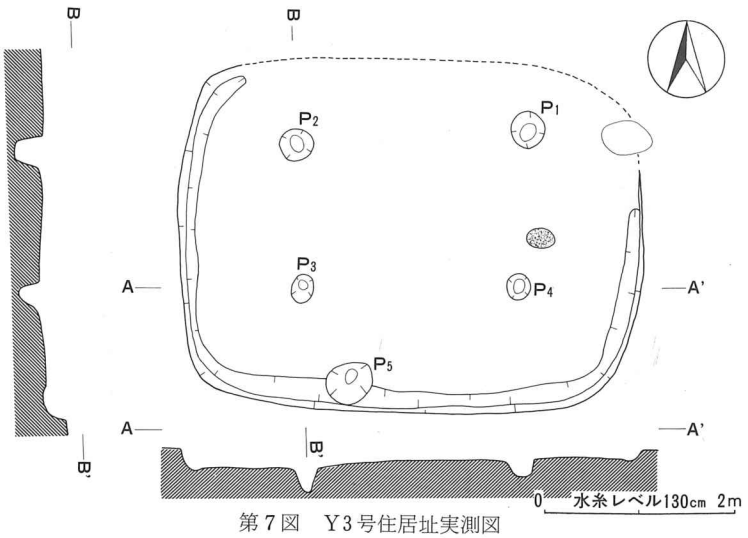


第６図　Ｙ2号住居址実測図

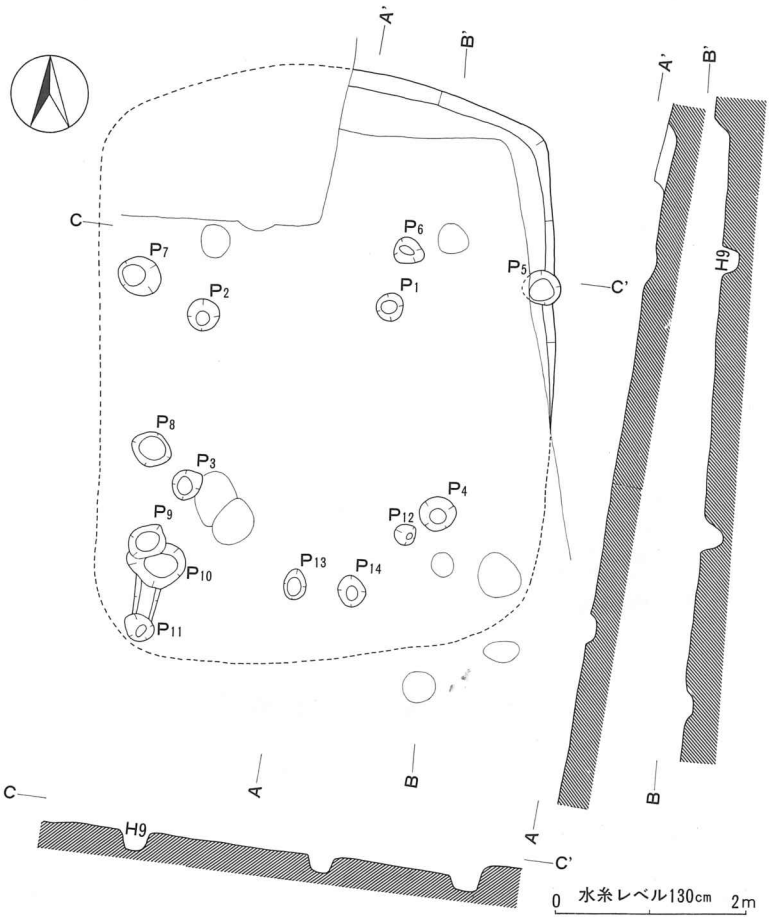
る。付属施設としては、周溝が東壁下中央から南・西壁下に巡っており、幅12～32cm、深さ2～13cmを測る浅いものである。柱穴は計5個を数え、四隅と南壁下中央より西よりにあり、径30cm前後の円形を呈し、南壁下のP_5は貯蔵穴かと思われる。

炉址は、西側中央床面に焼土範囲がみられ、南北20cm東西30cm深さ4cmの楕円形を呈す。

出土遺物は壺形土器と高坏になると思われる土器があるだけで量は少ない。壺形土器は塗彩され、口辺部が2段に外反し、胴上部が球胴形に張るものである。



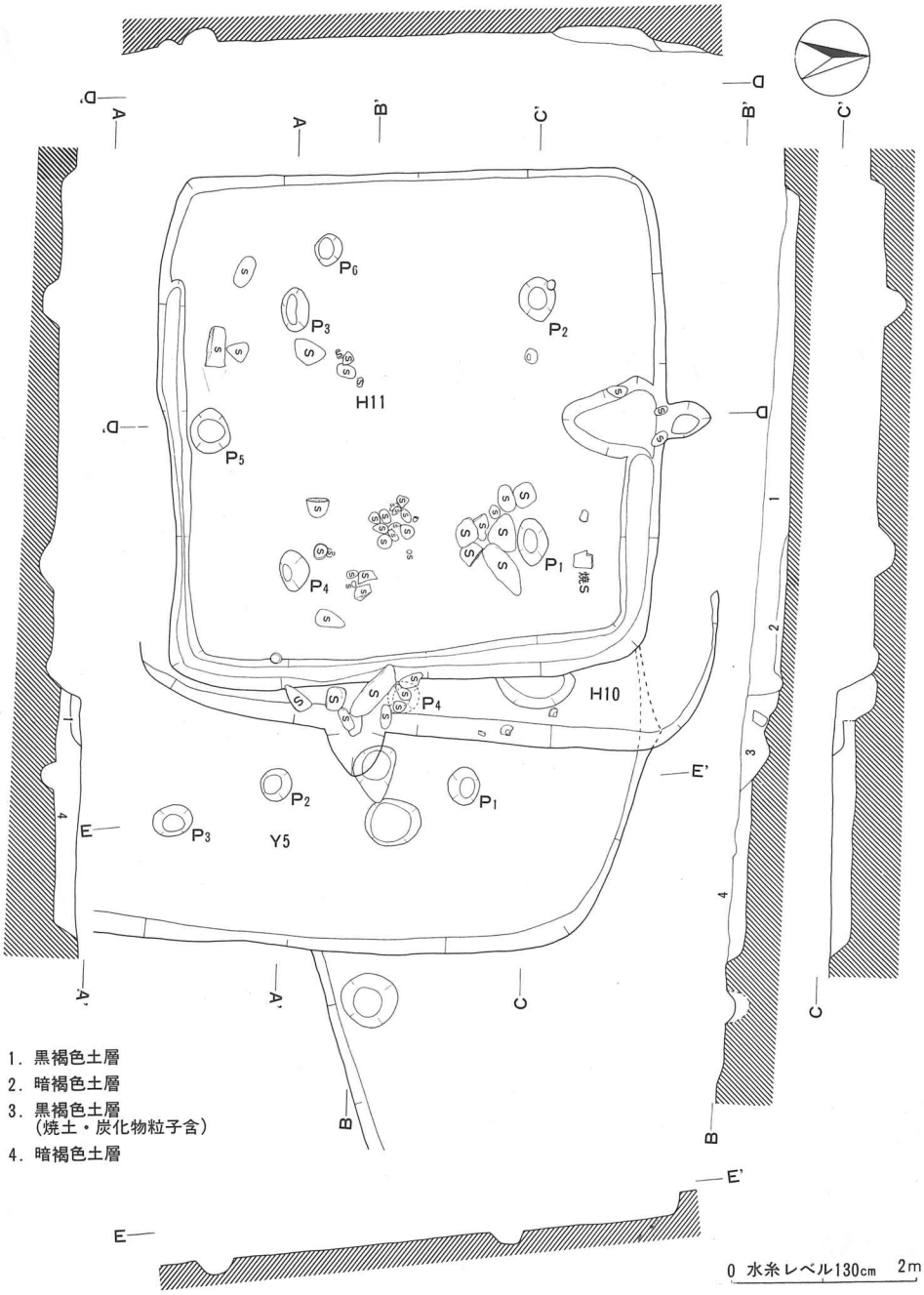
第7図　Y3号住居址実測図



第8図　Y4 号住居址実測図

4）Y4号住居址

グリッドう・お―14～16に位置し、H9号住居址が略同位置に重複し、他にも重複しているため、北東区の一部だけ残存し、床面もH9と同レベルのために壊されている。覆土は暗褐色を呈し、小礫を含む。柱穴は計14個あり、P_1～P_4が主柱穴と思われるが、重複



第９図　Ｙ５・Ｈ10・Ｈ11号住居址実測図

関係が著しく、Ｈ９とＹ４号住居址の床面が同レベルでであるためと生活面の把握しにくい条件と重って、両者の柱穴が同時に検出される結果となり、遺物で判断できる柱穴以外その帰属の明らかでないものがある。同位置に柱穴が各２個あり複雑である。P_{13}・P_{14}は入口柱穴、P_{10}は貯

蔵穴として使用されたものではないかと思われる。

出土遺物は弥生式土器であり、壺・甕・坏形土器がある。土器量は多くＨ９号住居址にも多量に混入していた。壺形土器は胴部破片のみで、頸部に櫛描横線文、胴部外面に赤色塗彩が施こされる。甕形土器は外面に櫛描波状文、簾状文を施こし、口辺部全体が外反するものである。坏形土器は口径の大きい深いもので、全体に内湾気味に外傾し、上部で直立気味になり、塗彩される。

５）Ｙ５号住居址

グリッドあ・い―15～17に位置し、Ｈ10・11号住居址と重複し、西側を破壊され、南壁側は攪乱されている。隅丸長方形を呈するものと思われる。壁残高は20～26cm、覆土は暗褐色を呈し、床面は暗褐色土を敲いている。柱穴は計４個あり、長径36～44cmを測る円形ないし楕円形を呈し、深さ13～21cmを測る。P_4についてはＨ10号住居址により上部破壊され、下部のみ検出でき、径32cm深さ17cmを測る。炉は破壊されたものと思われる。

出土遺物は、弥生式土器で、実測できたものは、甑形土器下部と甕の底部のみで、破片では波状文の甕形土器、塗彩された坏形土器がある。量も少なく、良好な資料はない。

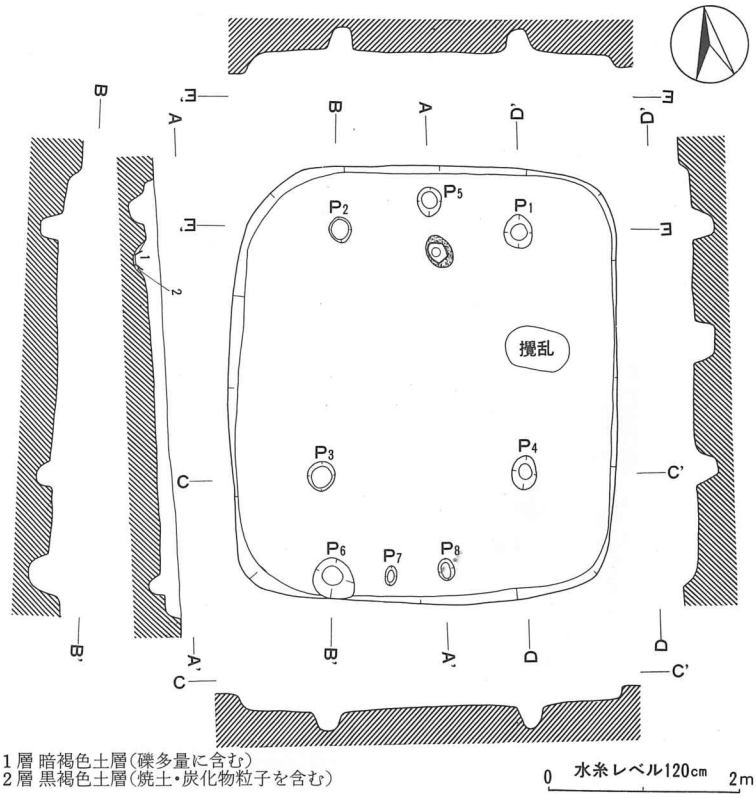
６）Ｙ６号住居址

う・え―16～18グリッドに位置し、重複関係はないが東側中央に攪乱土壙がある。主軸方位Ｎ－７°－Ｅ。

隅丸長方形を呈し、南北460cm東西416cmを測り、壁は９～20cm程残る。

覆土は暗褐色を呈し、粒子細かく粘性なく、礫が多量に混入している。礫層を掘り辺んでおり、暗褐色土を敲き堅緻な床面をなしている。

柱穴は計７個あり、主柱穴はP_1～P_4で略長方形に配置し、P_1～P_3は円形で



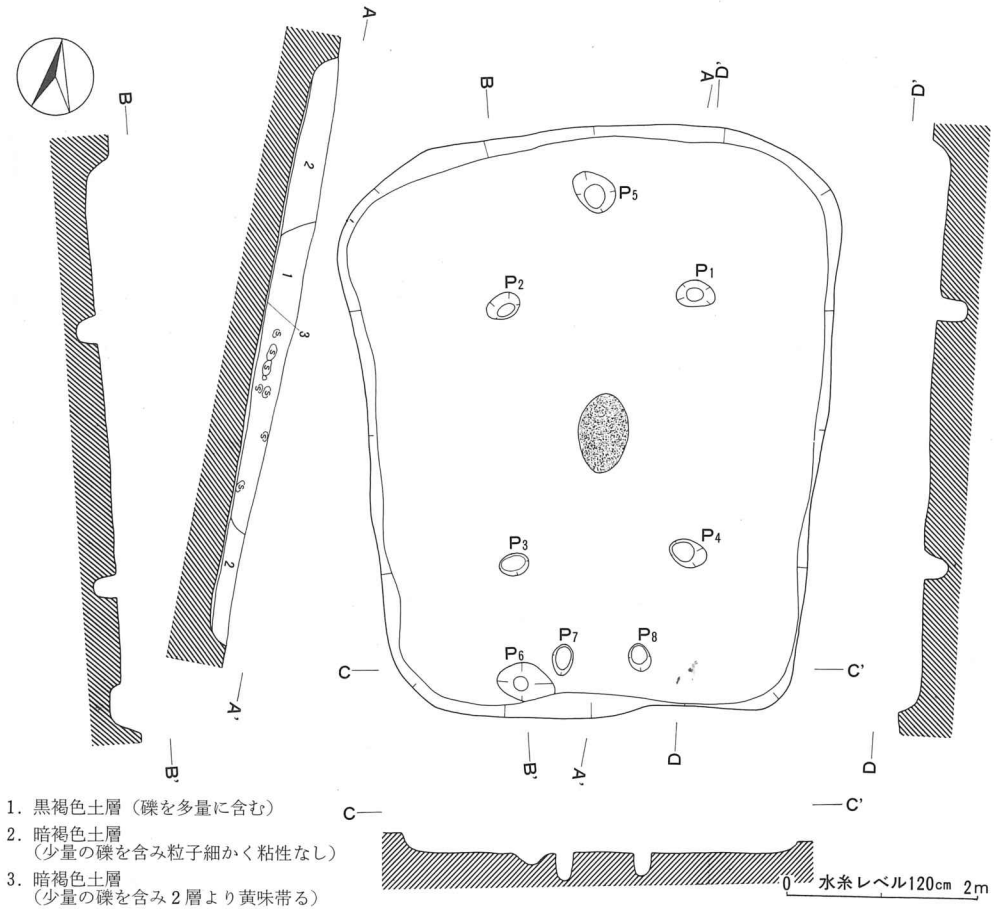
第10図　Ｙ6号住居址実測図

28～34cm、深さ16cm、P_4は長径36cmの楕円形で深さ26cmを測る。入口柱穴が南壁下中央に２個、西よりに貯蔵穴があり、径46cmの円形を呈し深さ22cmを測る。

炉は北側中央にあり、南北36cm東西32cm深さ14cmを測り、壺形土器の頸～胴部を環状に埋置している。

出土遺物は弥生式土器であり、甑・壺・甕・高坏形土器・土製円板がみられる。甑形土器は底部に一孔のものでミガキが施こされる。壺形土器は無彩と塗彩品があり、塗彩品は、頸部にＴ字文が施こされ、口辺部外反し、胴中位下に明瞭な外稜をもち、こけて底部に窄まるものと、無彩で頸部に簾状文・波状文を施こすものがある。甕形土器は折返し口縁に波状文のものがある。また口唇部に縄文を施こした破片がある。遺物は床面より７～10cm程上面で出土し、南側に多く分布している。

７）Ｙ７号住居址



1. 黒褐色土層（礫を多量に含む）
2. 暗褐色土層
（少量の礫を含み粒子細かく粘性なし）
3. 暗褐色土層
（少量の礫を含み２層より黄味帯る）

第11図　Ｙ7号住居址実測図

グリッドく～こ—16～18に位置し、重複関係はない。覆土内に礫層があったため、住居址範囲の把握が困難で北東部は少し掘りすぎている。

主軸方位はN—12°—Wを指し、不整の隅丸長方形を呈し、南北626cm、東西490cmを測る。覆土には、礫層の黒褐色土、床面近くに暗褐色土が堆積し3層は敲き床で暗褐色を呈し堅緻である。

主柱穴P_1～P_4で中程に長方形に配置され、東西方向に長径をもち32～42cm深さ21～34cmを測り楕円形を呈する。北壁下中央に棟持柱、南側P_7・P_8が入口ピット、南壁下西よりに貯蔵穴をもち計8個ある。

炉址は住居址中央に位置し、南北82cm東西52cmの楕円形範囲に焼土がみられ 床より3cm窪む。

出土遺物は弥生式土器であり、甑・壺・甕・片口坏形土器が出土しており、土器の破片量は多い。貯蔵穴内から甕形土器がでる他、南東区に土器が集中し、床面ないし数cm上に分布している。

甑形土器は底部に一孔を有し、外反気味に底部に窄まり、ミガキ調整されている。壺形土器で図示したものは外傾外反する口辺部が口縁で内湾直立し無彩である。他に塗彩され頸部に簾状文を施こす大形品の破片もある。片口坏は直線的に外傾する。

8）Y8号住居址

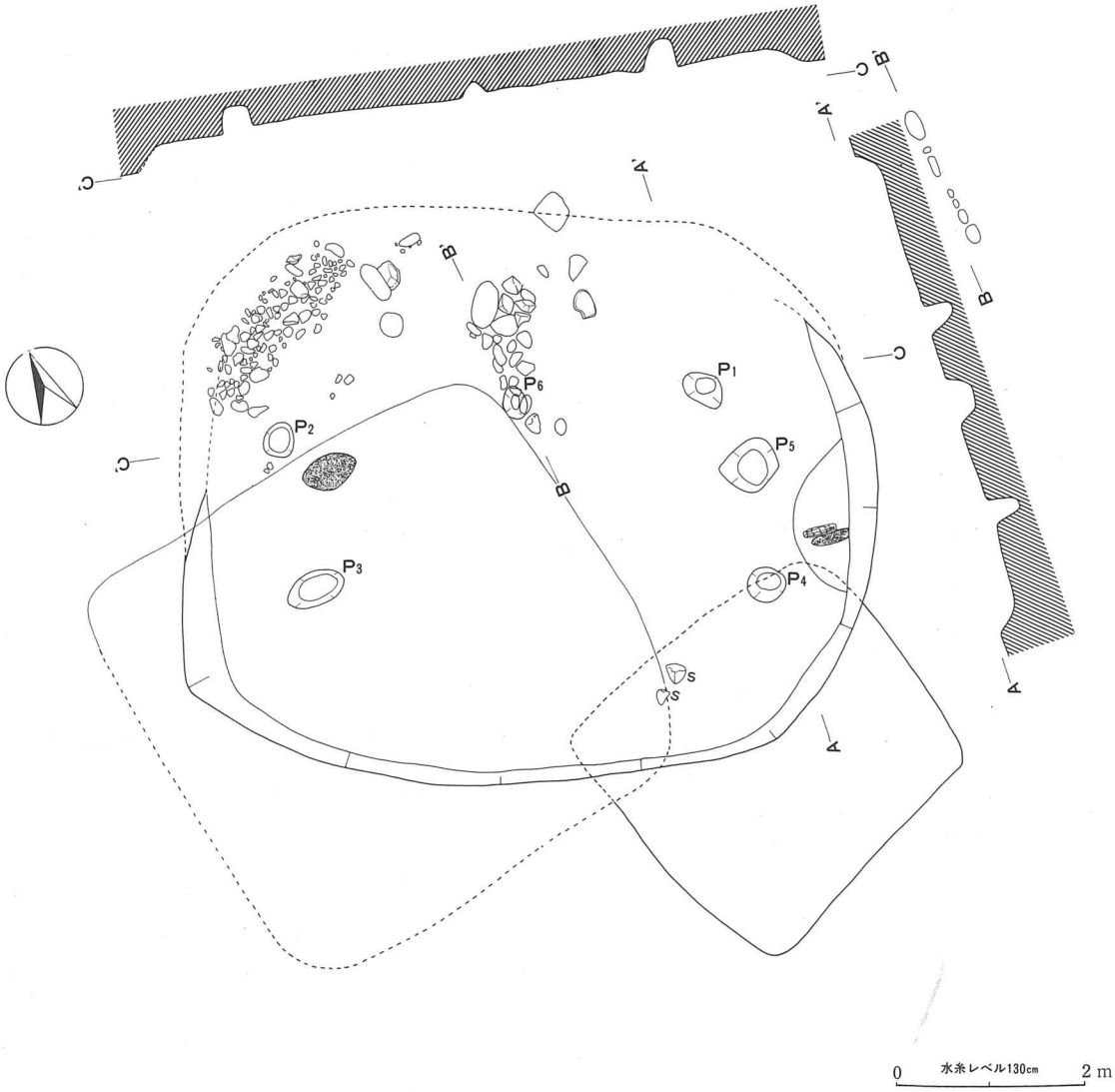
グリッドく～け—18～20に位置し、上部にH16・H17号住居址が南側で重複しており、住居址プランにほとんど影響していないが、Y8号住居址上面にみられた礫群を壊している。この礫群により、北側の住居址範囲がつかめず、不明瞭となった。主軸方位はN—68°—Eを指す。

床面は礫層上の暗褐色土を固めており、床面直上には暗褐色土がみられるが、覆土は、黒褐色を呈し、礫を多量に含む。

柱穴は計6個あり不規則な配置をしており、主柱穴にあたる位置にP_1・P_3があるが他の2本は検出されておらず、貯蔵穴もみあたらない。P_4・P_5は入口柱穴と思われる。P_1・P_3は長径50・60cm、深さ32～26cmの楕円形を呈す。

炉址は奥壁寄り中央にあり、長径60cm短径36cm深さ7cmの楕円形範囲に焼土がみられた。

本住居址は弥生式土器を出土しているが、上層は土師器が混入している。壺・甕・坏・高坏・深鉢形土器がある。壺形土器は小形品で頸部簾状文、胴上半に波状文を施こす無彩のものである。甕形土器は大・小あり、口辺部外反する波状文と簾状文の文様構成である。坏形土器は塗彩され口辺部内湾して外傾する。実測できなかったものの高坏の頸部が4個体ある。なお、壺形土器には、塗彩の大形品の破片もあり、頸部にはT文字が施こされる。深鉢形土器とした48—6は、内外面塗彩されるものである。その他土製円板が1点出土している。



第12図　Y8号住居址実測図

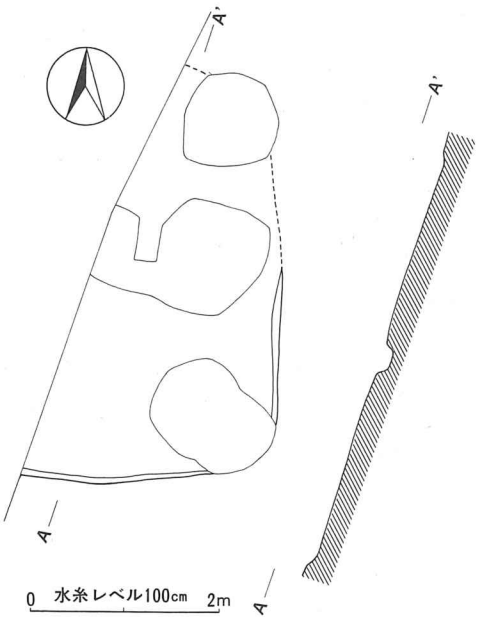
9）Y９号住居址

グリッドれ・ろ・あ―21～23に位置し、Ｆ１と重複し東側を壊されており、西は区域外である。壁残高も０～10cmで南側が残存するだけである。

住居址規模は南北250cmを測り、隅丸長方形を呈すものと思われる。床面は平滑で暗褐色土層が固められ、覆土は黒褐色土層である。柱穴は検出されない。

出土遺物は弥生式土器があり、南側の床面に分布している。量は少ない。器種としては、甑、壺・甕形土器がある。甑形土器は底部を欠損し、口辺部が略直線的に外傾するので内外面ミガキ

が施こされる。甕形土器は口辺部が外反し、外面に波状文を施こす。図示できないが、壺形土器は塗彩されている。



第13図　Y9 号住居址実測図

10）Y10号住居址

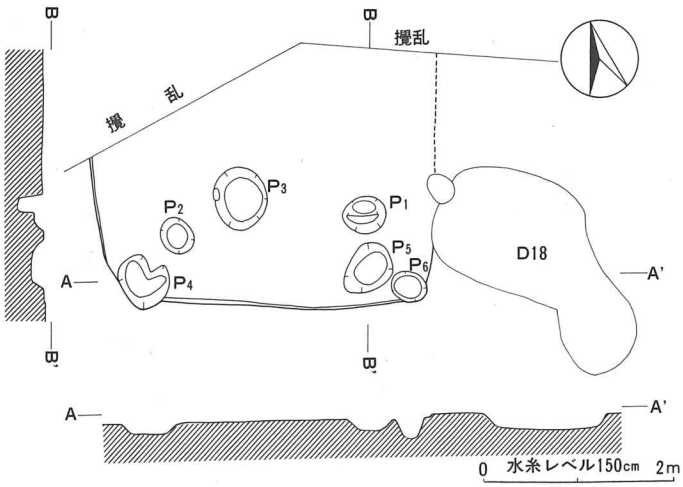
え・お—23・24グリッドに位置し、D18号土壙が東南でわずかに重複し、北側は大半が攪乱され、壁残高も少なく、残存状態はよくない。

プランは、隅丸方形を呈し、東西366cmを測る。床面は、ほぼ平滑で堅緻な状態であるが、浅いため多くの攪乱をうけている。

柱穴は計6個あるが、攪乱されていたものもあり、伴うかどうか不確実であるが、P_1、P_2は主柱穴と思われ、P_1は径46cm、深さ28cmを測り、P_2は径28cm、深さ13cmを測る。

炉は検出されず、攪乱部にあったものと思われる。

出土遺物は弥生式土器であり、壺・高坏形土器が出土している。実測できたものは高坏形土器脚部のみで、直線的に外傾して開き裾部で外反するものである。他に小形高坏の脚で全体に外反して開くものがある。外面はいずれも赤色塗彩される。



第14図　Y10号住居址実測図

11）Y11号住居址

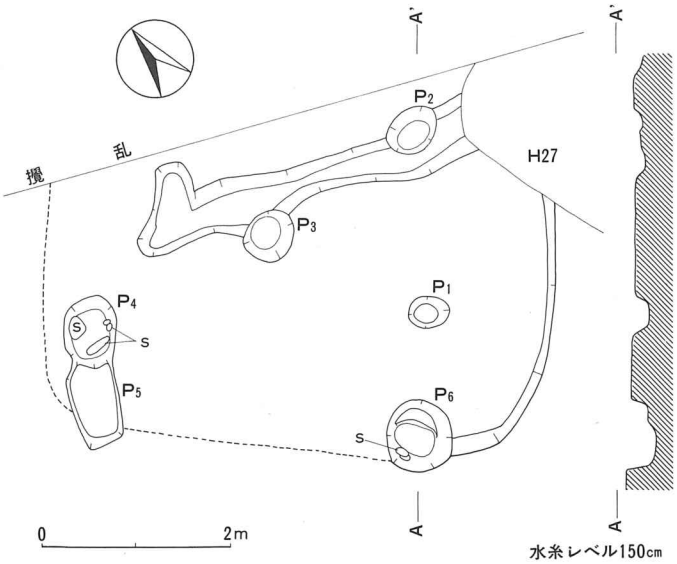
グリッドく・け—24・25に位置し、H27号住居址及び溝状遺構により東側を壊され、西側は住居址範囲がつかめなかった。

覆土は黒褐色を呈し、床は明茶褐色砂質の床が固められていた。

柱穴は計6個あり、P_1・P_2が主柱穴と思われ、長径44・60cmの楕円形で深さ21cmを測る。P_6は貯蔵穴で径76cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。

炉址は検出されず、攪乱により除去されたものと思う。

出土遺物は弥生式土器で、壺・甕形土器が出土し、実測できたのは甕形土器である。甕形土器は大・小あり、波状文と簾状文の文様構成で、口辺部が外傾外反するものである。



第15図　Y11号住居址実測図

12）Y12号住居址

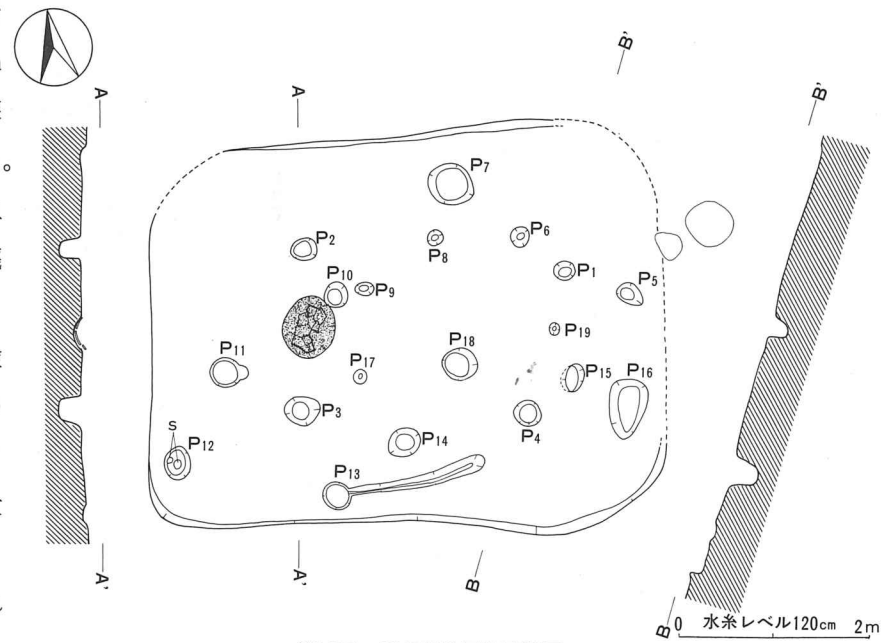
グリッドろ・あ・い—25・26に位置し、重複関係はない。壁残高が少ないためプランが不明瞭である。隅丸長方形を呈し、主軸方位N—80°—Wを指す。規模は東西544cm、南北430cm、壁残高0～10cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、明茶褐色土層を固めて、ほぼ平滑な床面である。炉は西側中央に位置し、南北66cm、東西56cmの楕円形を呈し深さ5cmを測る。炉底に大形の壺形土器胴部の一側面を敷いている。

柱穴は19個あり、P_1～P_4が主柱穴であり、径23～28cmの円形ピットで深さ20～26cmを測る。

出土遺物は弥生式土器で、壺・甕形土器がある。

壺形土器は、塗彩された大形品の胴部である。

甕形土器は、大小の器種があり、波状文が施こされている。



第16図　Y12号住居址実測図

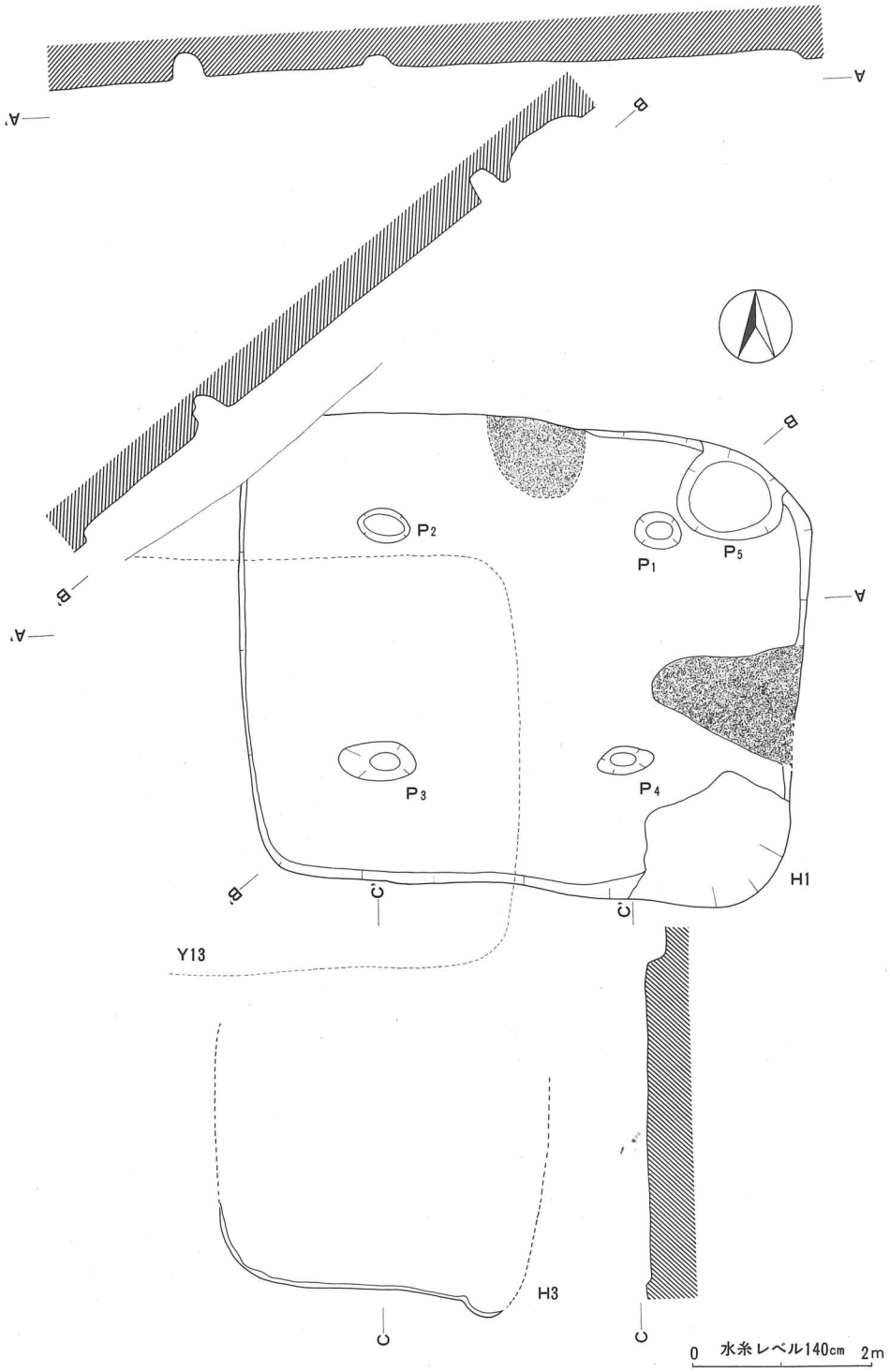
13）Ｈ１・Ｈ２号住居址

Ｈ１・Ｈ２号住居址は、き・く・け―８・９・10グリッドに位置し、Ｙ13と重複する。Ｈ２は、Ｈ１の一部を破壊するため、新旧関係はＨ２→Ｈ１→Ｙ13の順序となる。Ｈ１は南北524cm、東西638cmの隅丸方形を呈し、確認面からの壁高は南側で10cmを測るが、北壁は、ほとんど残存しない。長軸はＮ―95°―Ｗを示す。覆土はおおむね黒褐色土によって構成されるが、詳細な土層分割は不可能であった。床面は礫層上に黒褐色土、茶褐色土を敷きつめて平坦化をはかっており、特にＹ13の重複箇所では３～４cmの貼床が認められた。壁面も礫層を利用して極めて堅固に構築され、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。ピットは総数で５個検出され、P_1～P_4が柱穴、P_5が貯蔵穴であったと考えられる。P_1～P_4は住居址の四隅に規則的に配され、P_6はP_2とP_3のほぼ中央に位置する。規模は長径で54～88cm、短径で32～50cmの楕円形を呈するものが多く、深さは20～30cmを測る。P_5は北東コーナー部に位置し、120×100cmの不整形を呈する。底面は丸味を帯び深さは25cmを測る。

カマドは、北壁中央部と東壁中央部の２箇所から検出された。北壁側のカマドは、大方が削平されているため原形は明らかでないが、床面上に５～６cmの窪みを有し、その内部及び周辺に多量の焼土の散布が認められた。また、東側のカマドは、北壁下の床面を長径172cm、短径90cmの楕円状に約20cm掘り入んで構築されている。遺存状態は比較的良好で、焚口～煙道にかけての長さ330cm、横幅180cmを測り、暗褐色土（第４層）を断面で台形状に盛り上げて構築されている。天井部の前部には大型の河原石が「コ」の字状に３個配されており、器設部となっていたと考えられる。また燃焼部には暗褐色土（第２層）が用いられたと思われる。総じて東側カマドには、炭化物、焼土が極僅かしか認められず、強い燃焼を受けた痕跡もないことから長期にわたる使用は考え難い。遺物は極めて散慢に分布し、覆土上層には平安時代の土師器（甕・坏形土器）が混入し、古墳時代後期の土師器（甕・鉢・高坏・坏）は北側のカマドを中心に覆土下層、床面上に集中して検出された。Ｈ２号住居址は床面が辛うじて確認されたのみである。床面は礫層上に暗褐色土を敲いて構築され、炭化物の付着が著しい。カマドはみられず、遺物も小破片のみである。

14）Ｈ３号住居址

き・く―10・11グリッドに位置し、Ｈ２と重複して検出された。本址も、床面及び南壁が確認されたのみで不明瞭な部分が多い。南北長は不明であるが、東西380cmを測り、隅丸長方形を呈したと推定される。覆土は暗褐色土で小砂粒を含み、粘性は強い。床面は暗褐色土をベースとして１～２cmの小石を含むもろい面である。南壁は礫層を利用して構築され、床面から緩い傾斜で立ち上がる。カマドは検出できなかった。遺物は平安時代の土師器、須恵器の坏形土器破片が出土しているが、分布の傾向は確認できなかった。



第17図　H1・H3号住居址実測図

15）Ｈ４号住居址

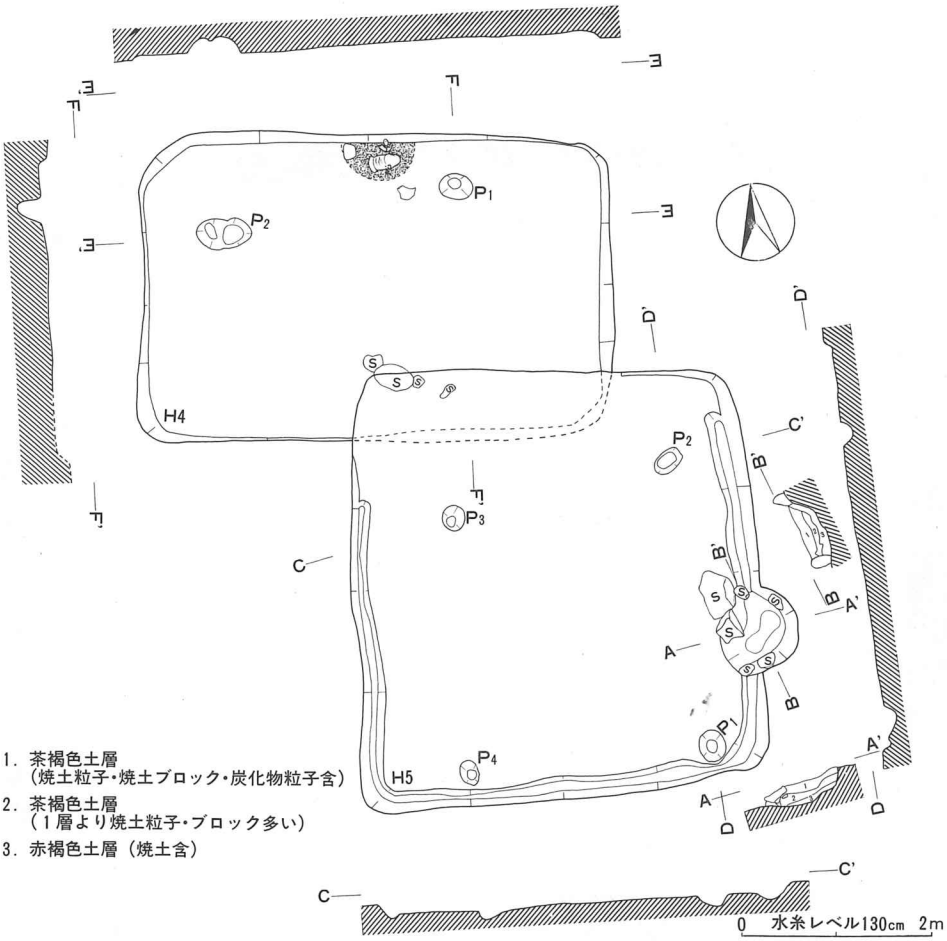
グリッドす・せ―11・12に位置し、Ｈ５号住居址と南東で重複し上部破壊される。壁残高が少く、プランは明確であるが床面は所々攪乱される。規模は南北328cm、東西594cmの隅丸長方形を呈し壁残高６～16cmを測る。主軸方位Ｎ－６°－Ｅを指す。覆土は黒褐色を呈し、床は攪乱をうけ不安定な状態である。柱穴は北側の２個で、P_2西側のピットは後代の掘り入みで元豊通宝が出土。

カマドは北壁中央に接して径40cmの半円形範囲に焼土と支脚石が検出され、長胴の甕が出土。

出土遺物は土師器、須恵器、鉄器がある。実測できたものは土師器甕・須恵器短頸壺であるが他には木葉痕を持つ甕・丸底の坏・高坏形土器等あり、カマド及び付近の床面に分布している。

16）Ｈ５号住居址

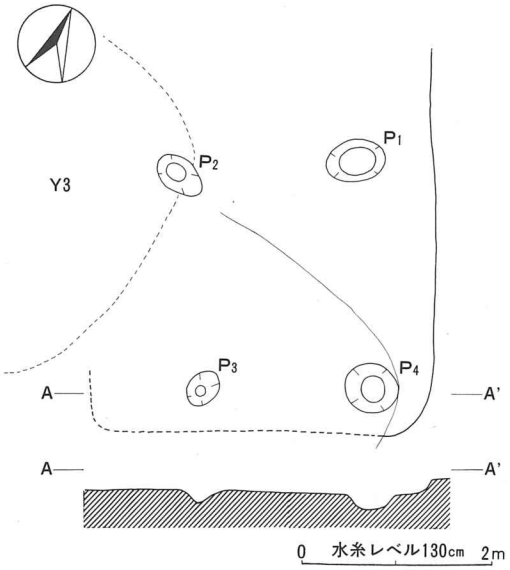
グリッドす～せ―11～13に位置し、北側でＨ４号住居址と重複し、貼り床をしている。重複部



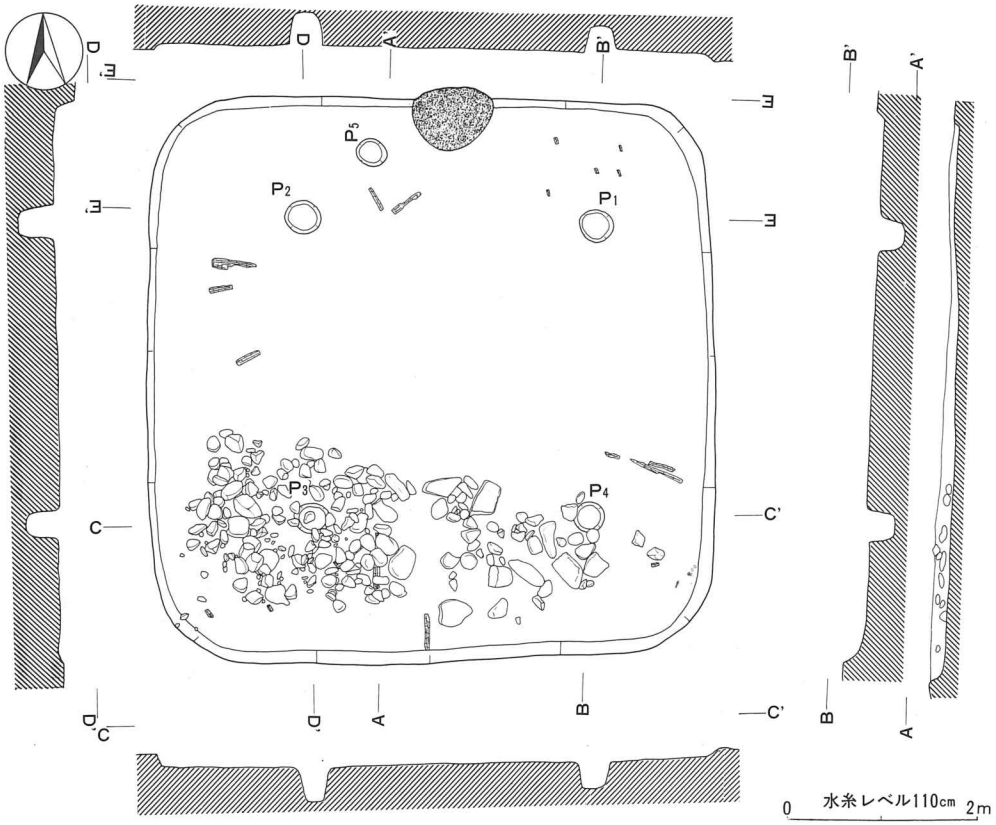
第18図　H4・H5号住居址実測図

のプランはやや不明瞭である。南北500cm、東西432cm、壁残高0～9cmを測る。主軸方位N－88°－Eを指し、東にカマドを築く方形住居址である。覆土は多量の礫を含む黒褐色土で、床面は礫層上の暗褐色土が踏み固められており堅緻平滑であった。柱穴は計4個あり、主柱穴と思われる。長径28～34cmを測る円形ないし楕円形ピットで深さ6～11cmと浅く、全体に南寄りにある。東から南・西壁にかけては幅20～24cm、深さ3～5cmの周溝がめぐる。

カマドは東壁南寄りにあり、壁より40cm程半円形に張り出し、東西84cm南北90cmの円形を呈



第19図　H6号住居址実測図



第20図　H7号住居址実測図

し、カマド袖部・天井には長径20～30cm大の礫を利用している。カマドは茶褐色土で構築し、燃焼部には焼土がみられ、14cm程窪められている。

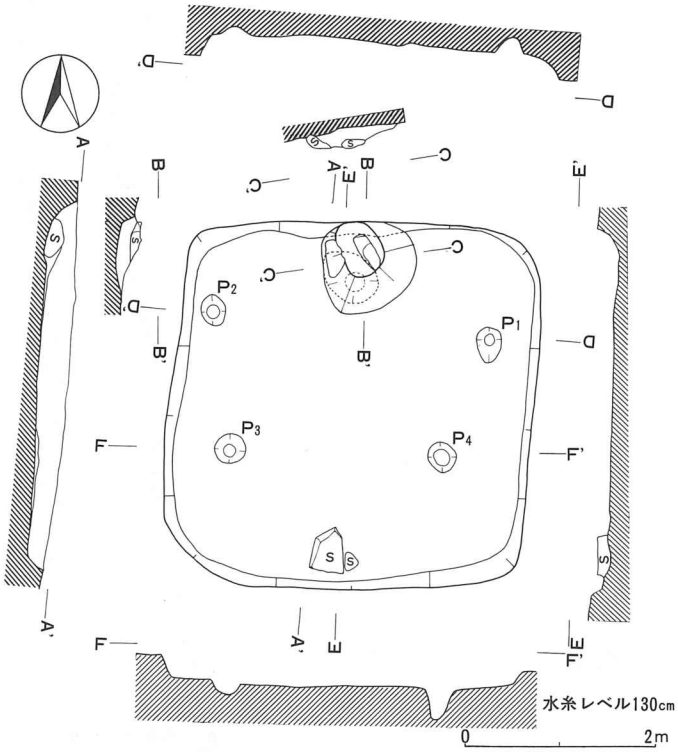
出土遺物は、土師器と須恵器がある。土師器は小形甕で胴部ヘラケズリ調整である。須恵器は坏形土器で、底部平底で、回転糸切り底と底部にヘラケズリ調整が加えらへているものである。カマドからは、武蔵型の器肉の薄い甕形土器片が出ている。

17）Ｈ７号住居址

グリッドお～か―13～15に位置し、重複関係なく壁残高は少ないがプランが明確な住居址である。規模は南北590cm、東西600cmを測る隅丸方形を呈し、N－2°－Eに主軸方向をもつ。覆土は黒褐色を呈し礫を含んでおり、南側は床より５cm程上面に礫群がみられた。壁側には中央方向から放射状に幅８cm、長さ20～80cm程の炭化材があり、北東コーナーでことに多く分布していた。床面は礫層上で暗褐色土が固められ、堅緻平滑である。柱穴は計５個あり、主柱穴は３m四方の略方形に配置され、径34～40cm、深さ24～36cmを測り円形を呈す。P_5はカマドの西南にありカマドに付属するものと思われる。

カマドは北壁中央に接しており、東西93cm、南北75cmを測る。カマド内部が残存していたのみで、甕形土器片と支脚石を検出し、茶褐色を呈しており、袖部にあたるところでは、数個の礫があり、利用されていたようである。

出土遺物は土師器と須恵器があり、量は多い。土師器は坏・高坏形土器があり、坏は丸底から口辺部全体に内湾し、高坏は坏部は外稜をもって直立するもので、脚は柱状・ラッパ状のものと二種ある。須恵器は、丸底で外陵を有すものがあり、他は外面格子目、内面すり消し円文の甕形土器の破片がある。



第21図　H8号住居址実測図

18）Ｈ８号住居址

グリッドけ・こ―14・15に位置

し、重複関係はない。規模は南北390cm、東西390cmの隅丸方形を呈し、壁残高は21～28cmを測る。主軸方位はN－7°－Wを指す。覆土は、黒褐色土を呈し礫を多量に含む。床直上には焼土層がみられた。床面は礫層上にあり、暗褐色土を踏み固め堅緻平滑である。南壁下中央に長さ44cm厚さ20cmの鉄平石が置かれていた。柱穴は計4個あり不規則ながら4隅に配置される。長径30～40cm深さ7～24cmを測り円形ないし楕円形を呈す。

カマドは北壁中央にあり、南北96cm、東西100cmの円形範囲に茶褐色土と長さ40cm大の河床礫を袖、天井に利用して構築している。

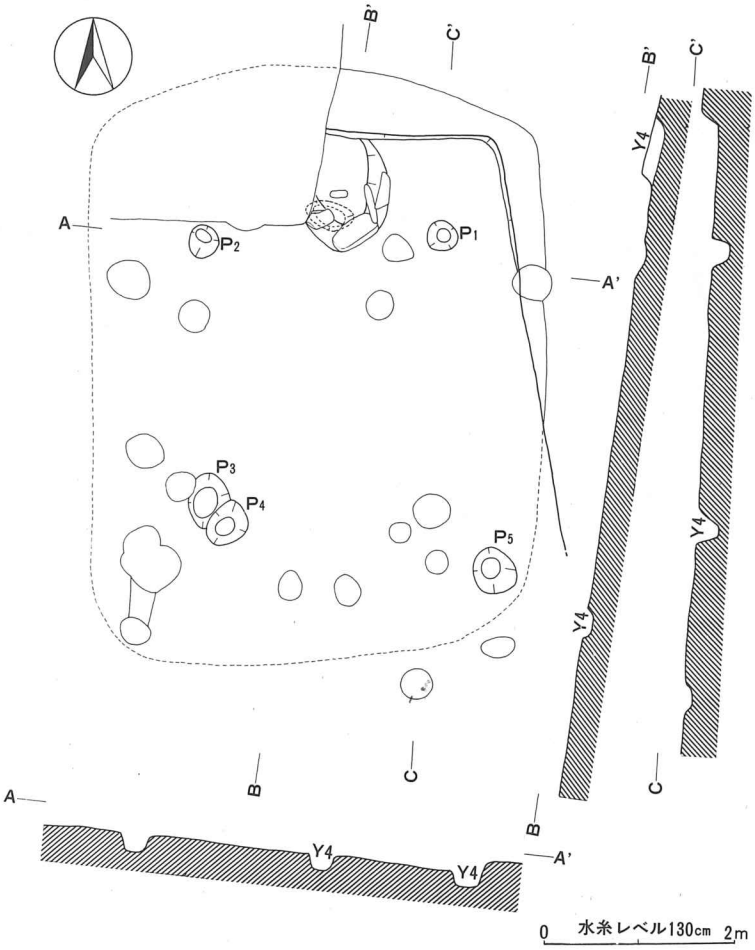
出土遺物は須恵器と土師器があり、須恵器は短頸壺・坏形土器、土師器は高坏形土器脚部が出土している。遺物は南西区床面に多く分布している。須恵器坏は、底部回転糸切り後ヘラ削りされるものである。

19）H6・H9号住居址

H6号住居址は、う・え－12～14グリッドに位置しY3号住北東を切り、他のプランとも重複するため、東壁は明確な範囲が確認できるが、大多数推定プランである。東西360cmを測る隅丸方形を呈するものと思われる。柱穴は長径56～60cmの楕円形を呈し、深さ14～16cmの浅い柱穴が計4個検出される。床面は礫層上の暗褐色土層が固められ堅緻である。カマドは検出されない。

出土遺物は土師器、須恵器と土製円板がある。須恵器蓋形土器は肩部回転ヘラ削りされる。

H9号住居址は、う・お



第22図　H9 号住居址実測図

—14～16グリッドに位置し、Ｙ４号住居址と重複し、西・南は国分期の住居址により壊されプランが不明確である。住居址は北東側のカマドと壁及び柱穴が残存するのみであるため規模等は明らかでない。

覆土は黒褐色を呈し、礫を多量に含む。床面は暗褐色土が礫層上で固められて堅緻であった。Ｙ４号住居址とほぼ同一の床面であるため、しまりのある覆土掘り下げの際生活面の把握ができず、Ｙ４号住居址の柱穴と同時に掘り下げる結果となり、P_1～P_5は柱穴内から該期の遺物が出土したことから帰属を明らかにしたもので、遺物を含まない柱穴については本住居址に伴うものもあると思われるが除外した。P_1～P_3・P_5は径30～54cm、深さ17～22cmを測る円形ピットである。

カマドは北壁中央に設けられ、西側は一部壊されている。南北130cmを測るやや南北に長い円形にカマドは構築され、20～30cm大の河原石を袖部に利用して茶褐色土層で覆れており、燃焼部底面は東西50cm、南北30cm、深さ５cm程窪み焼土層がみられた。

住居址北側からは土師器と須恵器が出土している。土師器は甕形土器があり、大形品は口辺部「く」の字を呈し、胴部ヘラ削りの施こされる器肉の薄いものと、小形で口辺部「く」字を呈し胴部ロクロ横ナデされるものがある。須恵器は口辺部が直線的で外傾せず、底部回転ヘラ切りされる坏形土器と横瓶がある。土器の出土量は多く出土し、南側は後代（国分期）の遺物が混入しプランは把握できないものの遺構があったと思われる。

20）Ｈ10・Ｈ11号住居址

Ｈ10号住居址はグリッドろ・あ—15～17に位置し、Ｈ11号住居址と重複し破壊され、明確なプラン確認ができずに東側壁、カマドのみ検出した。主軸方位Ｎ—102°—Ｅを指し東壁にカマドを持つ。南北740cm、壁残高０～12cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、床面は暗褐色土が固められている。柱穴は北東区に南北90cm、深さ36cmを測るものがある。

カマドは東壁南寄りにあり、Ｈ11号住居址により焚口は壊されており、炭化物・焼土粒子を含む黒褐色土層がしまりのない状態でみられたが、天井・袖部に使用した河原石が残り、煙道部は住居址外に48cm程突出し、燃焼部は18cm程低くなっている。

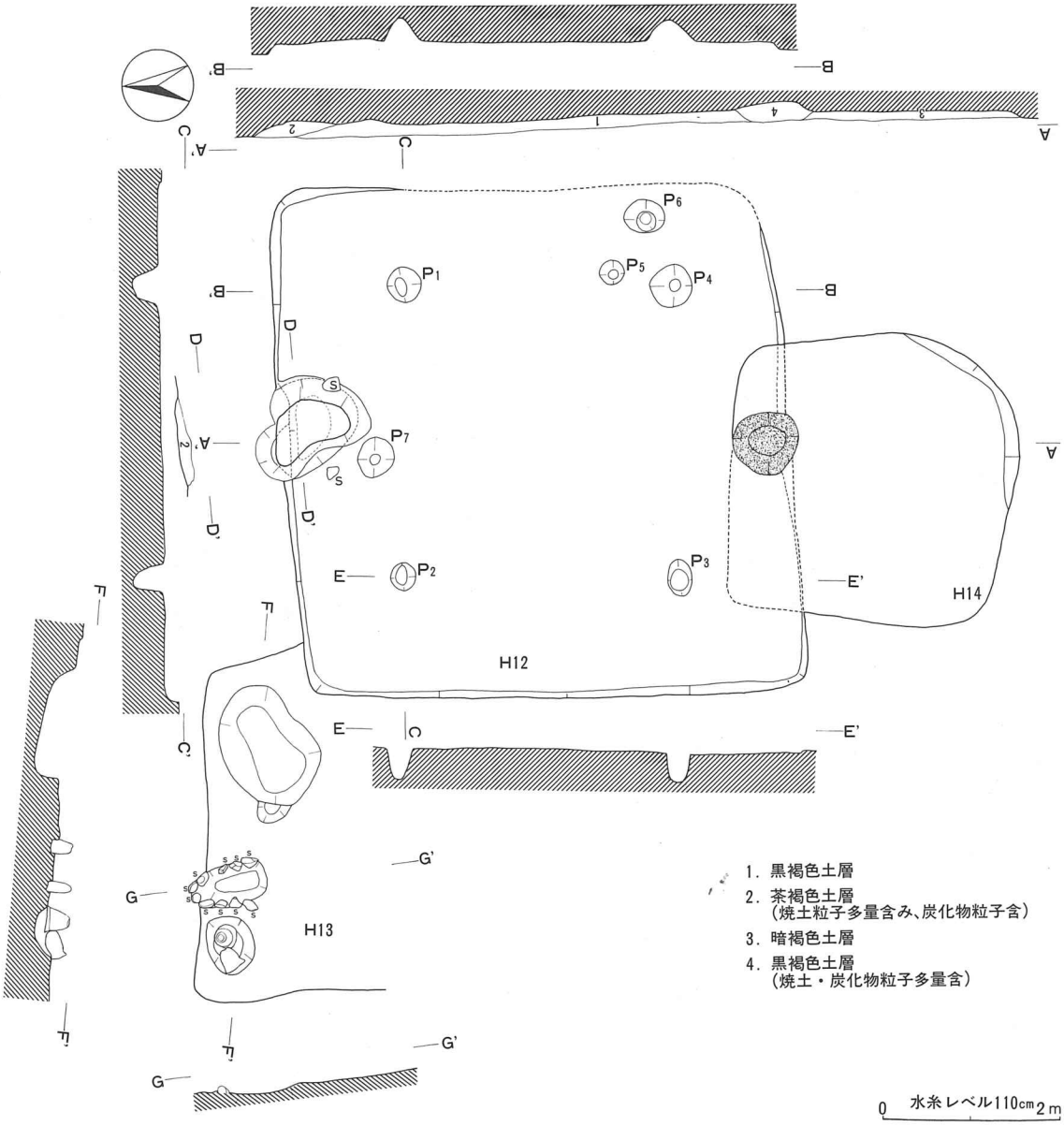
出土遺物は土師器と須恵器がある。土師器は甕・坏形土器があり、須恵器は「止」の刻書された底部ヘラ削りの坏がある。

Ｈ11号住居址はグリッドれ～あ—15～17に位置し、Ｙ５・Ｈ10号住居址を壊して構築している。主軸を北方向にとり、南北550cm、東西550cmの隅丸方形を呈し、覆土は黒褐色を呈し、床面より20cm程上面に礫を多量に混入していた。床面は東側が高く堅緻であり、暗褐色土を敲いている。カマドの東から、東・南壁にかけて幅28～48cm、深さ４～10cmの周溝がめぐる。柱穴は計６個あり、主柱穴はP_1～P_4であり、東西に長径をもち46～51cm、深さ15～21cmを測る。P_6は南壁中央

下にあり径48cm、深さ18cmの円形を呈し、P_5はP_4の北西で径32cm、深さ11cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、煙道部が住居址より突出している。南北160cm、東西86cm範囲に茶褐色のしまりのない土があり、燃焼部から一段上がった煙道入口の両脇には礫が置かれていた。燃焼部は4～5cm床面より低い。

出土遺物は土師器と須恵器と鉄さい2片がある。土器の量は多く、H10号住居址との時間差はあまりなく、遺物の混入も著しいものと思われる。土師器は甕・小形甕・椀・坏形土器、須恵器は坏・高台付坏・椀・鉄火鉢がある。



第23図　H12・H13・H14号住居址実測図

21）H12号住居址

グリッドか～く―15・16に位置し、西側でH13号住居址東南部を壊し、南壁西側上部でH14号住居址に壊される。南北578cm、東西570cm壁残高0～11cmを測る隅丸方形を呈し、主軸方位は、N－3°－Wを指す。覆土は黒褐色を呈し、5～10cm大の礫を含みしまりがある。床面は礫層上にあり、堅緻で略平滑。青灰色粘土が床面上に薄くみられた。柱穴は計7個あり、主柱穴、P_1・P_2・P_4は径40～50cm、深さ25～34cmを測る円形、P_3は長径42cm、深さ36cmの楕円形を呈す。P_6は長径46cm、深さ16cm、P_7はカマドの南西にあり、径44cm、深さ8cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、煙道部が20cm程突出している。南北134cm東西118cmを測り、茶褐色を呈し炭化物、焼土を含む。燃焼部は9cm程落ち込んでいる。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は「く」の字の口辺部形態をとり器肉の薄い甕と胴部ロクロ横ナデされる小形甕がある。須恵器は回転ヘラ切りされる坏、肩部回転ヘラ削りされる蓋と高台付坏、横瓶等がある。

22）H13号住居址

グリッドお・か―15に位置し、H12号住居址に南東部が壊され、南側はプランをつかむことができず、カマド及び北壁においてプラン確認できた。また北東区ではD22号土壙があり壊される。東西390cm、壁残高0～3cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、礫層上の暗褐色土を敲いたと思われるが生活面は壁残高が少ないため壊され確認できなかった。柱穴は1個あり、D22号土壙に東側を壊されるが径28cm、深さ20cmを測る。P_2は貯蔵穴であり長径70cm、短径54cmの楕円形を呈し深さ20cmを測り、甑・甕・土製スプーンを出土している。

カマドは北壁に接してやや東寄りに位置し、焚口を除いて南北90cm、東西50cmの楕円形の燃焼部に馬蹄状に長径30cm程の河床礫を並べて置いている。火床面は床面よりわずかに下がり北に低くなる。カマド覆土は焼土を含むしまりのない茶褐色土である。

出土遺物は土師器で、甑・甕・小甕・台付甕・土製スプーンがある。甕・甑は輪積痕が残った器肉の厚い堅緻な焼成である。

23）H14号住居址

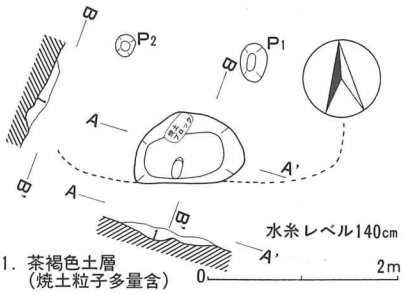
グリッドき―17・18に位置し、H12号住居址南側上部を壊して構築し、重複部北西プラン及び南側のプランは不明瞭である。南北320cm、東西320cmの不整隅丸方形を呈するものと思われる。柱穴は検出されず、床面は礫層上に暗褐色土を敲いていたと思われるが生活面は確認できない。

カマドは北壁やや東寄りに位置し、南北76cm、東西70cm範囲に炭化物・焼土粒子を含む黒褐色土層がみられ、火床面は20cm程低くなり、須恵器坏、土師器甕・坏形土器が出土している。

出土遺物は、土師器と須恵器があり、土師器は坏・高台付坏・甕形土器があり、須恵器は軟質須恵器で底部糸切りされる。手捏は混入品と思われる。

24）H15号住居址

グリッドさ・し—19・20に位置し、カマドは残存するが住居址範囲を捉えることができずに推定範囲となった。覆土は暗褐色を呈し、床面は礫層上に暗褐色土を敲いたと思われるが良好な面は検出されなかった。柱穴は東側に2個ある。



第24図　H15号住居址実測図

カマドは東壁中央にあり、南北120cm、東西80cm範囲に茶褐色土層があり、焼土・焼土ブロックを含み、多くの土器が出土している。

出土遺物は、土師器と須恵器がある。実測できたのは坏形土器のみであるが、土師器の破片では薄形の「コ」の字状口辺の小甕がある。

25）H16・17号住居址

き～け—19～20、け・こ—21・22グリッドに位置し、Y8号住居址南域上部で重複している。両者とも浅く床面のみ残存するため住居址範囲がつかめず、不明瞭なプランを示す。

H16号住居址はN—9°—Wを指し、南北490cm、東西510cmを測る隅丸方形を呈すものであり、柱穴等は検出できなかった。覆土は暗褐色を呈し、床面は南に傾斜気味に低くなるが礫層上に暗褐色土を敲き堅緻である。

カマドは北壁東寄りに南北84cm、東西112cmの焼土を含む茶褐色土層範囲がみられた。

出土遺物は土師器があり、その量は多い。甕・小形甕・埦・坏・高坏形土器及び手捏がある。埦形土器は丸底を呈し内外面ミガキが施こされている。

H17号住居址は、南北310cm、東西340cmの方形を呈すものと思われる。主軸方位はN—14°—Wを指し、H16号住居址南東壁を壊して構築していると思われるが重複の新旧関係は確認できなかった。床面は暗褐色土が貼られて堅緻な床面であるが所々攪乱される。北壁に石が、まとまってあり、カマドに利用されたものかと思う。

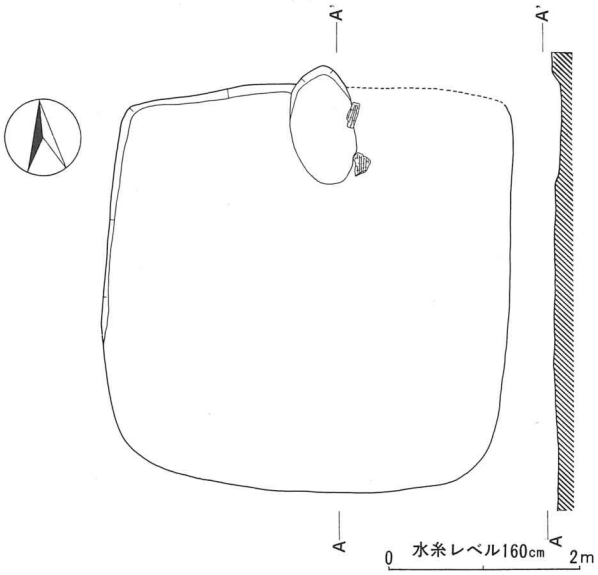
出土遺物は土師器があり、甕・小形甕・坏形土器がある。

26）H18号住居址

グリッドし・す—20・21に位置し、重複関係はなく、住居址床面範囲とカマドの焼土範囲のみ

確認した。主軸方位はN－9°－W、南北430cm、東西430cmを測る隅丸方形を呈す。床面は暗褐色土を敲いており、堅緻である。

出土遺物は弥生時代の土器も混入していたが、カマド内から土師小形甕形土器が、覆土からは甕・埦・高坏形土器片も少量ながら出土している。



第25図　H18号住居址実測図

27）H19・20・21・22号住居址

遺跡の中央き・く－21・22、こ－22・23グリッド内に集中して発見された。確認面と遺構覆土及び遺構相互の土層が極めて類似する黒褐色土であったため遺構確認は困難を極め、新旧関係、遺構プランが不明瞭なものとなった。

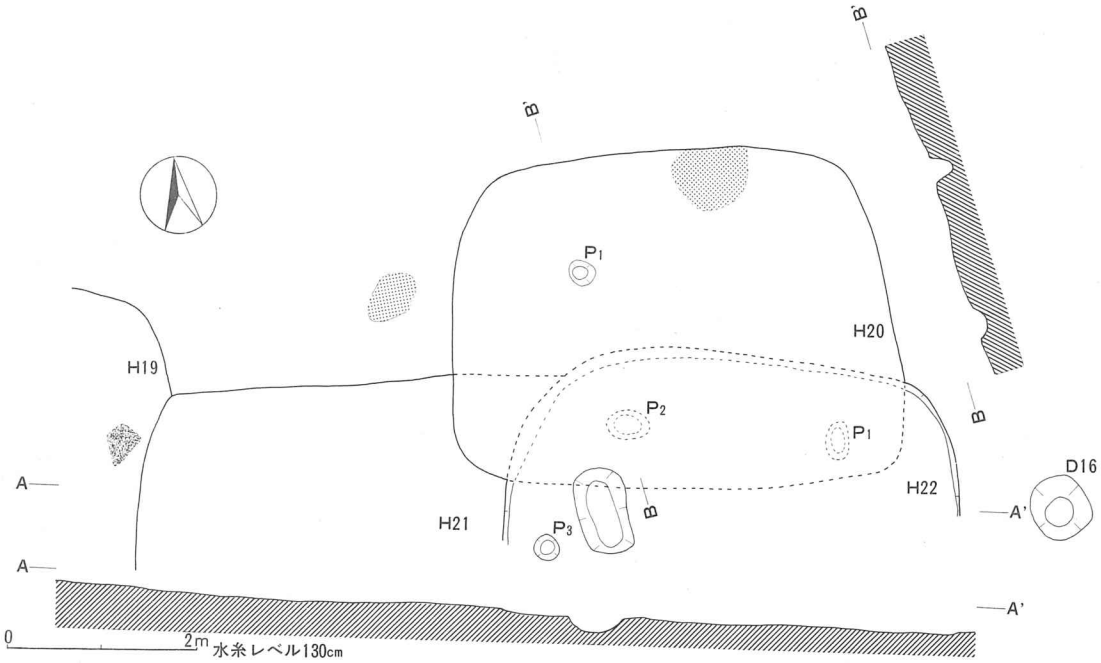
H19は南半分を攪乱、南東部をH21によって破壊されているため北東コーナー部にあたる壁及び、その周辺の床面のみが把握された。床面は礫層上に茶褐色土が貼られる「たたき床」で残存状況は不良であった。東壁中央の床面上には焼土範囲が若干認められ、カマドが存した可能性が強い。遺物は極めて少なく土師器甕形土器破片が出土している。

H20はH21の北東部及びH22の北側を破壊して構築されたと考えられる。規模は推定で東西480cm、南北350cmを測り、確認面からの壁高は0～4cmを測る。床面は暗褐色土を利用して構築されたと考えられるが、軟弱で残存状況も極めて悪い。30×27cmの円形を呈する柱穴が1個検出されている。カマドは北壁中央にあり、残存状況は極めて不良で焼土塊、焼土範囲が認められた程度である。遺物は土師器坏、灰釉耳皿などが出土しており、灰釉耳皿は住居址南西隅の床下から検出されている。

H21は北東部をH20、H22に破壊され、南側は攪乱をうけているため、床面が残るのみで、住居址の形状などは明らかでない。遺物は土師器坏、須恵器坏、壺などが散慢に分布していた。

H22は北側をH20に破壊されている。東西約480cm、確認面からの壁高は約5cmを測る。覆土は黒褐色土をベースとし、炭火物を多量に含む粘性の強い土で構成されている。床面は茶褐色土をベースとしてたたき床が施されており、平滑かつ堅緻で残存状況も良好である。ピットは3個検出され、いずれも柱穴であったと考えられる。P_1は40×24cmの楕円形で深さ24cm、P_2は30×48cmの楕円形で深さ11cm、P_3は径24cmの円形で深さ21cmを測る。遺物は散慢に分布し、土師器坏・甕・

小甕、須恵器甕・坏、灰釉埦などが出土している。



第26図　H19・H20・H21・H22号住居址実測図

28）H23号住居址

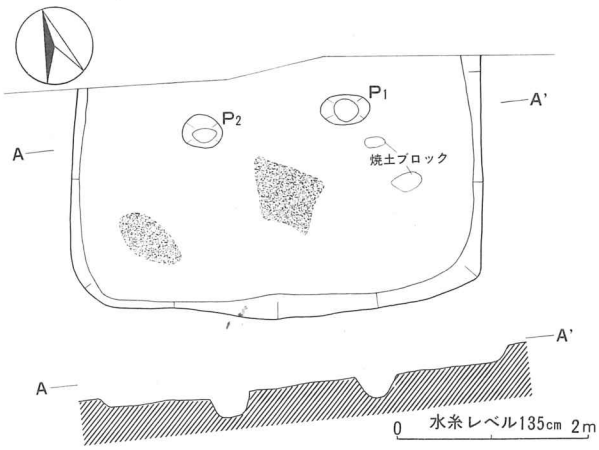
グリッドろ・あ―20・21に位置し、北側は攪乱溝が入り、南域のみ調査した。東西432cm、壁残高9～23cmを測る。

覆土は黒褐色を呈し、床は礫層上に暗褐色土を敲いていた。

床面上には4cm程の厚さで4ヶ所に焼土範囲がみられた。

柱穴は南側のP_1・P_2があり、東西に長径をもち、42～50cm、深さ23～24cmを測る楕円形と円形を呈す。

カマドは攪乱により壊されたものと思う。

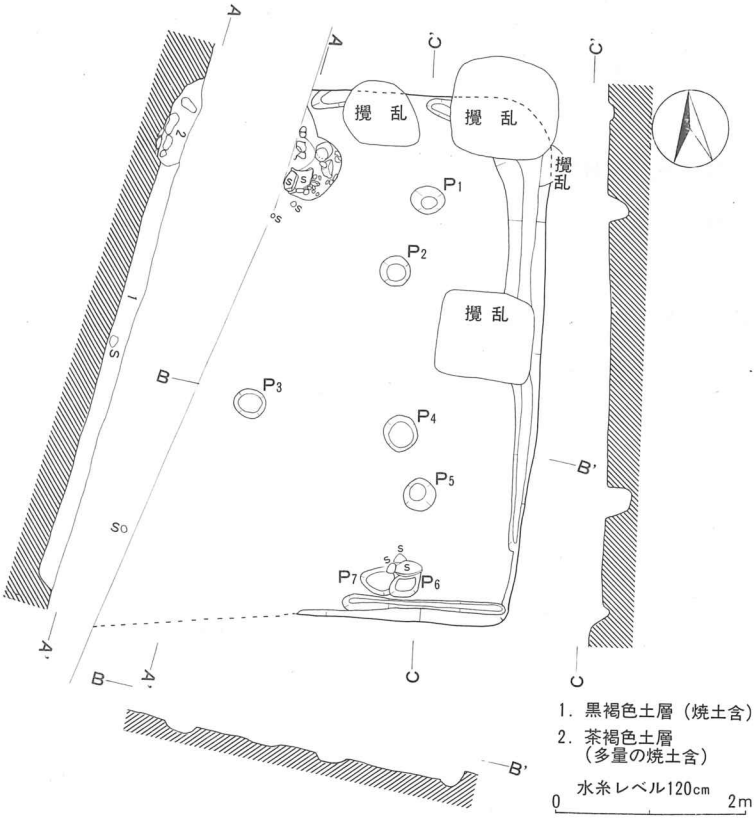


第27図　H23号住居址実測図

出土遺物は土師器と須恵器があり。土師器は丸胴を呈する大形甕と丸底の坏形土器、須恵器は把手を欠損する甑形土器である。

29）H24号住居址

グリッドれ・ろ―23～25に位置し、F１号掘立柱建物址により北・東部一部壊される。主軸方位N－8°－Eを指し、南北560cm、壁残高０～20cmを測る。覆土は黒褐色を呈し焼土を含む粘性のある層であり、床面は第Ⅲ層の明茶褐色土層が踏み固められていた。周溝は幅24～40cm、深さ５～７cmを測る。柱穴は計7個あり、径30～40cm、深さはP₁・P₅が18・16cmとやや深いが他は浅い。



第28図　H24号住居址実測図

カマドは北壁に接してあり、西側は区域外であるため未調査である。南北100cm範囲に焼土を含む茶褐色土層があり、火床面は床より10cm下がり、径30cm厚さ16cmを測る安山岩があり、他に小礫もみられた。

出土遺物は土師器と須恵器があり、土師器は丸底を呈す坏形土器、口辺部外傾外反する長胴甕、須恵器は甕形土器の破片がある。

30）H25・H26号住居址

H25号住居址は、グリッドお・か―24に位置し、住居址南西部一部が残存するのみで大半は撹乱される。主軸方位・形態等は不明である。覆土は黒褐色を呈し、床面は明茶褐色土層が固められている。柱穴・カマド等も検出されていない。

出土遺物は土師器と須恵器があり、土師器は甕形土器、須恵器はたちあがりを持つ丸底の坏身がある。

H26号住居址は、グリッドき・く―24・25にあり、住居址南西部一部が残存するのみで大半は撹乱される。主軸方位・形態等は不明である。覆土は黒褐色を呈し、床面は明茶褐色土層が固めら

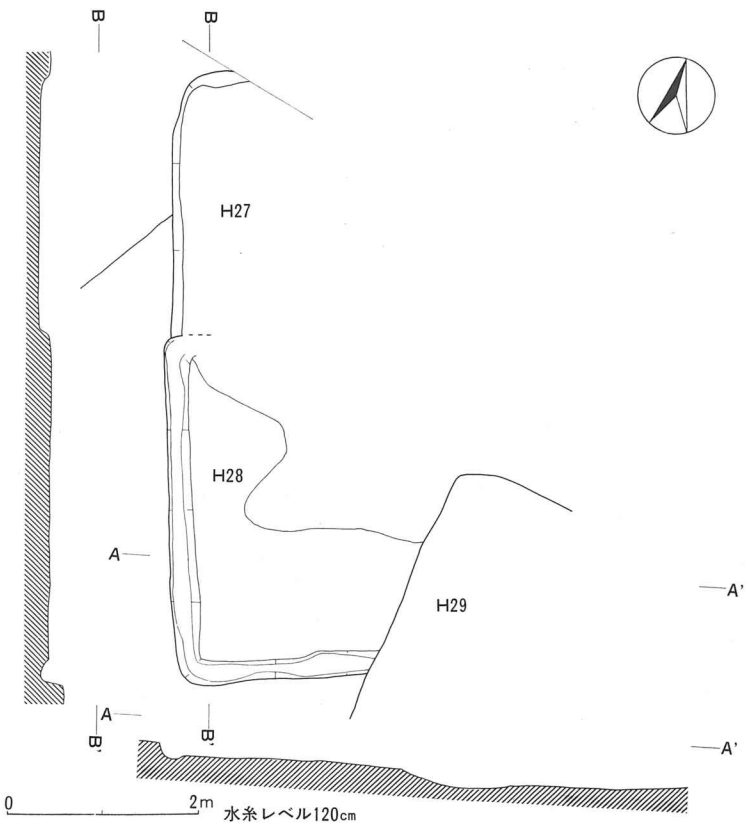
れている。柱穴、カマドも検出されていない。

出土遺物は土師器があり、ロクロ横ナデされる甕形土器、内面黒色で糸切底の坏形土器が出土している。土製円板が1個ある。

31）H27・H28号住居址

H27・28号住居址はこ—24・25・26グリッドに位置し、H27号住居址南壁を壊してH28号住居址が構築されている。両住居址とも西壁が残存するだけで攪乱又は他遺構により壊されている。H27号住居址覆土は黒褐色を呈し、床面明茶褐色土層が固められている。

H28号住居址は、南北370cmを測る。床面は暗褐色を呈し、踏み固められて堅緻な面もある。壁下には幅28cm、深さ5cmの周構が巡っている。柱穴、カマド等は検出されない。



第29図　H27・H28号住居址実測図

出土遺物は、H27号住居址においては、土師器坏形土器、須恵器坏形土器の破片のみで、実測できるものはなく、量も少ない。H28号住居址からは、土師器と須恵器が出土し、土師器はロ～胴上部までロクロ横ナデされる甕・高台付坏形土器があり、須恵器は回転糸切りされる坏・蓋・甕形土器がある。

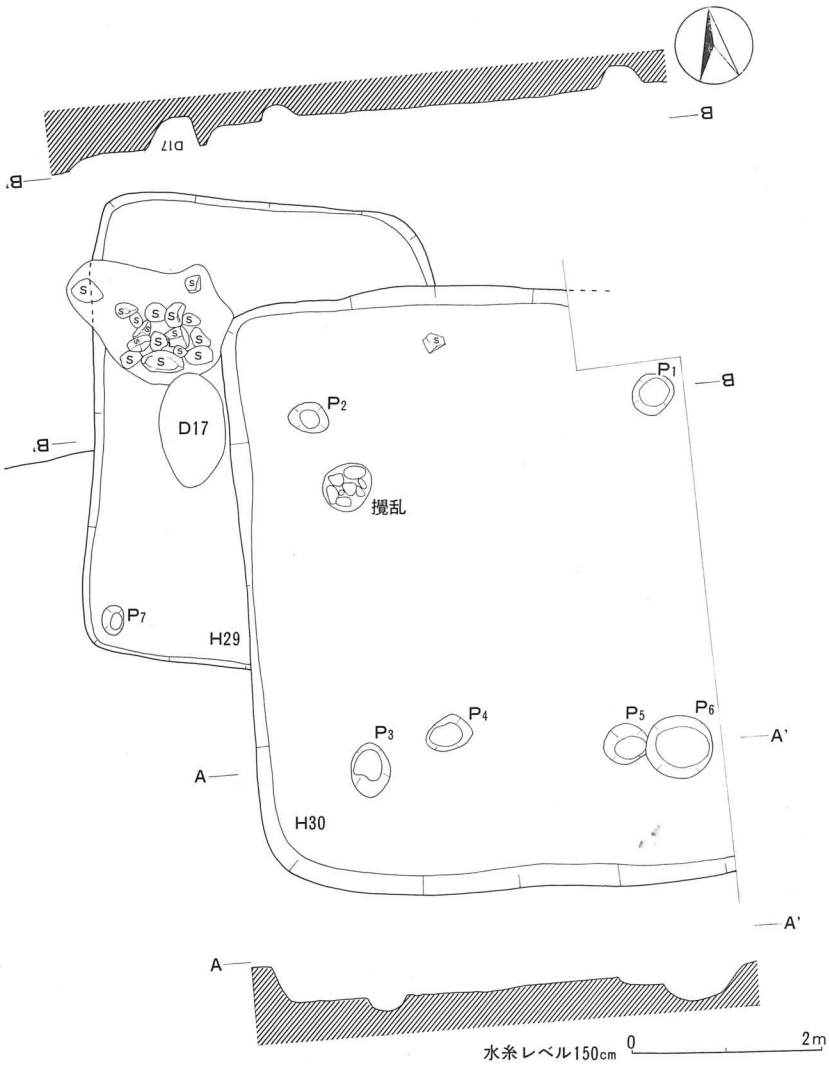
32）H29・H30号住居址

H29号住居址は、さ—25～28グリッドに位置し、H30号住居址により西側を壊される。D17号土壙及び攪乱が一部床面を壊している。南北490cm、東西360cmの隅丸長方形を呈し、N—14°—Wを指す。覆土は黒褐色を呈し、床面は明茶褐色土が固められ、茶褐色を呈す。南西偶にピットがあり、長径30cm、短径12cm深さ9cmを測る。

出土遺物は、土師器と須恵器及び灰釉陶器があり、弥生時代の土器も混入し、決定的な遺物がみあたらない。

H30号住居址は、さ～す―26～28グリッドに位置し、H29号住居址を壊して構築している。東壁は畦畔により破壊される。主軸方位は北方向を指し、南北620cmを測る隅丸方形のプランを呈すものと思われる。覆土は黒褐色を呈し、壁は直に近い状態で立ちあがり、床面は明茶褐色土層が踏み固められて堅緻な状態であった。柱穴は計6個あり、南側は主柱穴の位置に各2個づつあり、長径50cm前後の比較的浅い主柱穴である。カマドは検出されない。

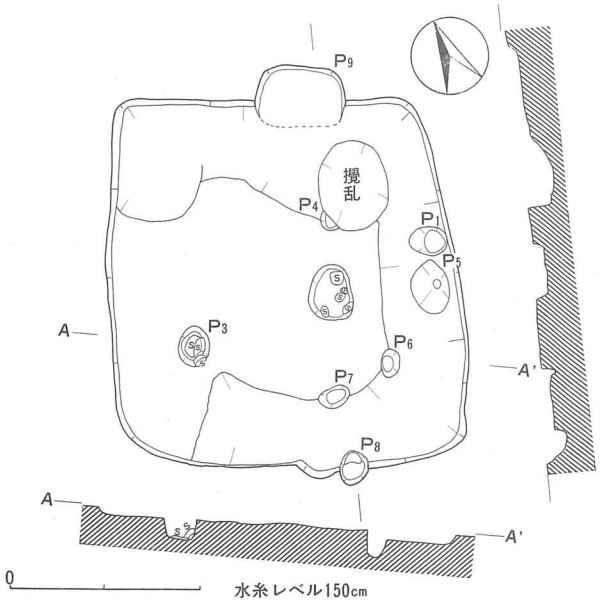
出土遺物には土師器と灰釉陶器がある。土師器は坏形土器があり、内面は黒色研磨され、底部回転糸切りのもので、灰釉陶器は皿形土器である。器高の低い土師質土器も出土している。



第30図　H29・H30号住居址実測図

33）H31号住居址

グリッドお・か―26・27に位置し、H32号住居址と北東部で重複し、上部を壊して構築。またF３掘立柱建物址の柱穴により床面を壊されている。南北388cm、東西360cmの隅丸方形を呈す。主軸方位N―20°―E。覆土は黒褐色を呈すが壁残高が２～10cmと少なく、耕作土除去の際に重機の重さの影響をうけ床面が不安定な状態になり良好な生活面を検出できなかった。床面は明茶褐色土層上にあり、周溝状に幅80cm～100cm、深さ５～10cmの落ち込みが外周を巡っている。柱穴は計６個あり、東側のみにみられ不規則な配置である。北壁中央に住居址より出て東西94cm、南北64cm、深さ10cmを測る方形のピットがあり、ミニチュアの小甕が５個出土し、本住居址に伴うものと思われる。カマドは検出されない。



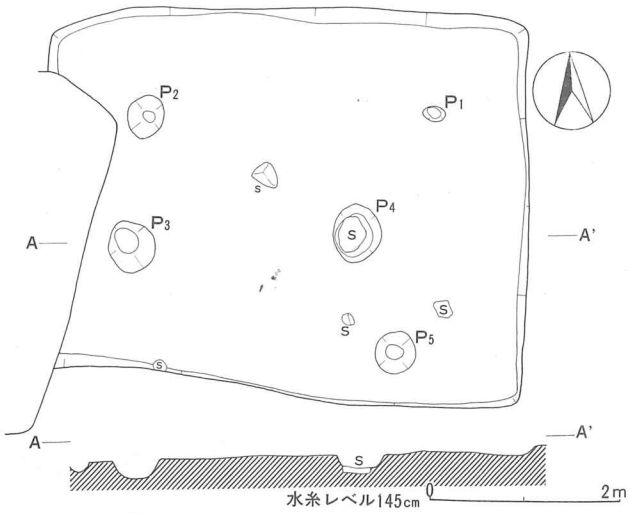
第31図　H31号住居址実測図

出土遺物は、北壁外にあるピットから出土したミニチュア品が主たるもので、他には顕著なものがない。

34）H32号住居址

グリッドか・き―26・27に位置し、F３号掘立柱建物址により一部壊され、H31号住居址により西側上部も壊される。南北410cm、東西520cm、壁残高５～10cmを測る隅丸長方形を呈す。主軸方位N―６°―Eを指す。覆土は黒褐色を呈し、床面は茶褐色であるが、H31号住居址と同様に生活面は確認できない。柱穴は３本ある。

出土遺物は、土師器甕形土器があり、口辺部が全体に緩く外反するもので、胴部へラケズリされる。

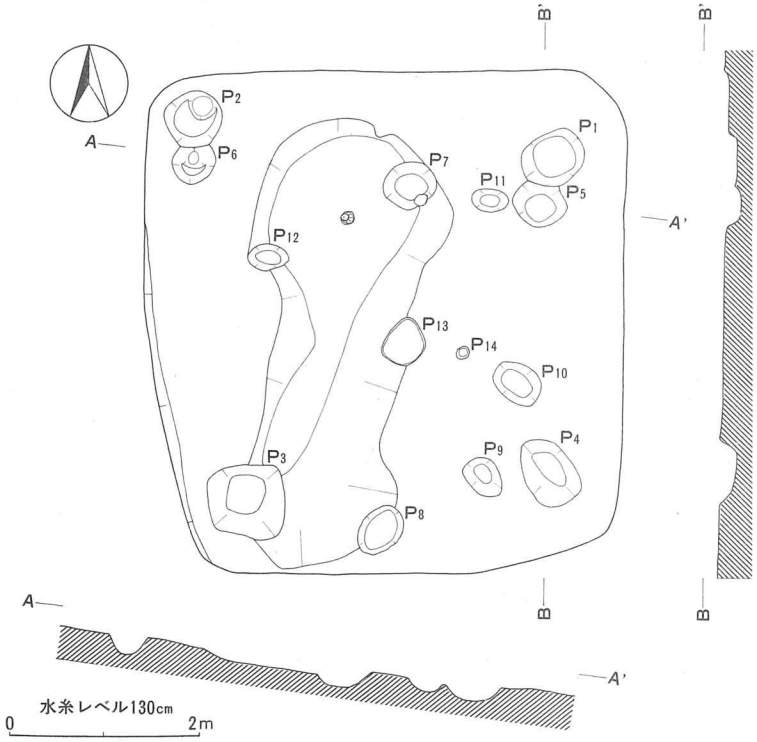


第32図　H32号住居址実測図

35）H33号住居址

グリッドけ・こ—28～30に位置し、南北526cm、東西500cmを測り北側が幅広い隅丸方形を呈す。主軸N—2°—Wを指す。覆土は黒褐色を呈し、床面は茶褐色、柱穴は計13個あり、2個づつ各隅に位置し重複するものもある。西寄りに長さ480cm、幅210cm、深さ12cmの長楕円形の落ち込みがある。

出土遺物は土師器があり、高台付坏、甑形土器である。須恵器は坏形土器があり、底部回転糸切りされる。



第33図　H33号住居址実測図

36）H34号住居址

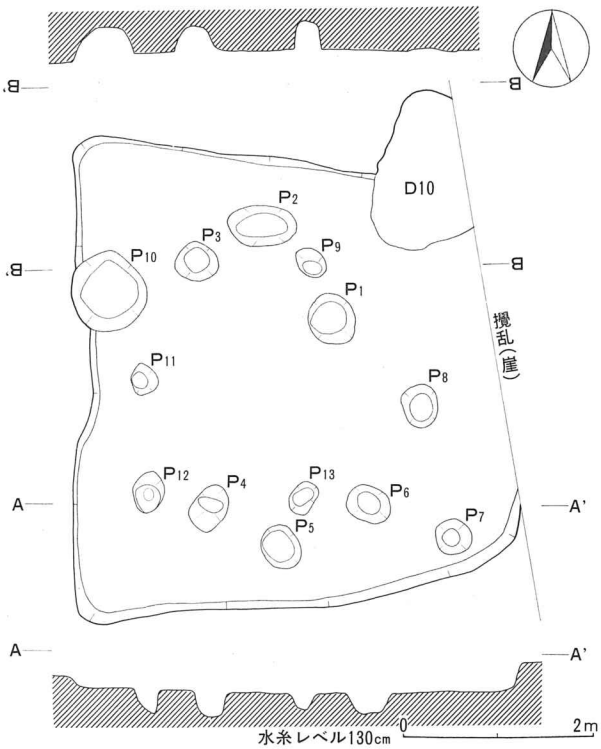
グリッドさ—29・30に位置し、東端に位置し崖ふちにある。東側は畦畔により攪乱される。南北472cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、床面は礫層上に暗褐色を敲き堅緻な床である。柱穴は計13個あり、径40cm前後を測るものが多く、深さも30cm前後を測る。

出土遺物は土師器と須恵器があり、土師器は内面黒色研磨される坏形土器及び高台付坏がある。破片では須恵器の回転糸切りの坏形土器及び甕形土器があるが、灰釉陶器の坏形土器片等も出土している。

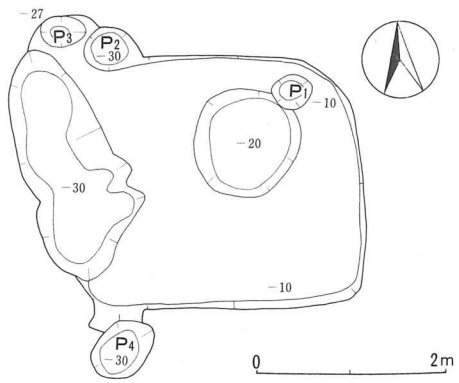
37）H35号住居址

グリッドく—29・30に位置し、土壙状の掘り込み及び礫群が重なり、住居址範囲の確認は困難であった。東西320cm、南北266cmの隅丸長方形を呈し、主軸方位N—3°—Eを指す。床面は明茶褐色土層上に構築されたものと思うが掘り込みや礫群により把握できなかった。覆土は黒褐色。

出土遺物は、土師器・須恵器があるが、実測できたのは底部回転糸切りされた須恵器坏形土器



第34図　H34号住居址実測図



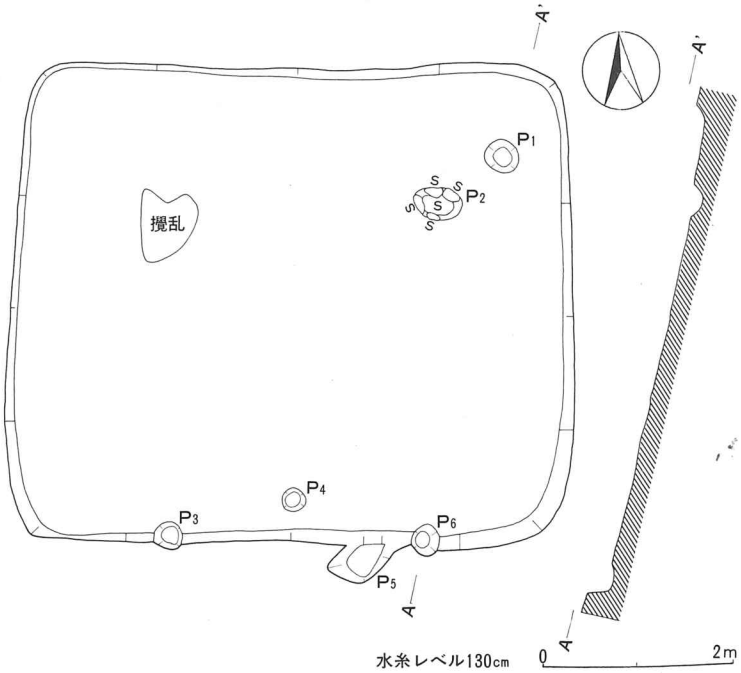
第35図　H35号住居址実測図

である。

38）H36号住居址

グリッドこ・さ—30・31に位置し、東西600cm、南北500cm、壁残高12～24cmを測り、隅丸長方形を呈す。主軸方位N—3°—Eを指す。覆土は黒褐色を呈し、床面は礫層上に暗褐色土を敲いた堅緻な床である。柱穴は計6個あり、P_1・P_2は北東区にあり、P_3～P_6は南壁ないしは壁下、壁外にある。P_2は長径48cm、深さ12cmで礫を含む。P_3は径30cm、深さ10cmの円形、P_4は径25cm、深さ5cm、P_6は径30cm、深さ26cmを測る。P_5は壁外に出て深さ16cmを測る。

出土遺物は土師質土器と灰釉陶器がある。灰釉陶器は埦形土器と長頸瓶の口辺部片が出土し

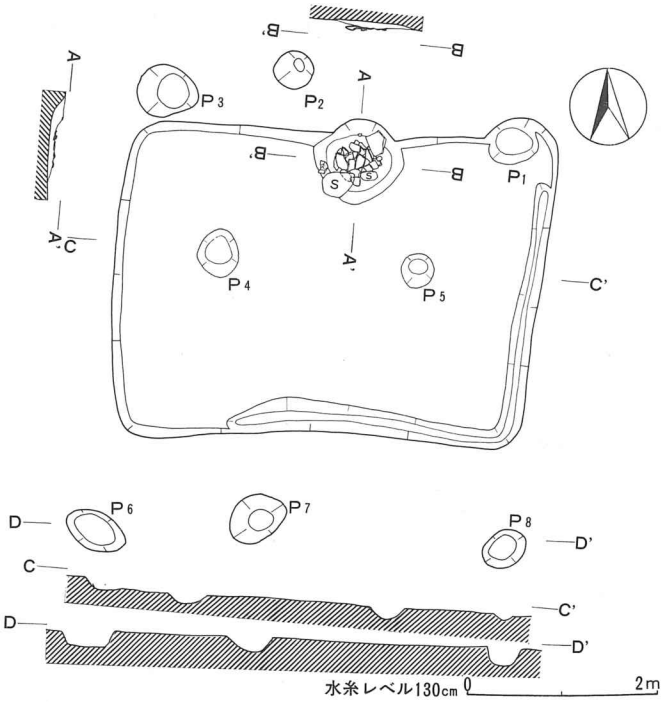


第36図　H36号住居址実測図

ている。

39）H37号住居址

グリッドく・け—32・33に位置し、礫層中に掘り込んでおりプランは明確であった。南北320cm、東西450cm、壁残高3～12cmを測る隅丸長方形の形態を呈し、主軸方位N—6°—Eを指す。覆土は小礫を含む黒褐色土で、床面は礫層上に暗褐色土層を敲いた堅緻な床である。東～南壁にかけては幅20～40cm、深さ4～5cmの周溝がある。柱穴は計8個あり、P_2・P_3・P_6～P_8は壁外にあるが本住居址に伴うものと思われる。P_1は北東隅にあり径54cm、深さ10cmと浅いが貯蔵穴の可能性もある。P_4・P_5は住居址中位の東西に並ぶもので長径50cm、深さ9cm、径36cm、深さ16cmを測る。P_6・P_7長径50～70cm、深さ15～18cmを測る。



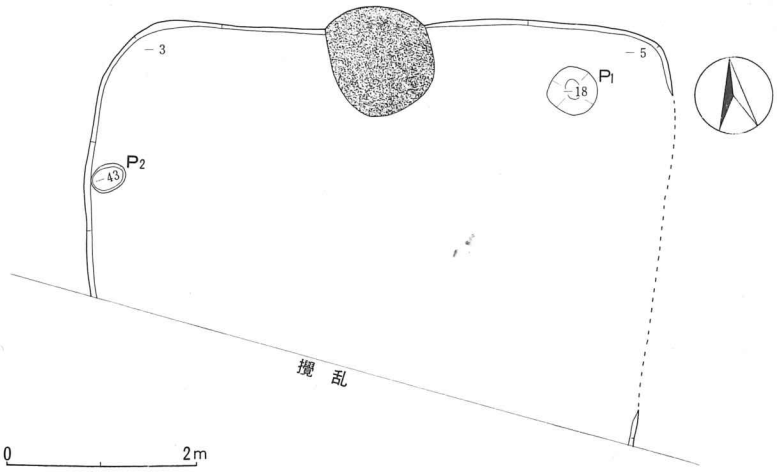
第37図　H37号住居址実測図

カマドは北壁中央にあり、南北90cm、東西96cmの黒色土範囲に河原石と土器が出土し、火床面は4cm程低くなっている。

出土遺物は土師器と須恵器があり、土師器甕・埦形土器、須恵器は坏形土器がある。須恵器坏形土器は底部回転ヘラケズリのものである。

40）H38号住居址

こ・さ—33・34グリッドに位置し、北側のみ残存する。N—8°—Eを指し、東西307cmを測り、壁残高4cm程である。覆土は黒褐色を呈し、床面は礫層上に構築される。

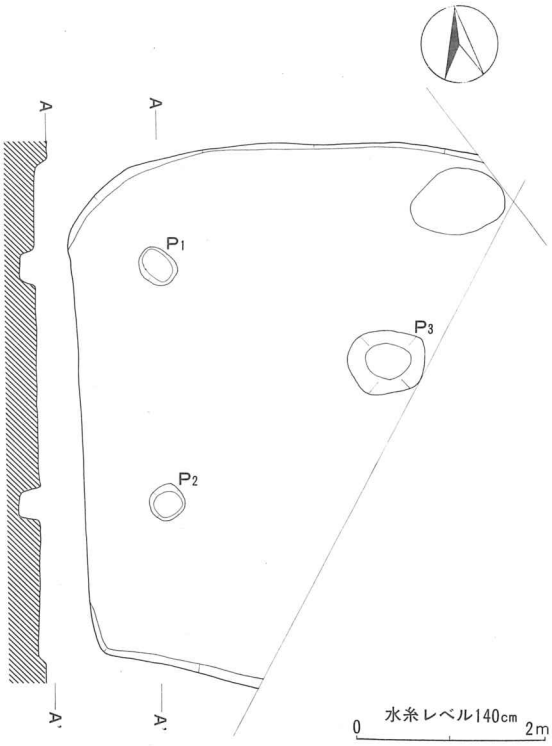


第38図　H38号住居址実測図

柱穴は北側に２個あり、P_1は径46cm、深さ17cm、P_2は径38cm、深さ43cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、南北120cm、東西118cm範囲に黒褐色土があり、火床面は12cm程窪んでいた。

出土遺物は、土師器と須恵器がある。土師器は甕形土器、坏形土器があり、須恵器は坏形土器の破片等がある。



第39図　H39号住居址実測図

41）H39号住居址

グリッドし・す―33・34にあり、東側は崖ふちにあり畦畔により攪乱されている。南北590cmを測り壁残高は０～８cmで西壁は範囲のみである。柱穴は計３個あり、P_1は長径46cm、短径32cm、深さ13cm、P_2は径38cm、深さ28cm、P_3は長径80cm、短径70cm、深さ22cmを測る。

カマドは検出されない。

出土遺物は土師器があり、高坏形土器と土師質土器である。高坏形土器は坏部全体が内湾し、口縁部はやや内傾する。

2　土壙

土壙の規模・形態は、一覧表に示したようであるが、計22個を数えるうち、帰属する時代のあきらかなものは少ない。遺物の出土状況等よりＤ６・Ｄ７・Ｄ９・D12・D15土壙についてはほぼ該期があてられるものと思う。

Ｄ６号土壙は長径62cm、深さ37cmの楕円形を呈す。

Ｄ７号土壙は、径70cm、深さ22cmを測る円形土壙で、上面より壺形土器口辺部を出土する。

Ｄ９号土壙は、長径80cm、短径60cm、深さ42cm楕円形を呈し、小形甕１、坏形土器３、椀形土器３の計７個が出土している。坏・椀は丸底を呈するものである。

D12号土壙、径70cm、深さ31cmを測るもので、須恵器の坏形土器が出土しており、底部回転糸切りものである。

D15号土壙は、径100cm深さ74cmを測り、内面黒色研磨され、底部回転糸切りの坏形土器、高台

第２表　舞台場遺跡土壙一覧表

No.	位　置	規　模	形　態	時　期	備　　考
1	さ―21	120×80 cm	楕　円　形		
2	さ―20	100×65	〃		
3	さ―27	90	円　　形		
4	け・こ―27	100×80	楕　円　形		
5	け―26・27	140×90	〃		
6	か―９・10	70×50	〃	弥生	甕出土
7	き―13	70	円　　形	和泉	壺口辺部出土
8	け―６・７	120	〃		
9	か―23	80×60	楕　円　形	鬼高	小甕、埦、埦出土
10	す―28・29	140	円　形　？		
11	え―11	100×60	楕　円　形		
12	さ―12	70	円　　形	国分	須恵器坏出土
13	さ―12	100×70	楕　円　形		
14	さ・し―13	160	円　　形		
15	し―14	100	〃	国分	内黒坏・須恵高台坏出土
16	こ―22	80	〃		
17	さ―26	80×60	楕　円　形		
18	す―24	300×140	不　整　形		
19	く―18	60	円　　形		
20	け―22	100×60	楕　円　形		
21	さ・し―20	70	楕　円　形		
22	す―29	160	円　　形		

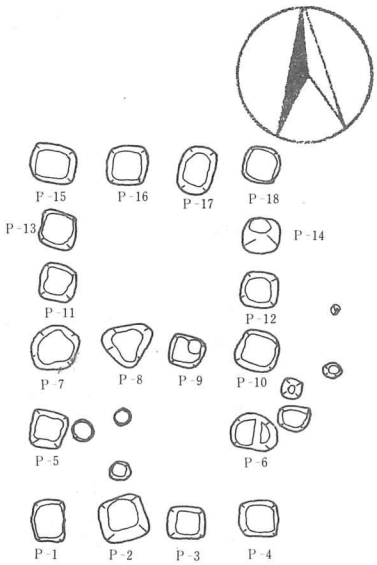
付の須恵器坏形土器がある。

3　掘立柱建物址

掘立柱建物址は、発掘調査区域内の南西部から４基確認された。その他にも多くの柱穴と思われるピットが検出されたが、建物址としては確認できなかった。

1）Ｆ１号掘立柱建物址

Ｆ１は遺跡の西端中央ろ・あ・い―21・22・23・24グリッド内に位置し、Ｙ９、H24を破壊する。南北５間（940cm）東西３間（570cm）の規模を有する。各柱穴は一辺１ｍ前後の比較的整った矩形を呈し、確認面からの深さは20～30cmを測る。但し中央に位置するＰ８、９は若干浅く、深さは15cmを測る。



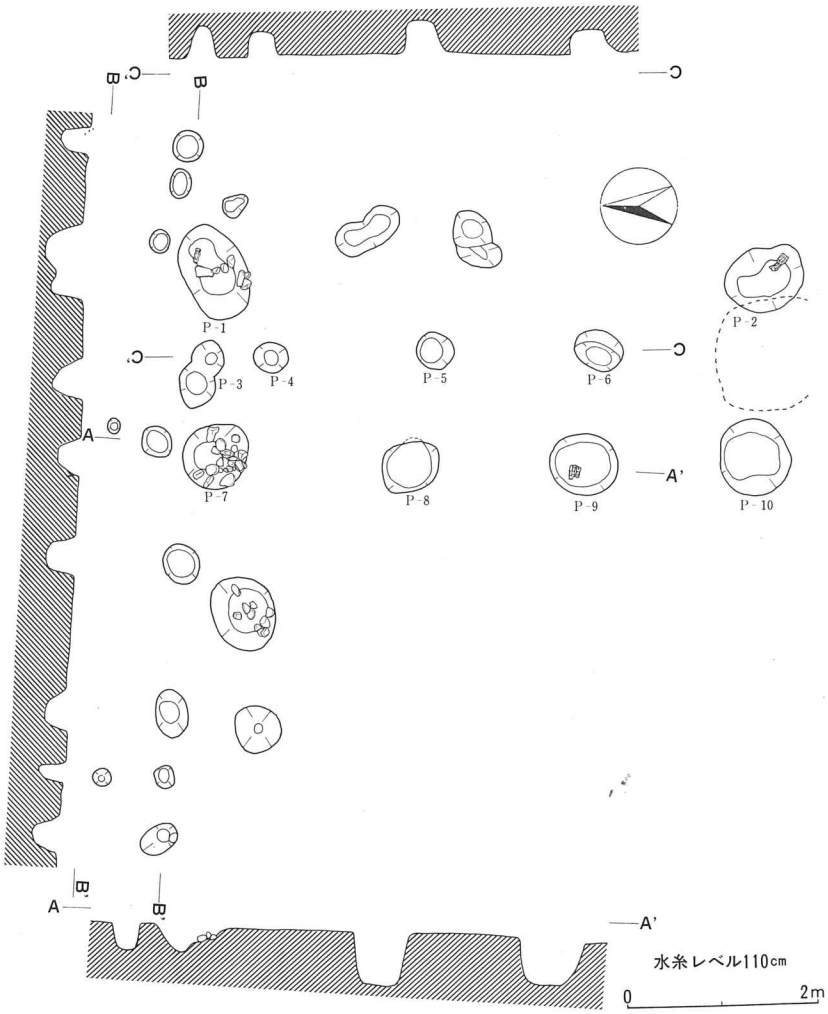
第40図　Ｆ1号掘立柱建物址
実測図（１：200）

断面は、ほぼ逆台形状を呈し、底面は平滑である。

柱穴の間隔は、南北で約50～140cm、東西で80cm前後となっている。柱痕は検出されなかったが柱穴の規模から考えると柱の太さは、かなり大きなものであったことが推察できる。遺物は土師器３点、須恵器１点が出土したのみである。本建物址は往時においてもかなり大規模であったと考えられる。

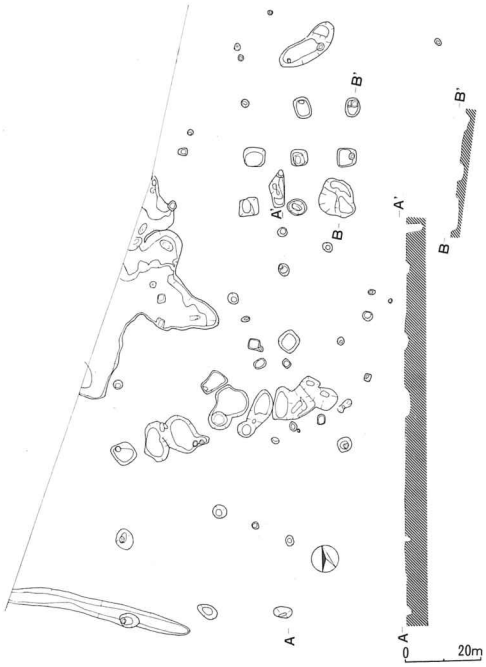
２）Ｆ２号掘立柱建物址

Ｆ２はＦ１から13m程南下したれ・ろ―28・29・30グリッドに位置する。本遺構は発掘調査区域外にまで及ぶため、東側については明らかでないが、南北３間（570cm）を測り、Ｆ１の東西間



第41図　Ｆ2号掘立柱建物址実測図

の長さと全く一致する。従って本遺構全体の規模もＦ１と近似すると考えられる。またＰ３・４・５・６など小ピットによる庇をもつのも本遺構の特徴と言える。柱穴はいずれも円形状であるが、径60～100cmの大規模なもの（Ｐ１・２・７・８・９・10）と径30cm前後の小規模なもの（Ｐ３・４・５・６）に分けられる。深さは一様に40cm前後を測り断面は逆台形状を呈するものが多い。柱穴の間隔は南北で110～140cmを測る。柱穴には礫を有するもの（Ｐ１・７）、柱痕を有するもの（Ｐ１・２・９）などもある。遺物は非常に少なく、土師器が数点出土しているのみである。



第42図　Ｆ4掘立柱建物址実測図（１：200）

3）Ｆ３号掘立柱建物址

Ｆ３は、お・か・き―27・28・29グリッドに位置しH31・32を破壊する。攪乱、調査区外等の事情により検出された柱穴は少なく、規模も明らかでない。Ｐ１・２・3・4は東西直線上に配列され、Ｐ１からほぼ直角に屈曲してＰ５・６・７の南北線上に連結するものと考えられる。柱穴の間隔は東西で150cm前後、南北70cm前後を測る。柱穴はすべて円形で径30～40cmを測る。遺物も少なく、構築年代を推測することはできない。

4）Ｆ４号掘立柱建物址

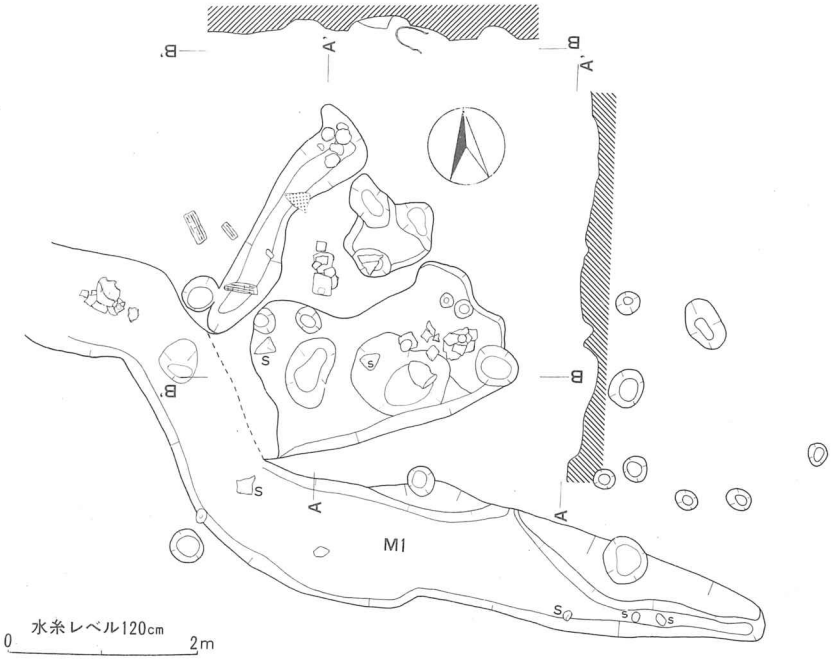
Ｆ４は、ら・り・る―30・31・32・33・34・35グリッドに位置し、総数41個のピットが群在する。その幾つかは建物址の柱穴であったと考えられる。当調査区内においては、明らかに建物址と断定できる区画が判別できないため、建物址が存した可能性を指摘するだけにとどめておきたい。

4　溝状遺構

1）Ｍ１号溝状遺構

Ｍ１はれ・ろ―27・28グリッドに位置し、Ｆ２と近接する。全長約12m、幅20～125cmを測る。西側から不規則に蛇行して掘り込まれ、東側に至るに従って収縮する。断面形は緩く傾斜して底

面に至るU字形を呈するが、底面は凹凸が激しい。覆土は鉄分の多い暗褐色土である。遺物は弥生土器（壺形土器など）の大形破片が散在していた。溝の性格は不明である。



第43図　M1号溝状遺構・T1号特殊遺構実測図

2）M2号溝状遺構

M2は、れ・ろ—30・31・32グリッドに位置し、北端部をF2に破壊されている。南北にほぼ直線状に伸びる全長約10，8mの溝で、幅約1m前後を測る。断面はU字形を呈し、底面は平滑である。年代決定のに根拠となる遺物は出土していない。

5　特殊遺構

1）T1号特殊遺構

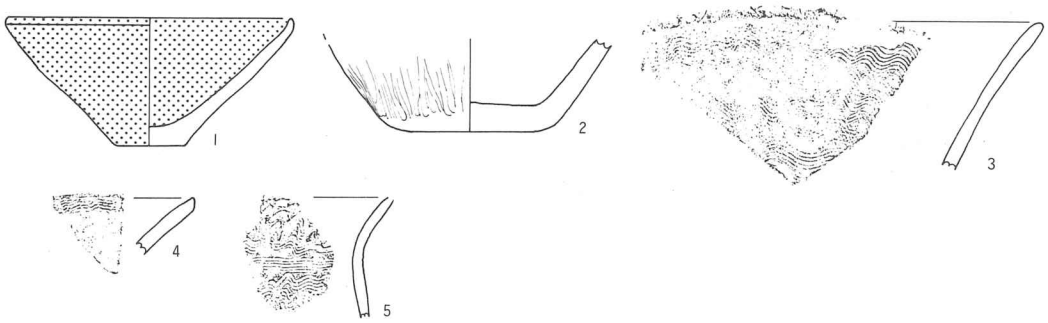
本址はろ・あ—26・27グリッドに位置し、M1の一部と接する。南北350cm、東西270cmの範囲で非常に不規則に掘り込まれ、起伏も激しい。覆土は多量の焼土、炭火物、炭化材を含み、10～20cmの厚さで堆積していた。また、覆土中には多量の古墳時代後期の土器が含まれ、遺構の北端・中央、南東端などに集中する傾向が看取された。出土状態は正置されたものは少なく、散乱した状態であった。遺物は土師器甕3点、甑1点、坏4点が出土している。遺構の性格については、同種の遺構に関する資料の増加を待って検討するのが適当かと思われる。

6　グリッド出土遺物

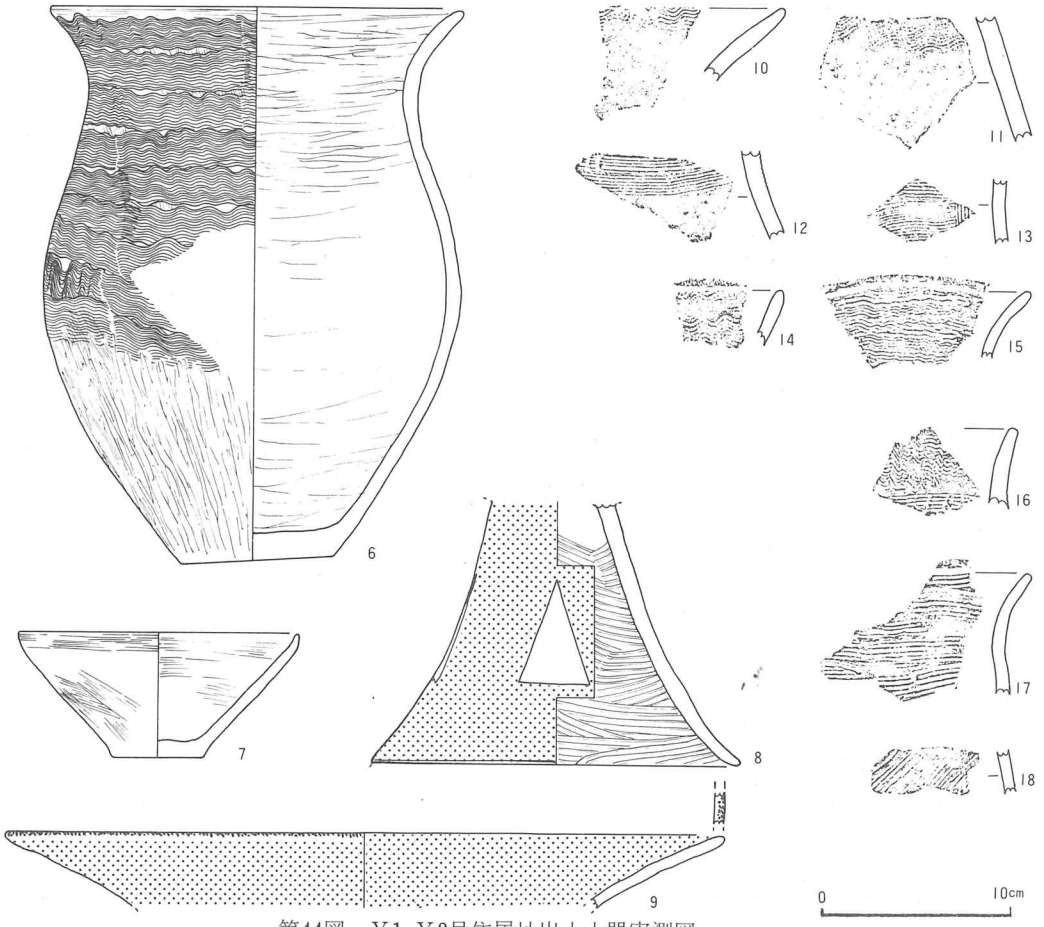
舞台場遺跡は重複関係が複雑な上に、プラン不明瞭なことから遺構内から出土したものでも帰属の明確でない資料はグリッド出土遺物として扱ってある。

出土遺物は、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、土鍋等がある。

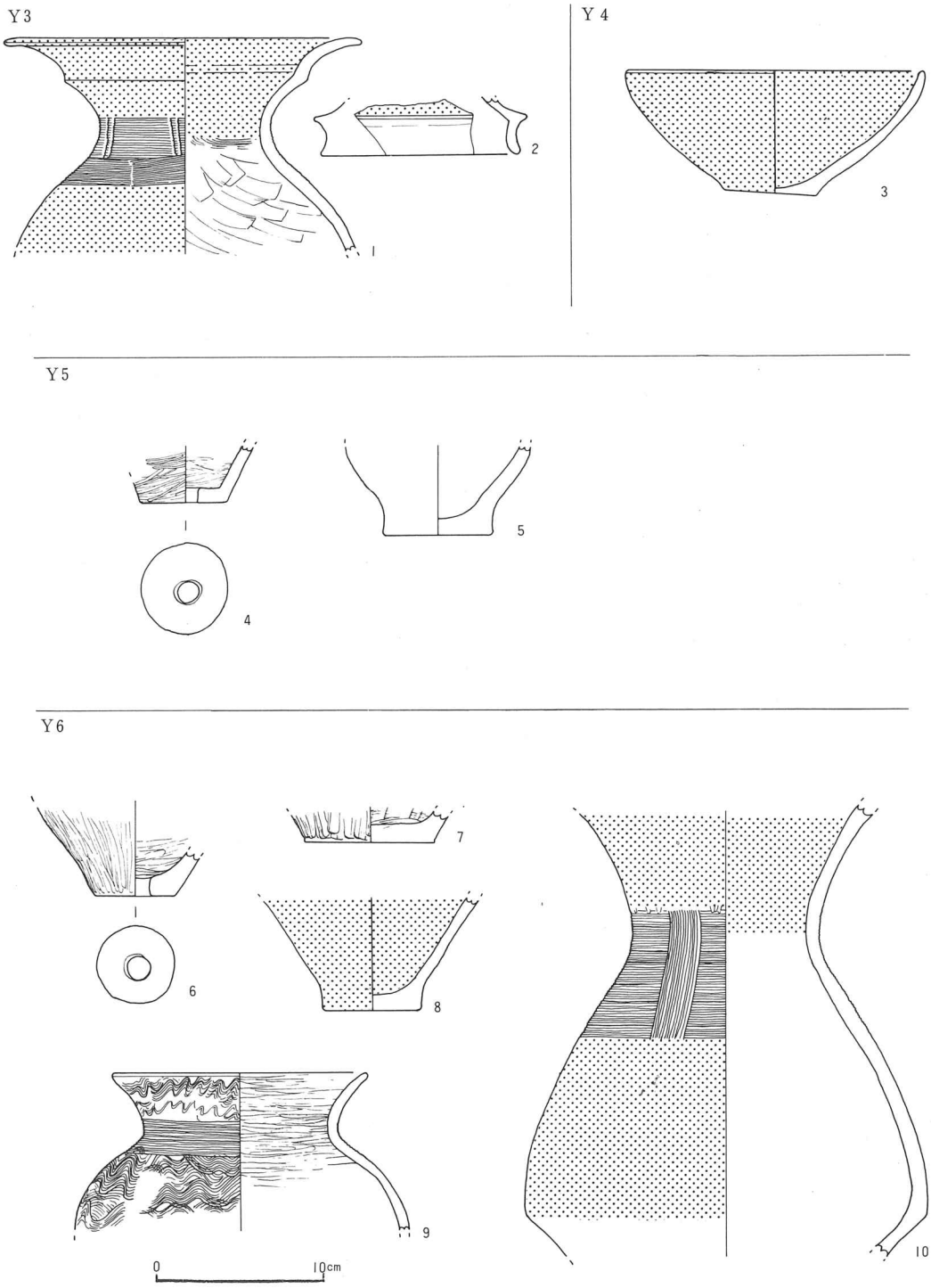
Y1



Y2

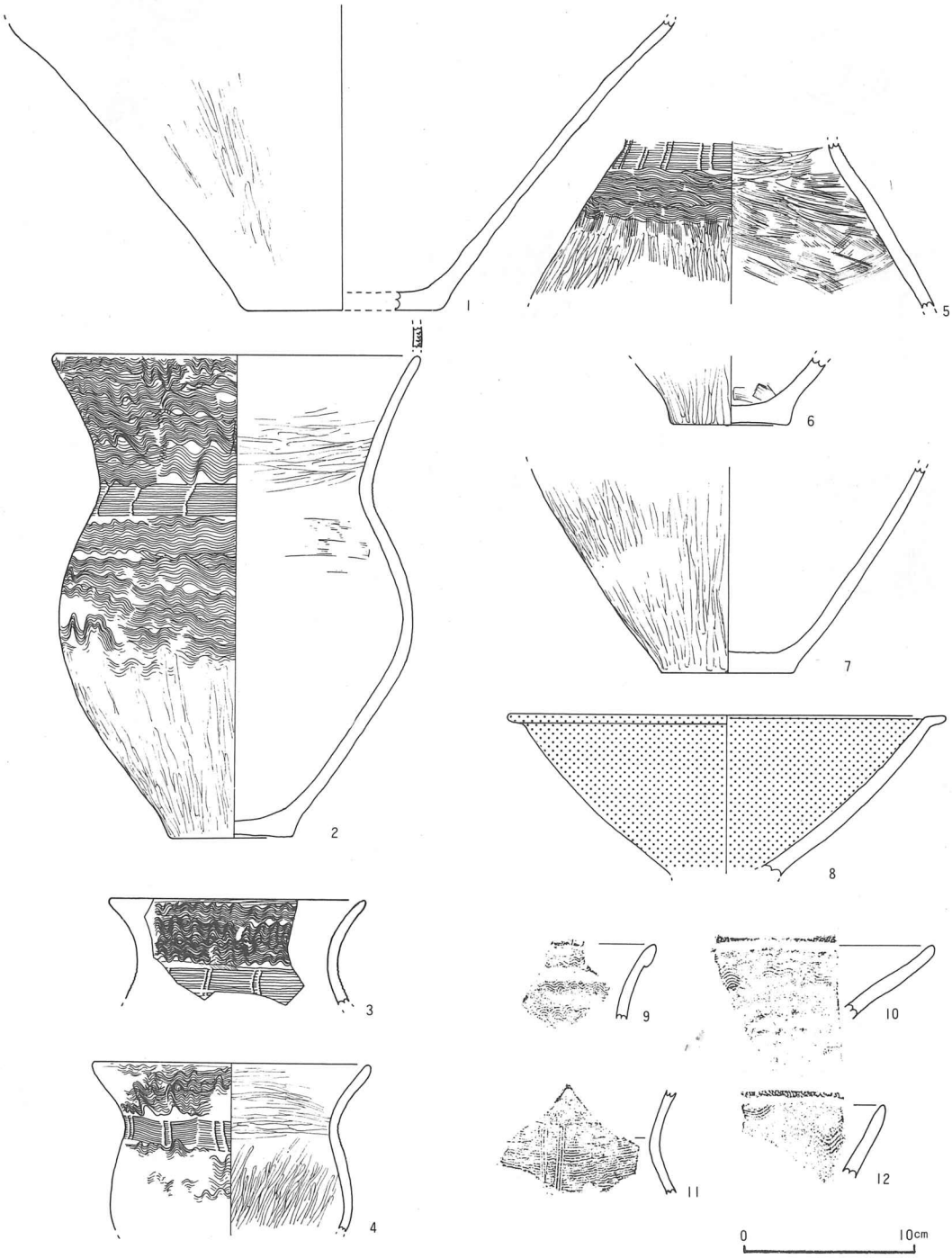


第44図　Y1・Y2号住居址出土土器実測図



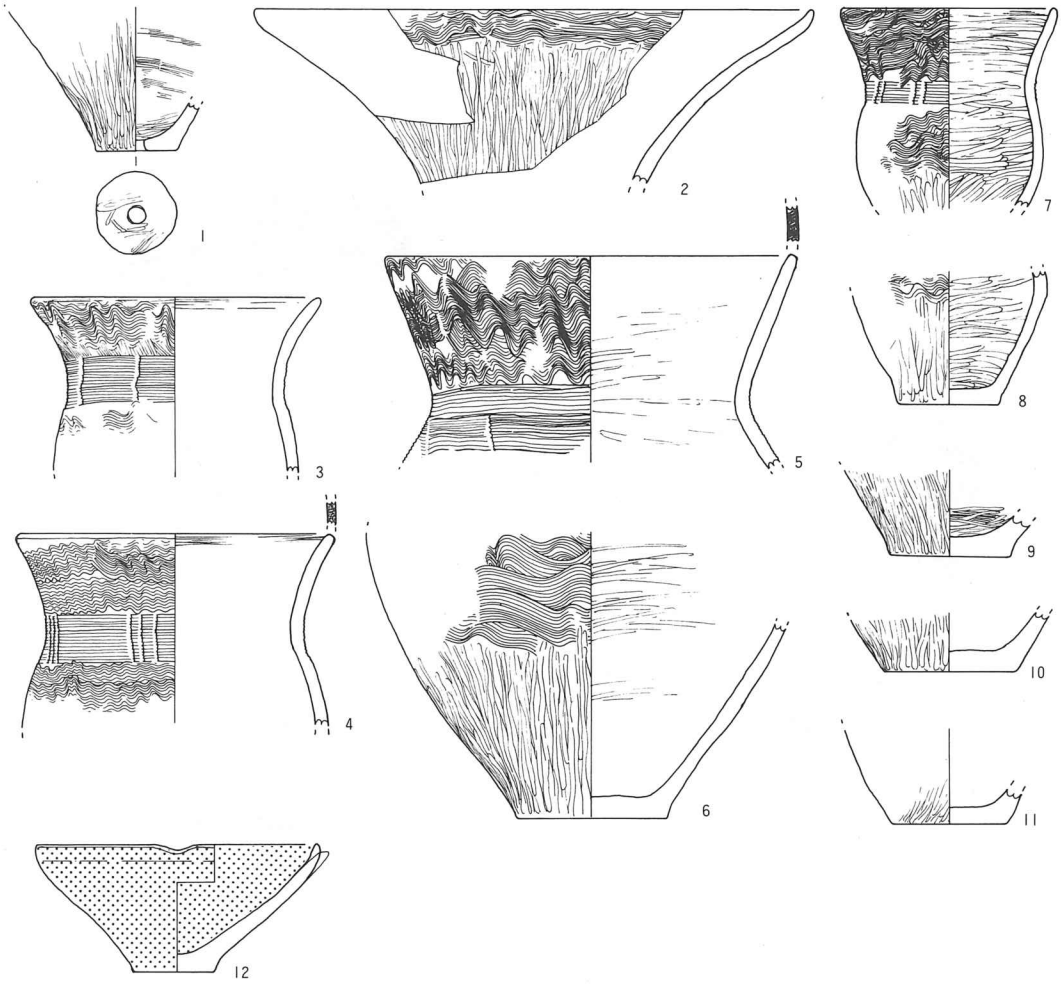
第45図　Y3・Y4・Y5・Y6号住居址出土土器実測図

Y6

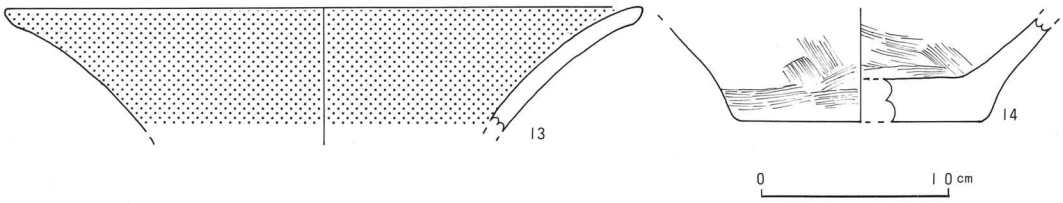


第46図　Y6住居址出土土器実測図

Y7

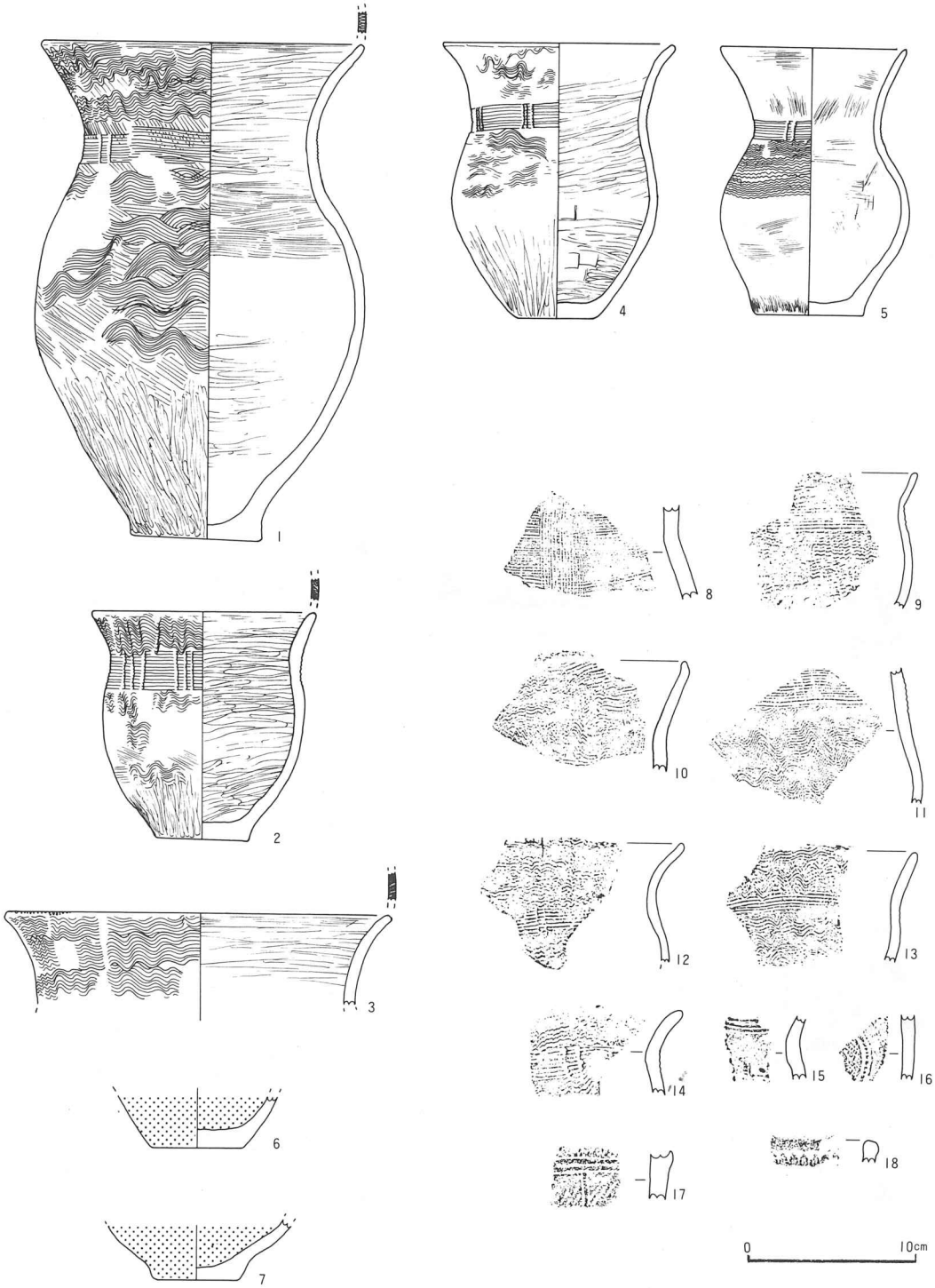


Y8

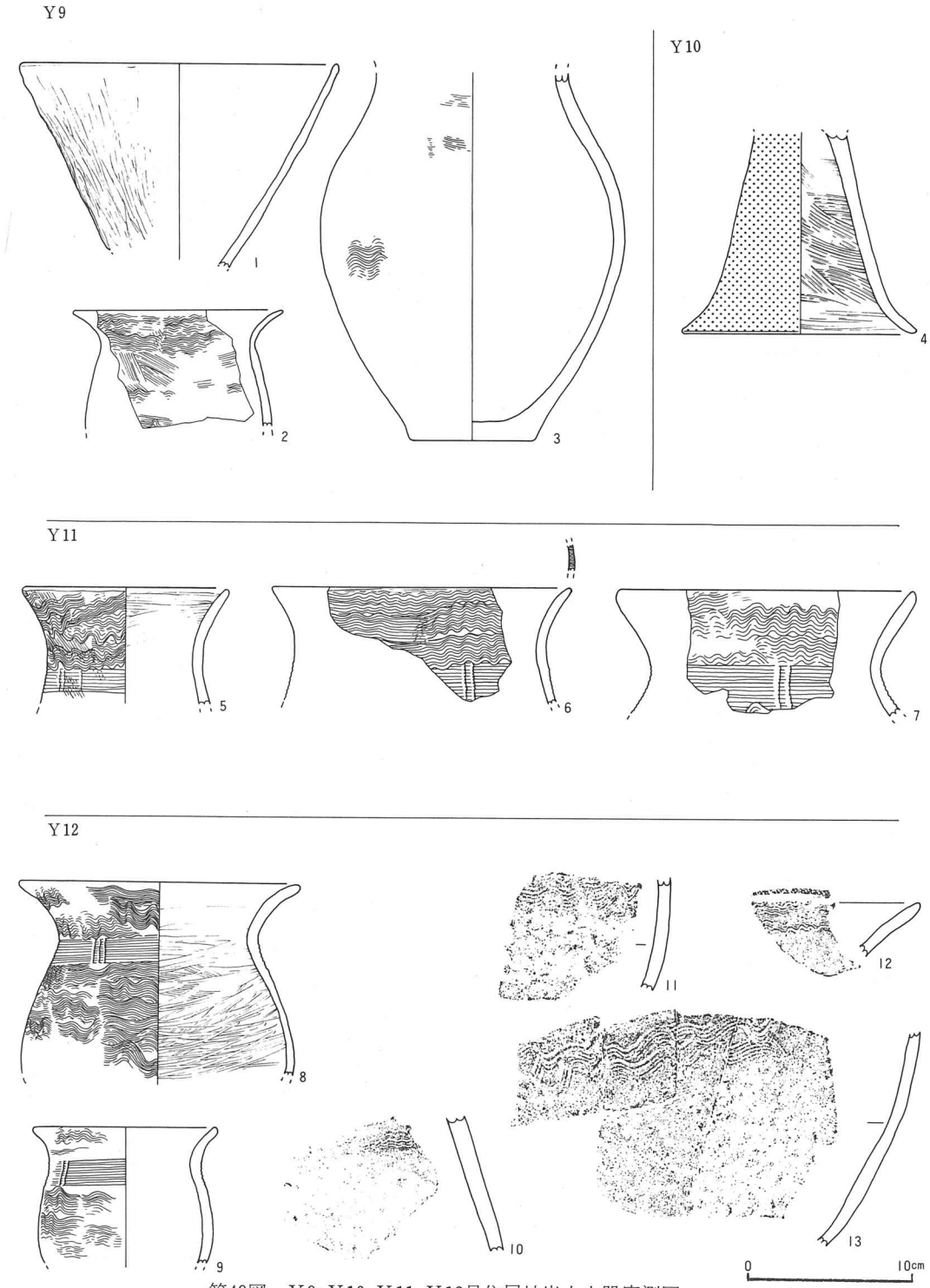


第47図　Y7・Y8号住居址出土土器実測図

Y8

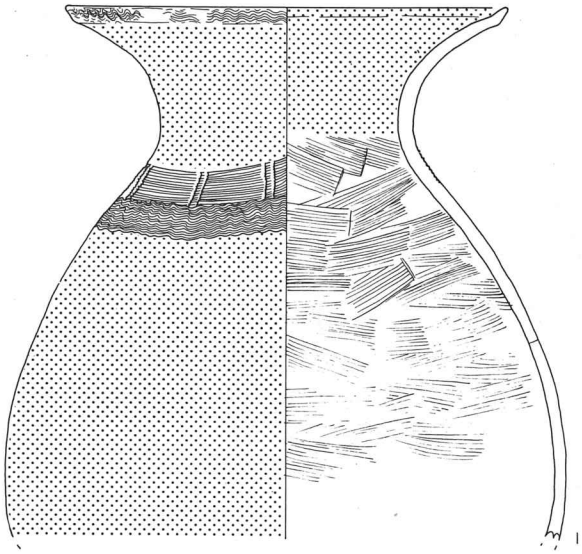


第48図　Y8号住居址出土土器実測図

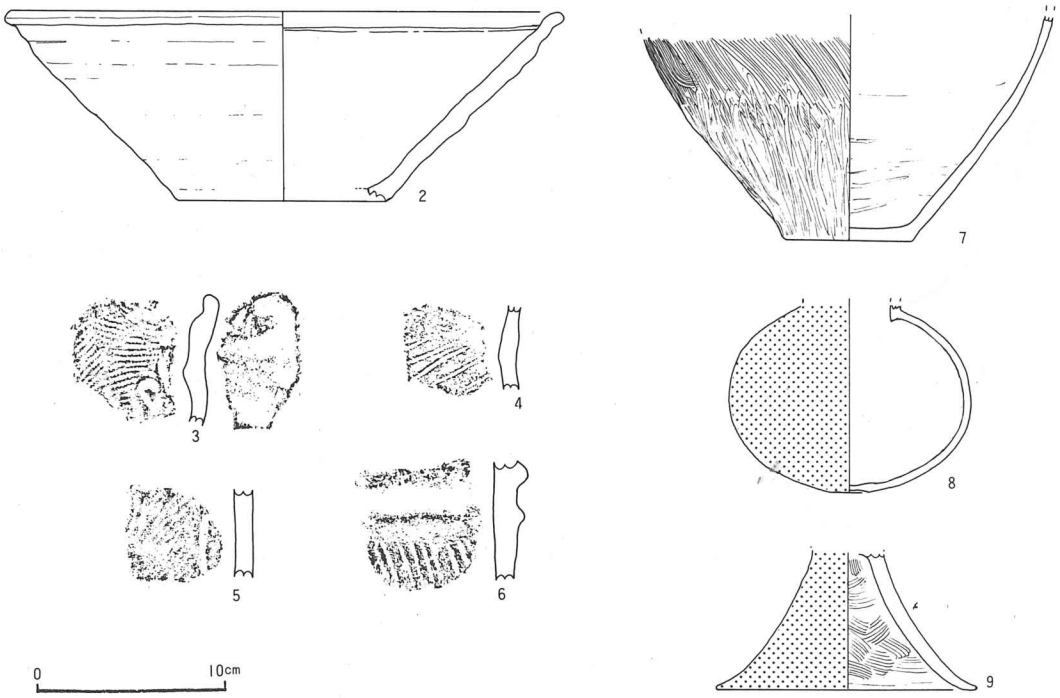


第49図　Y9・Y10・Y11・Y12号住居址出土土器実測図

M1

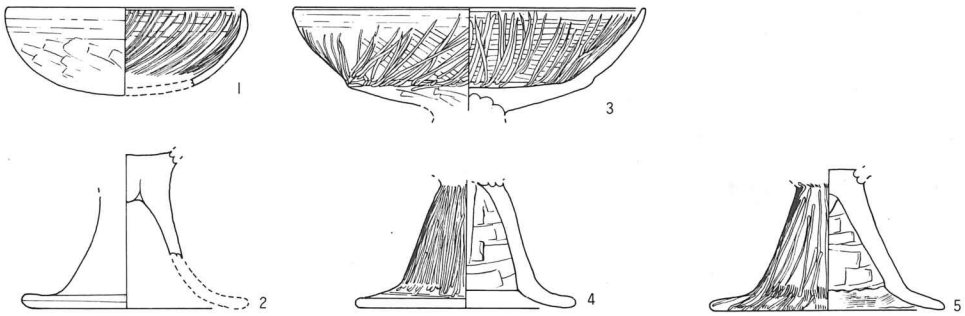


グリッド

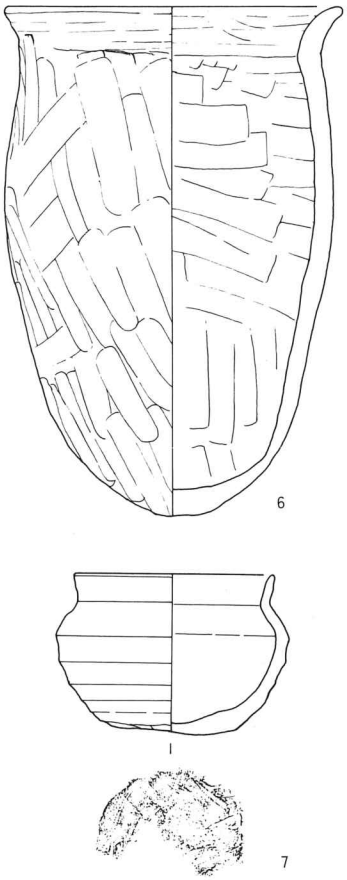


第50図　M1号溝状遺構、D6号土壙、グリッド出土土器実測図

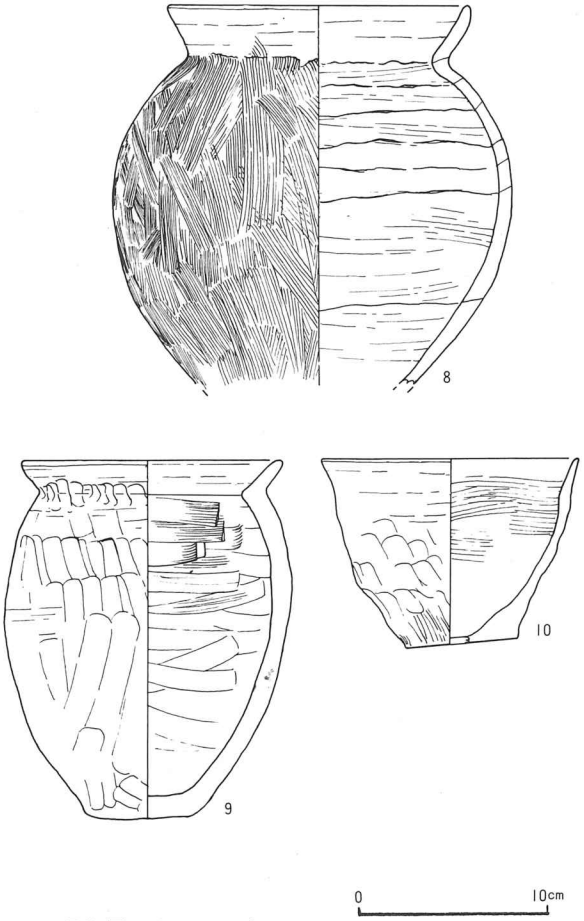
H7



H4

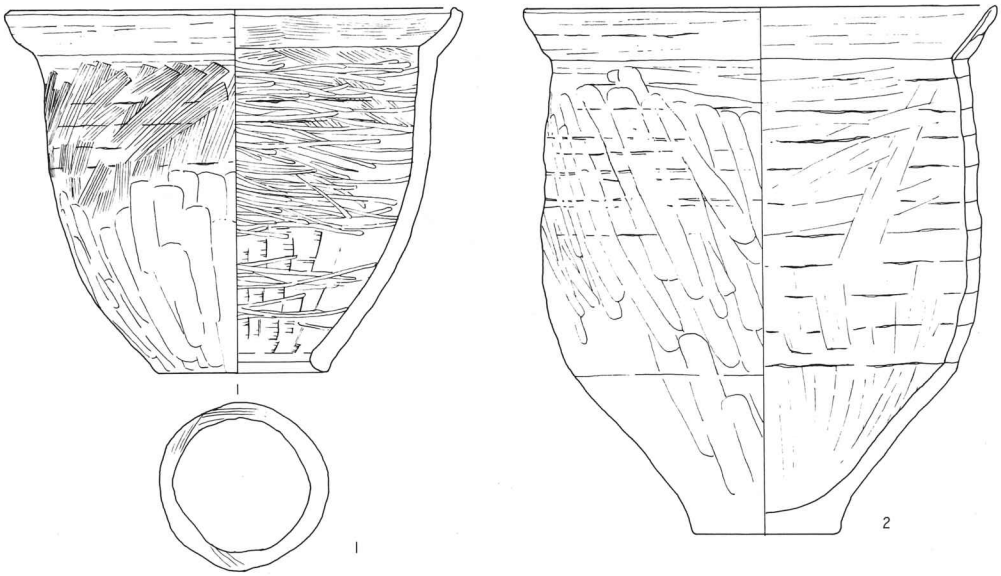


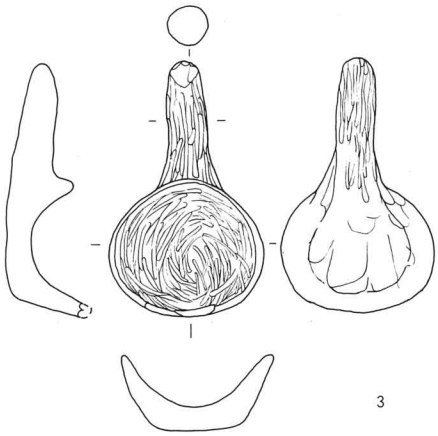
H13

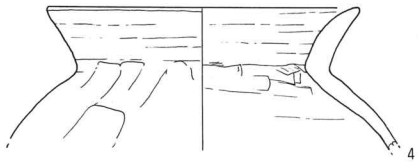


第51図　H7・H4・H13号住居址出土土器実測図

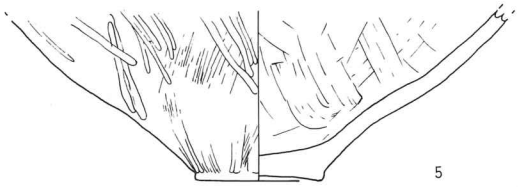
H13

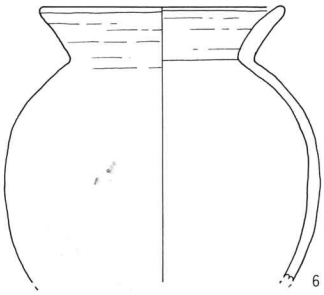






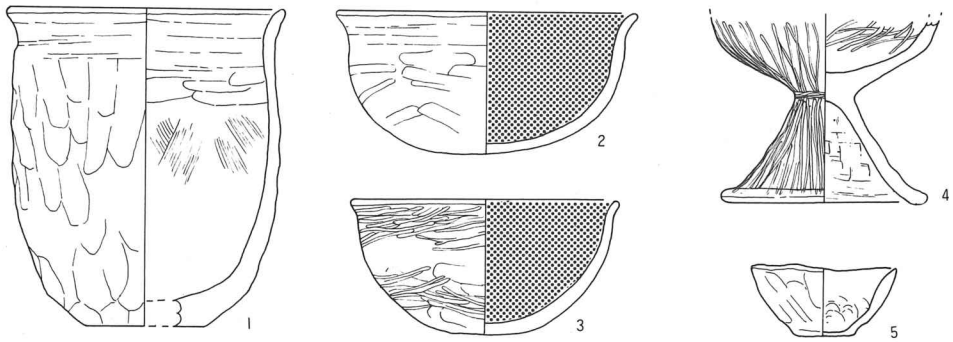
H16



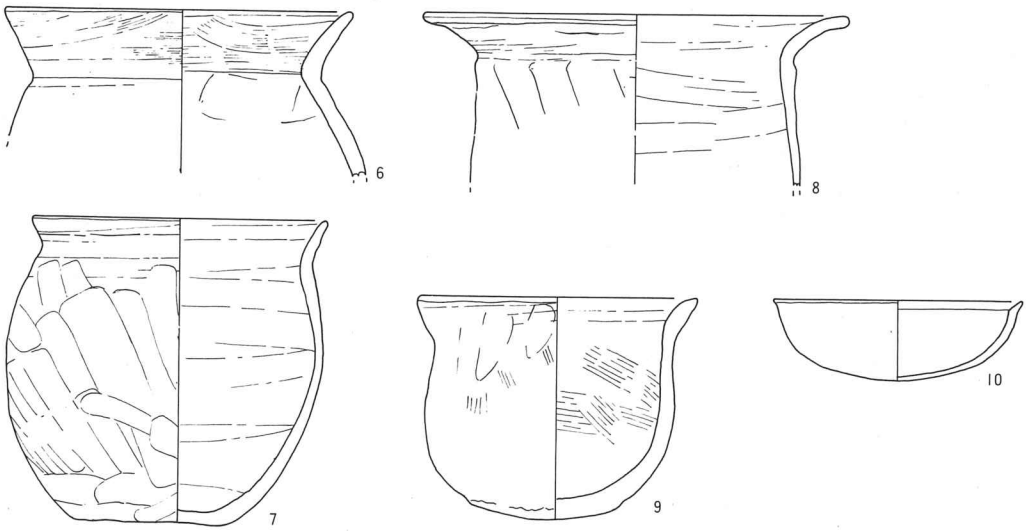


第52図　H13・H16号住居址出土土器実測図

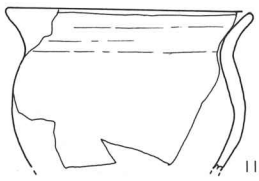
H16



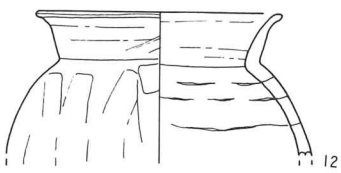
H17



H18

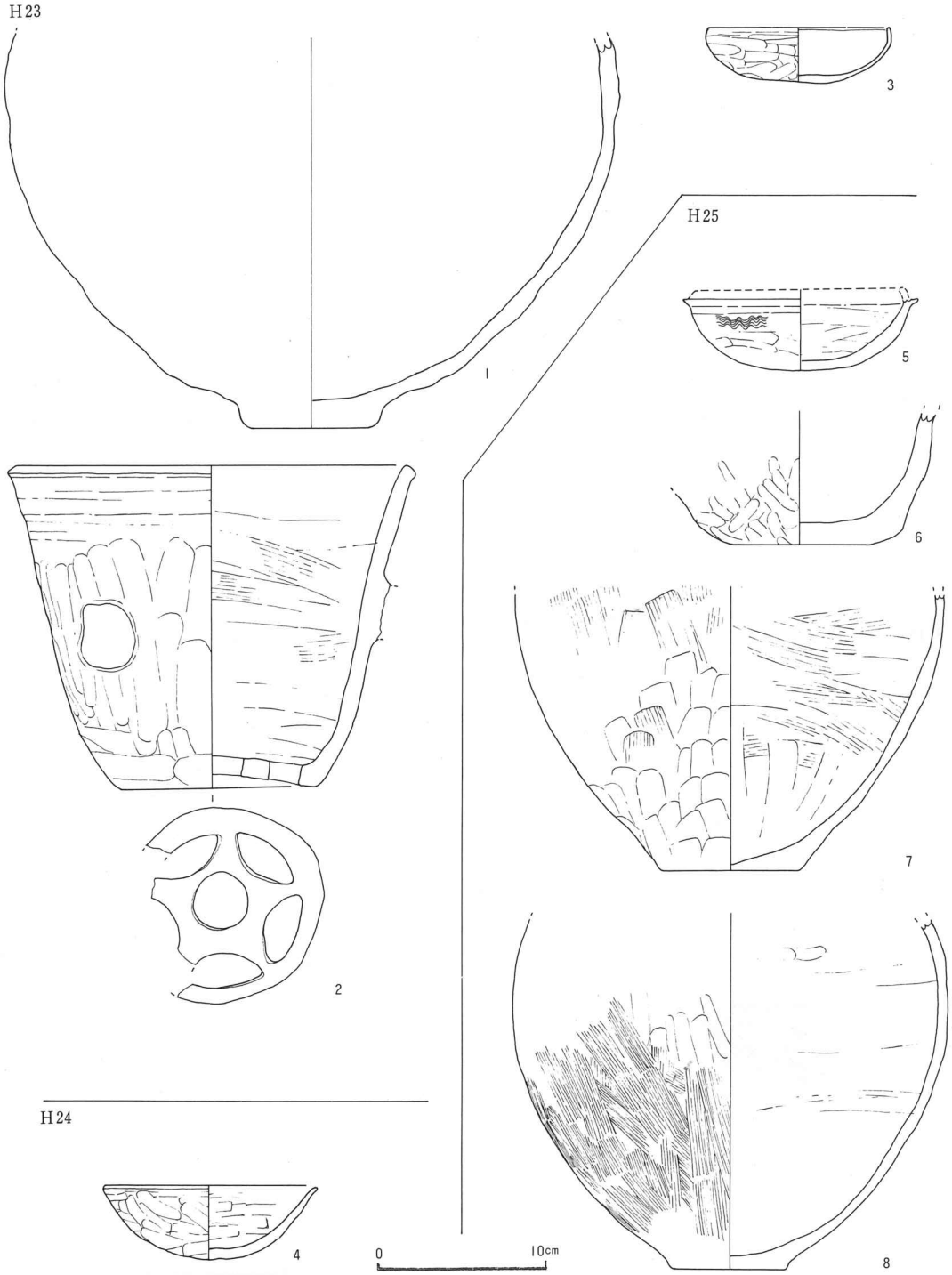


H19

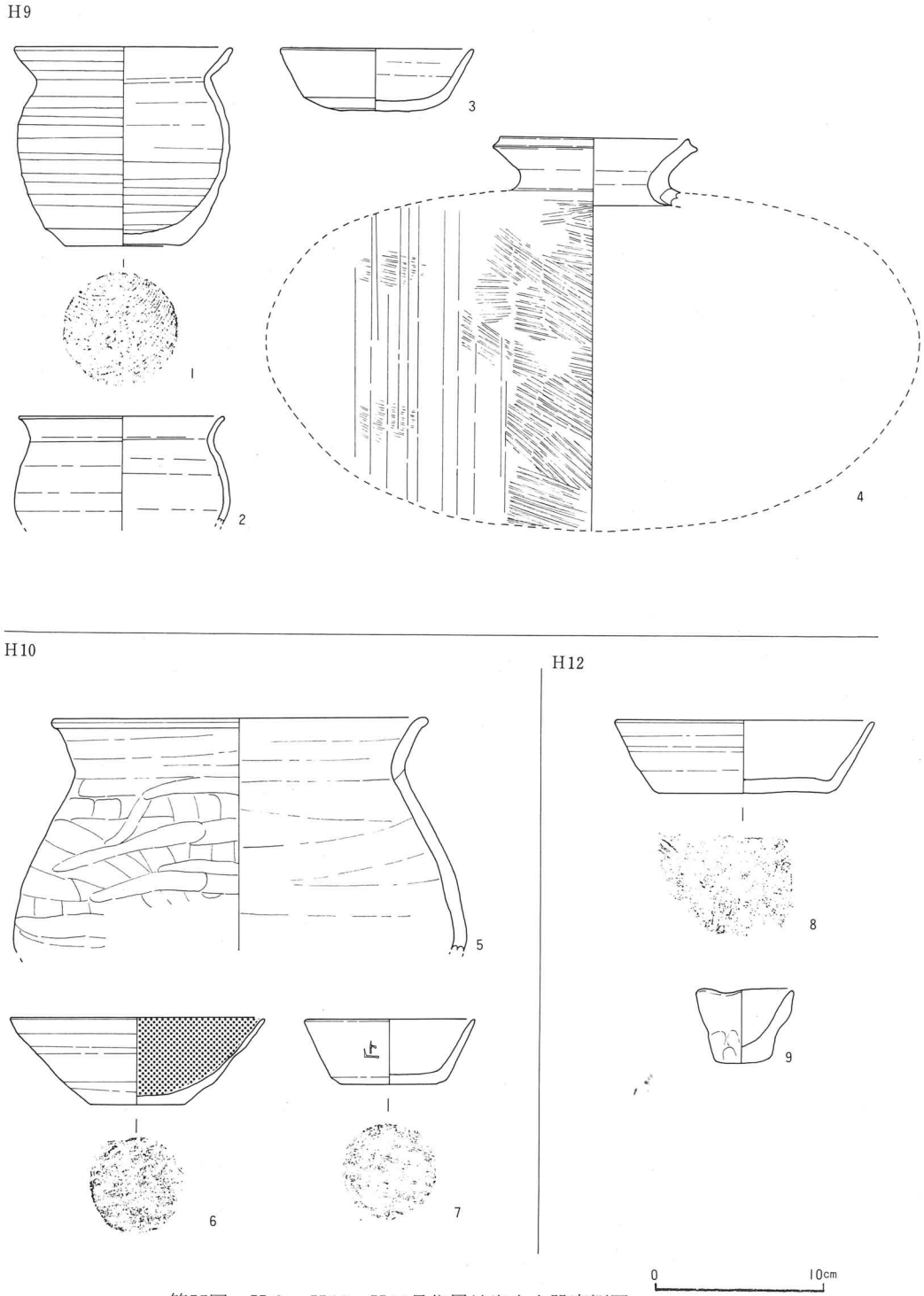


0　10cm

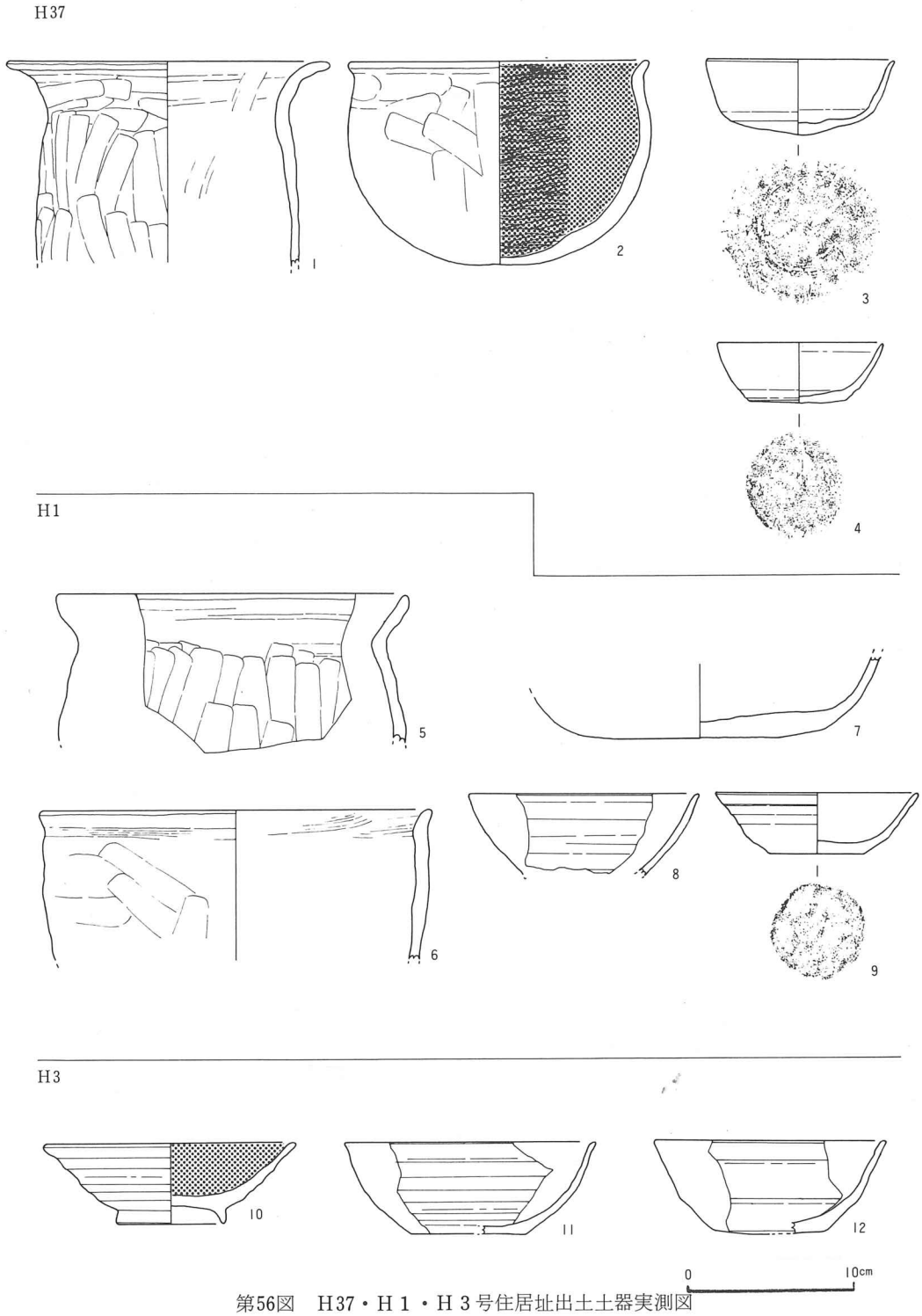
第53図　H16・H17・H18・H19号住居址出土土器実測図



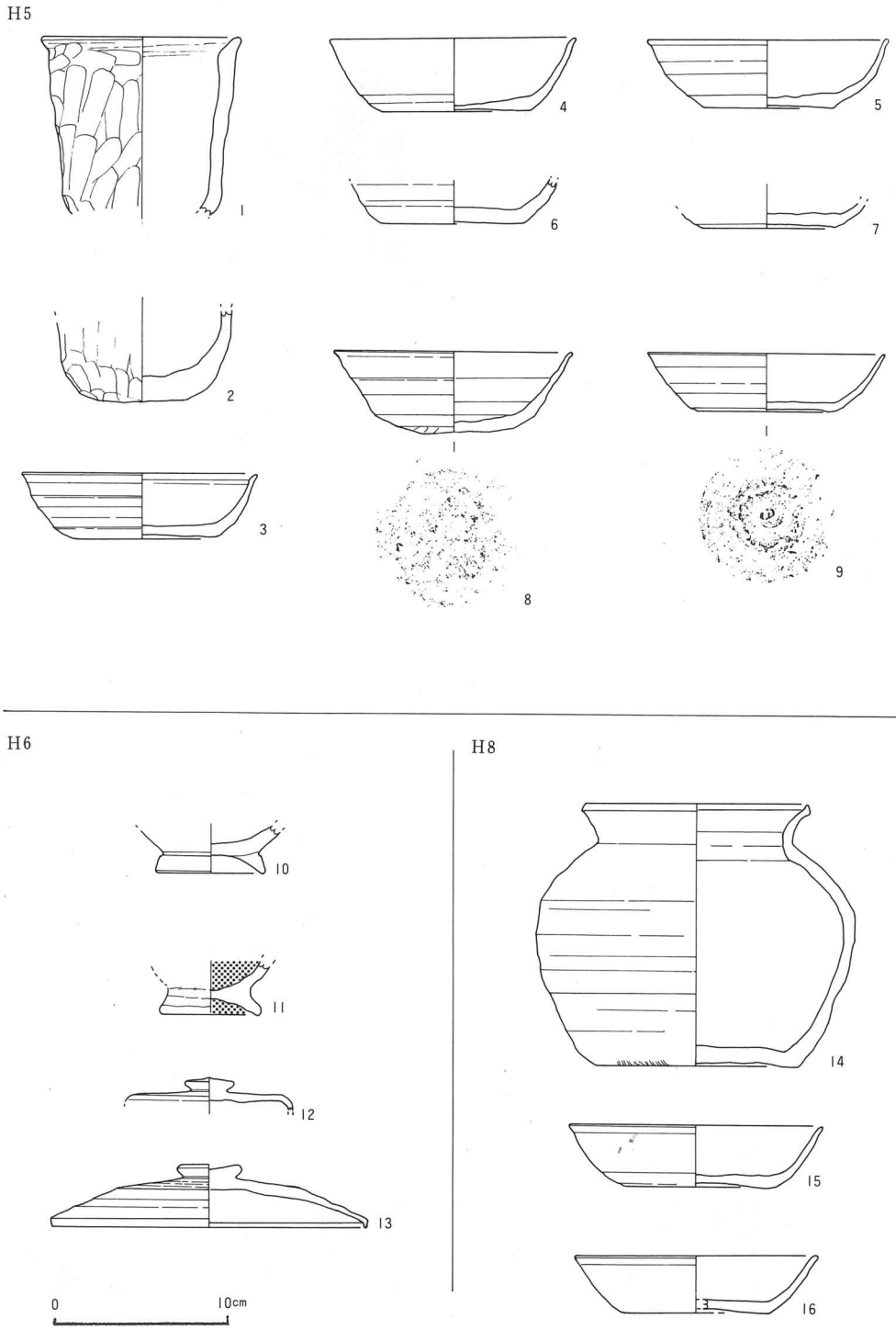
第54図　H23・H24・H25号住居址出土土器実測図



第55図　H９・H10・H12号住居址出土土器実測図

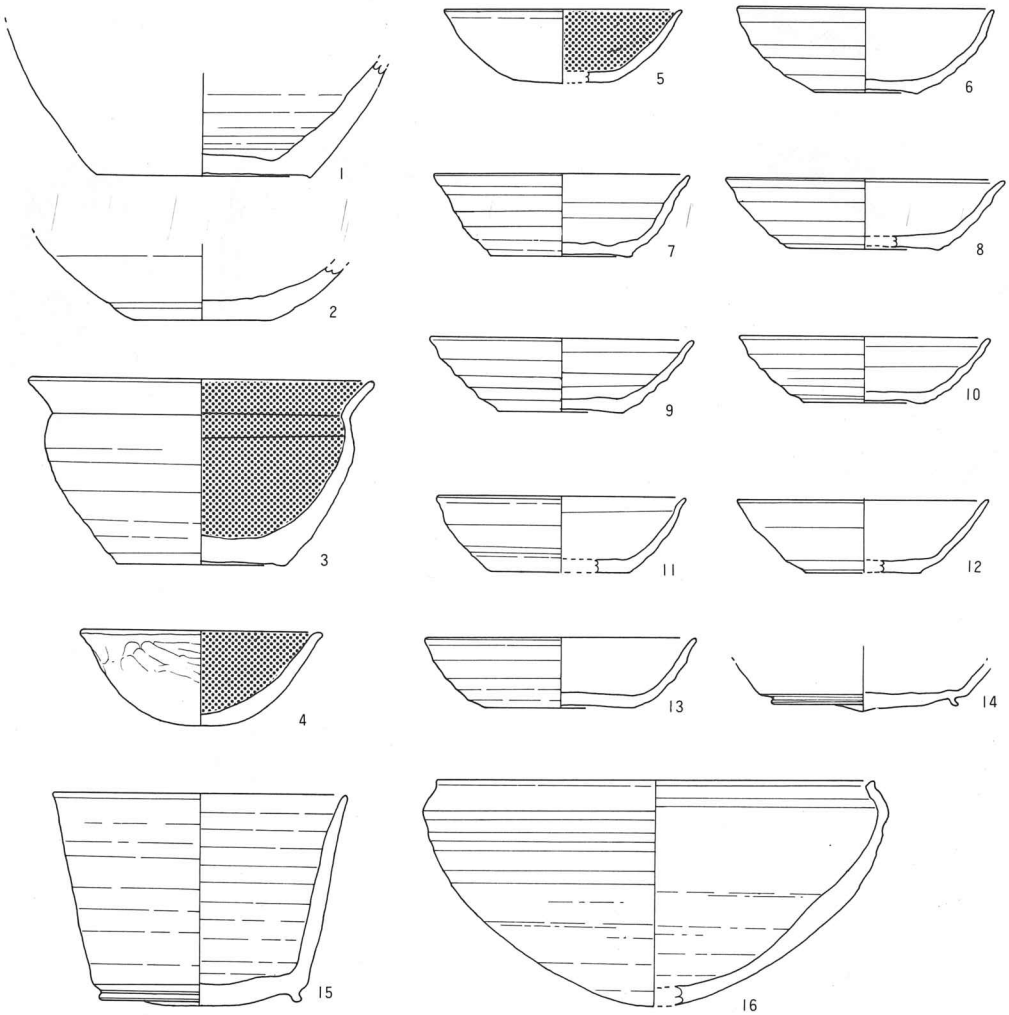


第56図　H37・H１・H３号住居址出土土器実測図

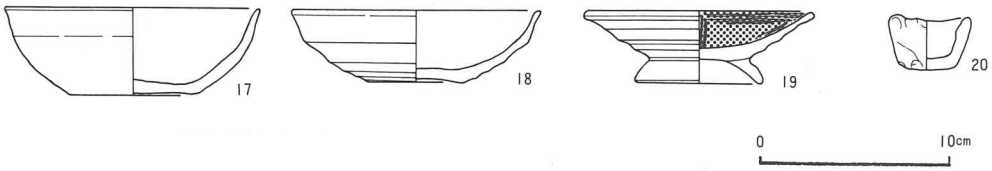


第57図　H5・H6・H8号住居址出土土器実測図

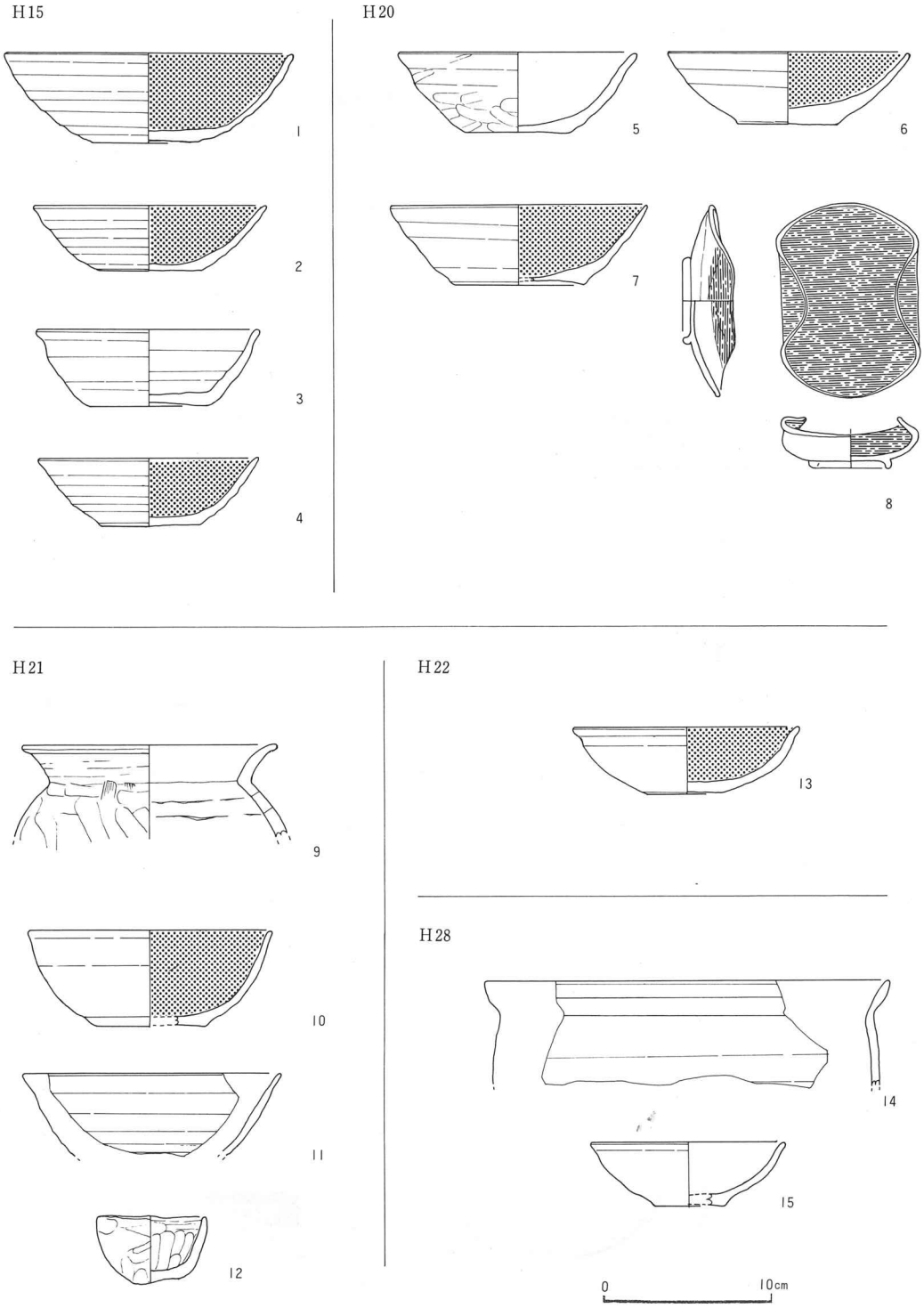
H11



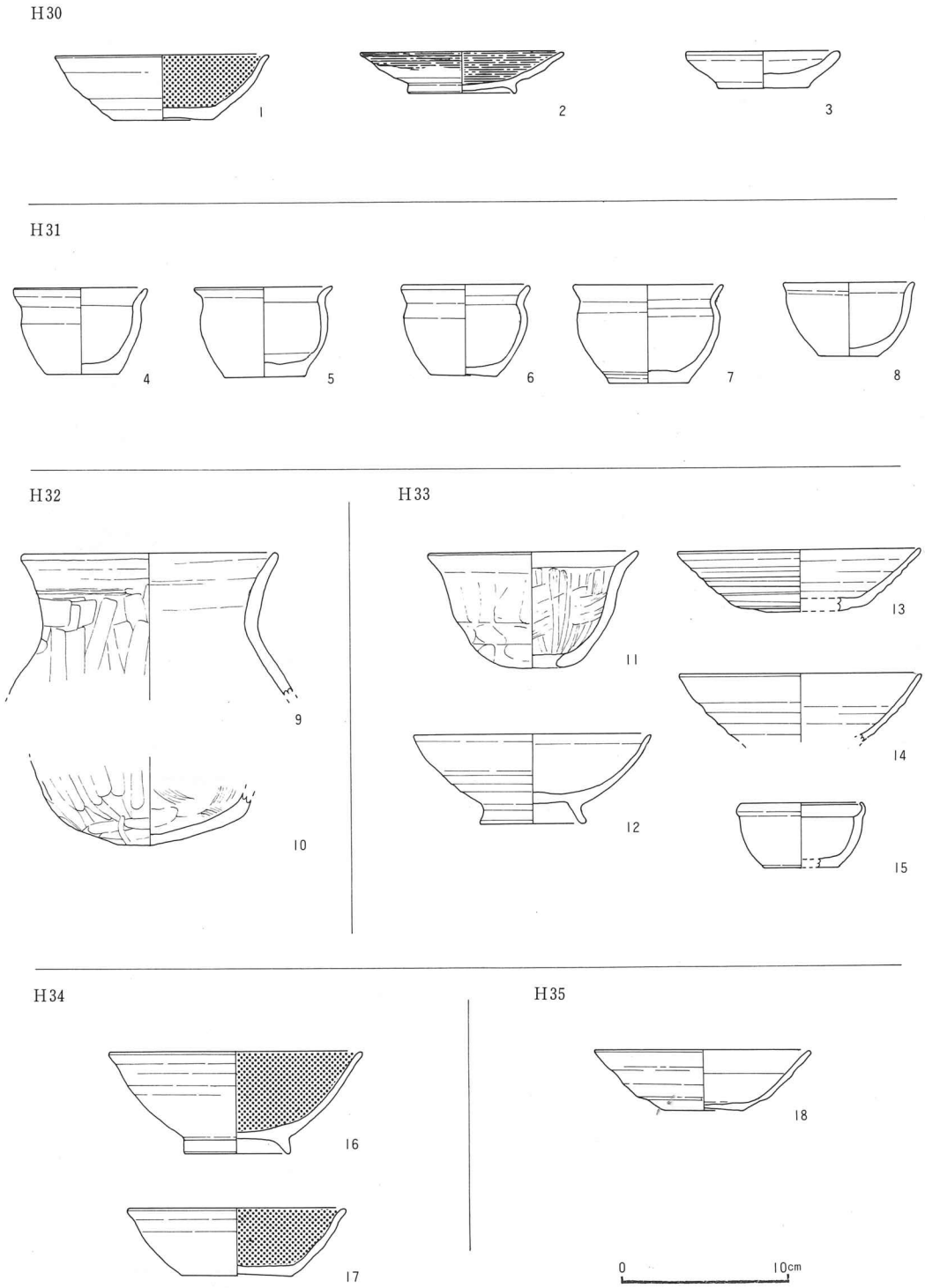
H14



第58図　H11・H14号住居址出土土器実測図



第59図　H15・H20・H21・H22・H28住居址出土土器実測図

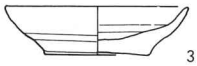


第60図　H30・H31・H32・H33・H34・H35号住居址出土土器実測図

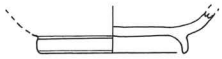
H36

1

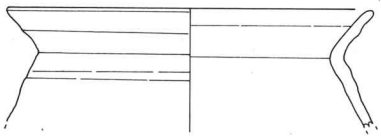
2

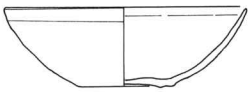

3

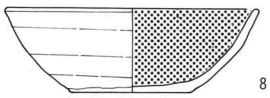
4

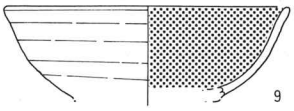

5

H38

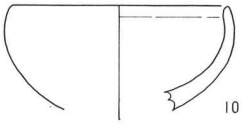

6

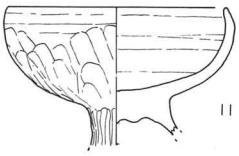

7

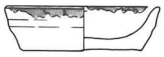

8


9

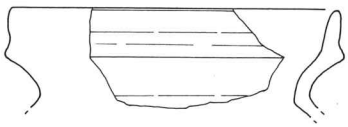
H39


10

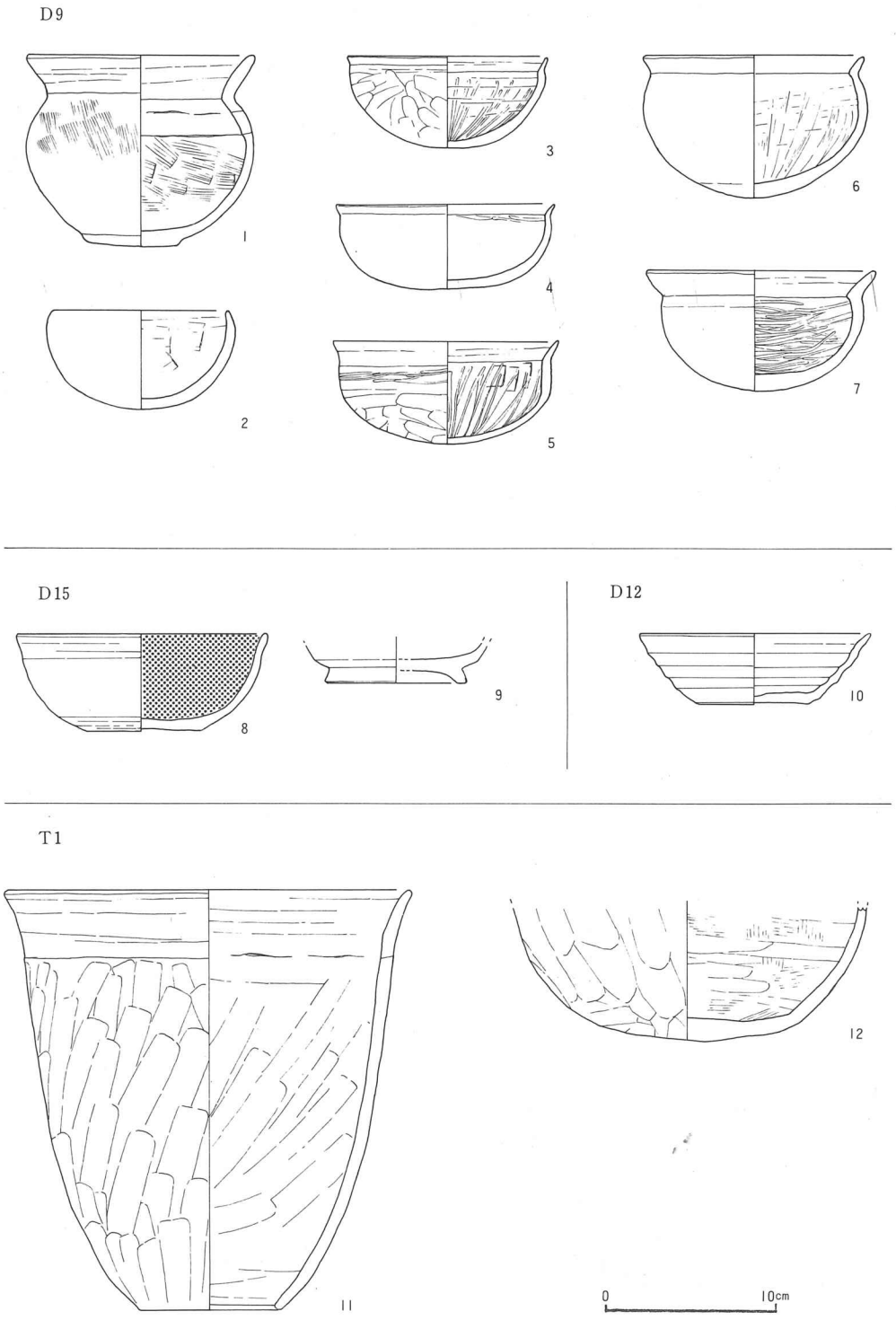

11


12

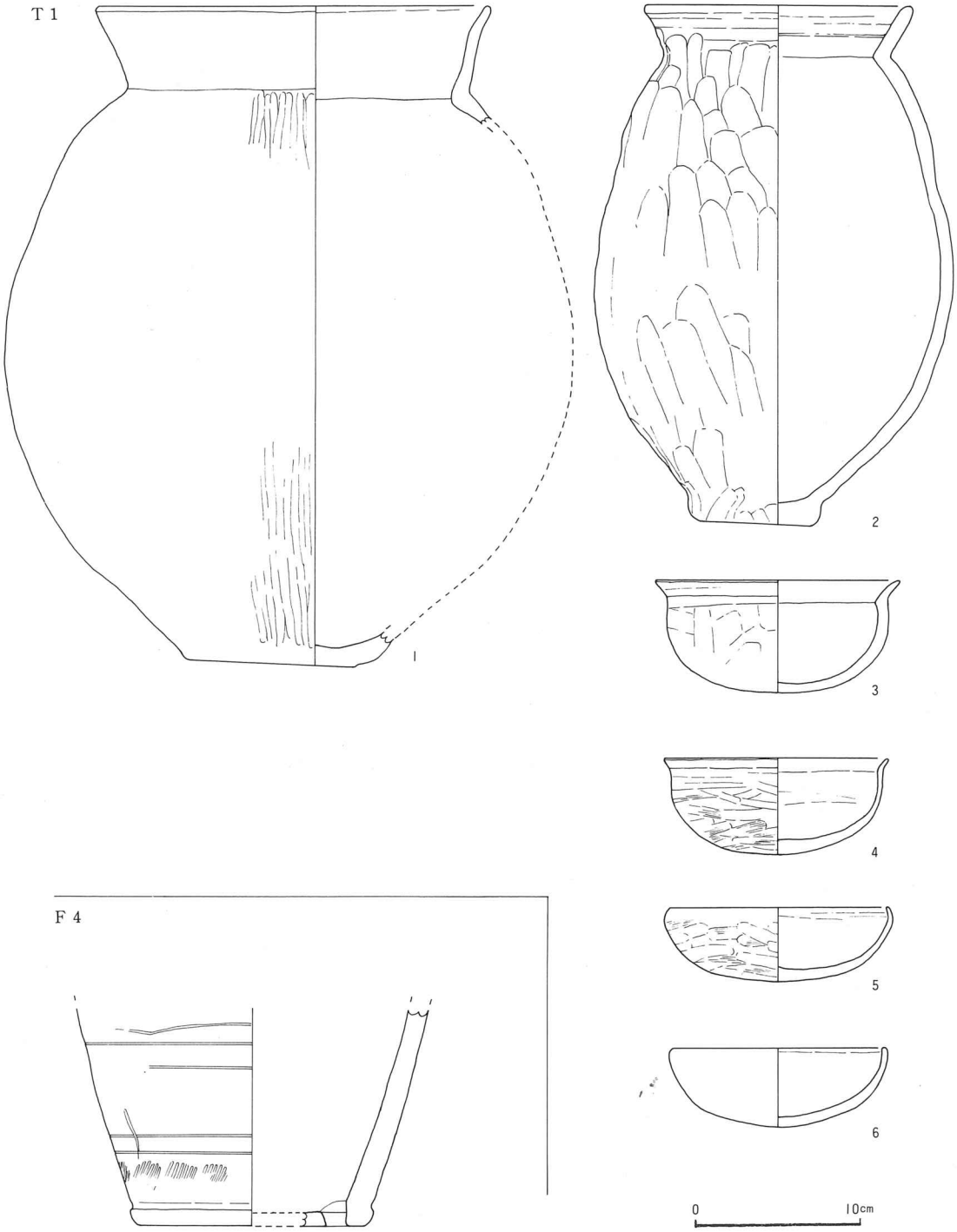
D7


13

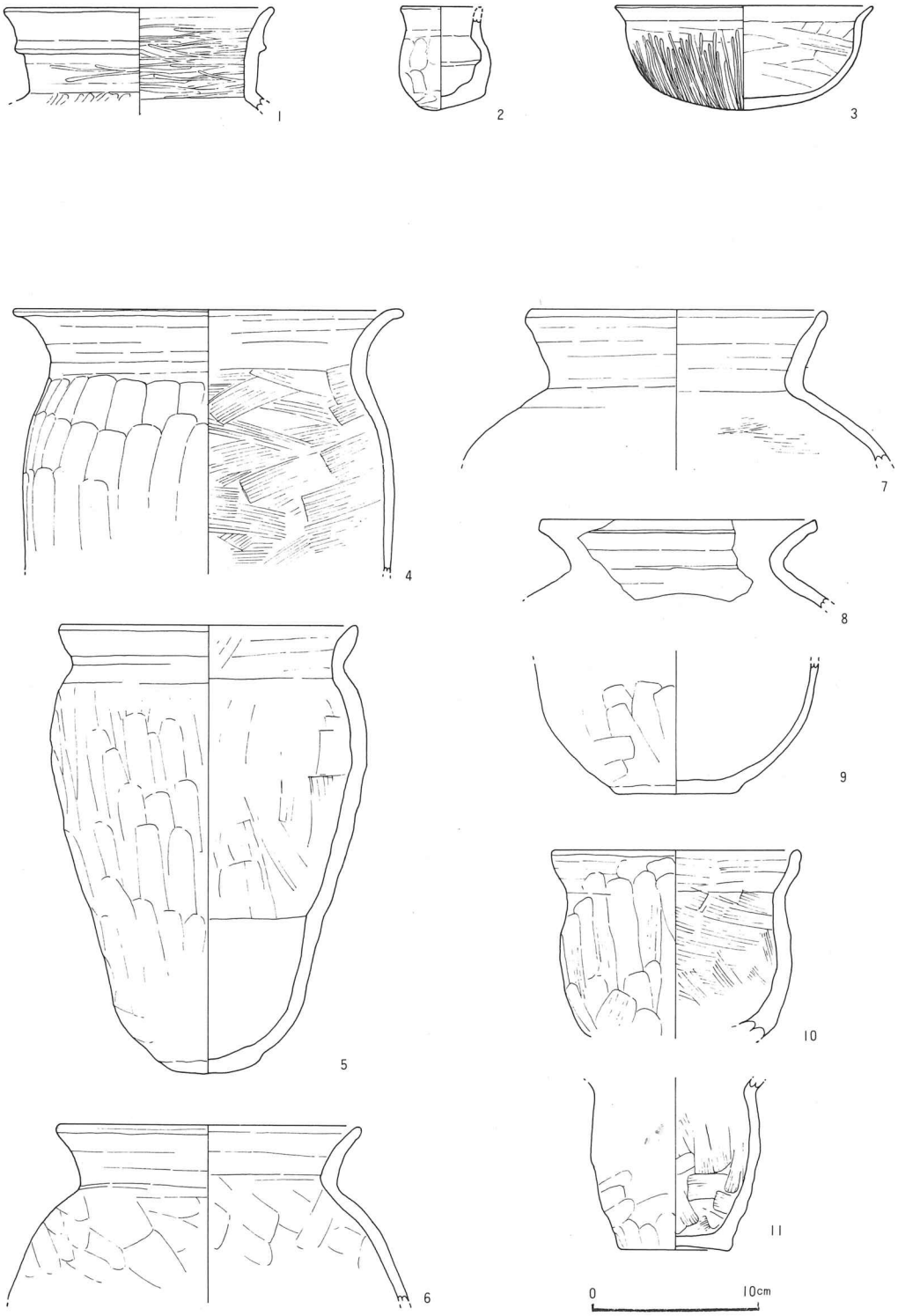
第61図　H36・H38・H39号住居址D７号土坑出土土器実測図



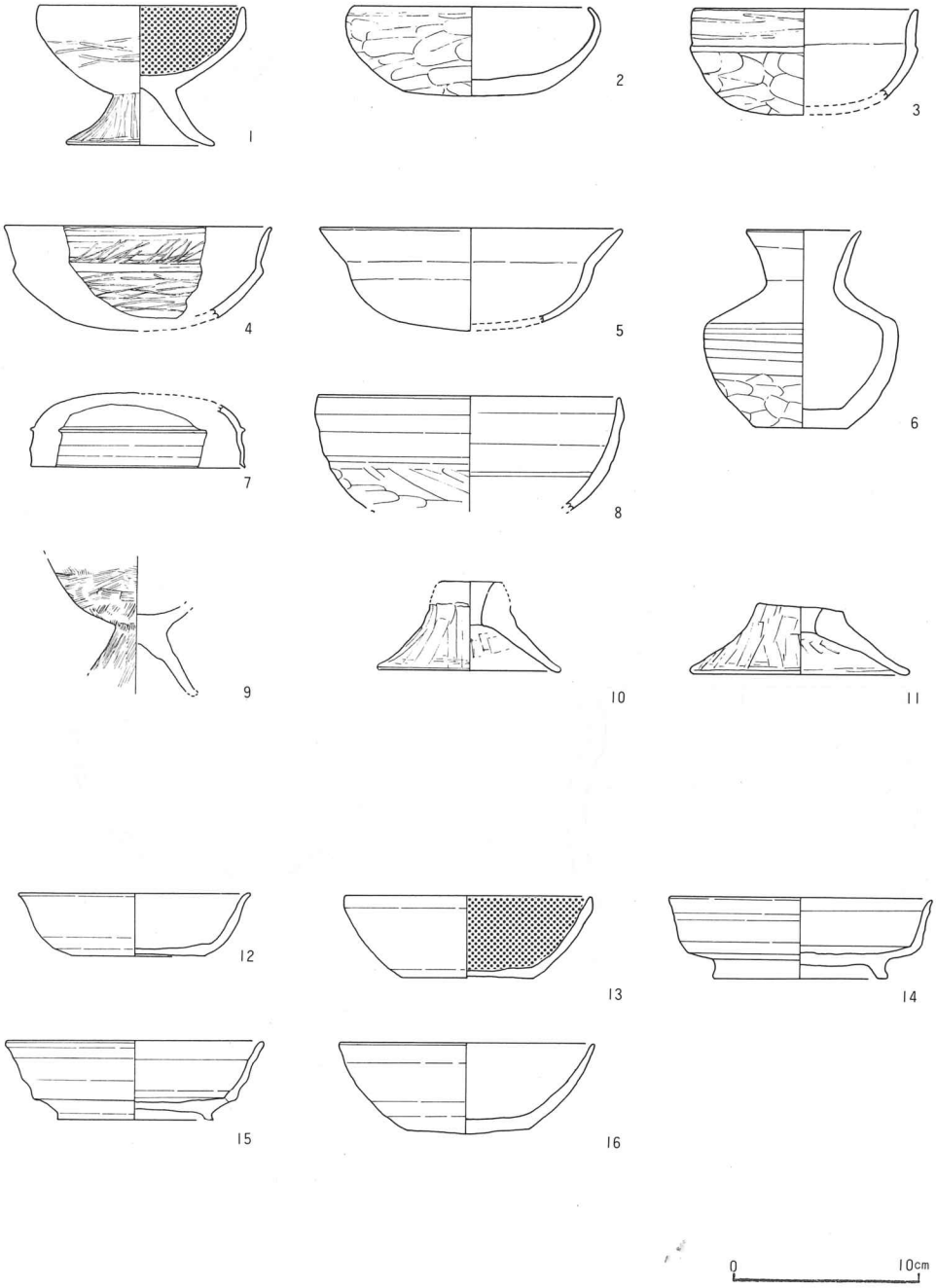
第62図　Ｄ９・D15・D12号土坑、Ｔ１号特殊遺構出土土器実測図



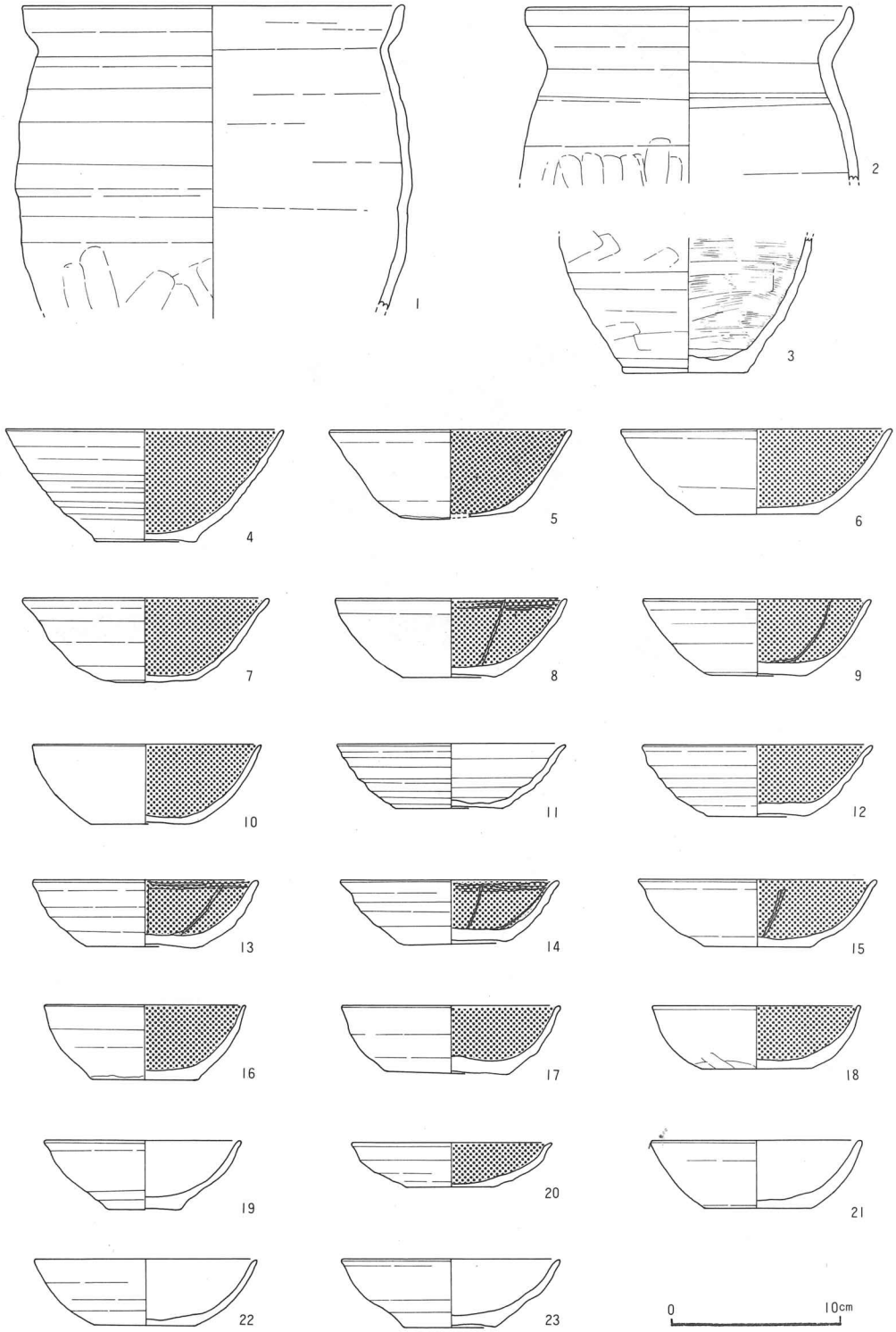
第63図　Ｔ１号特殊遺構、Ｆ４号掘立柱建物址出土土器実測図



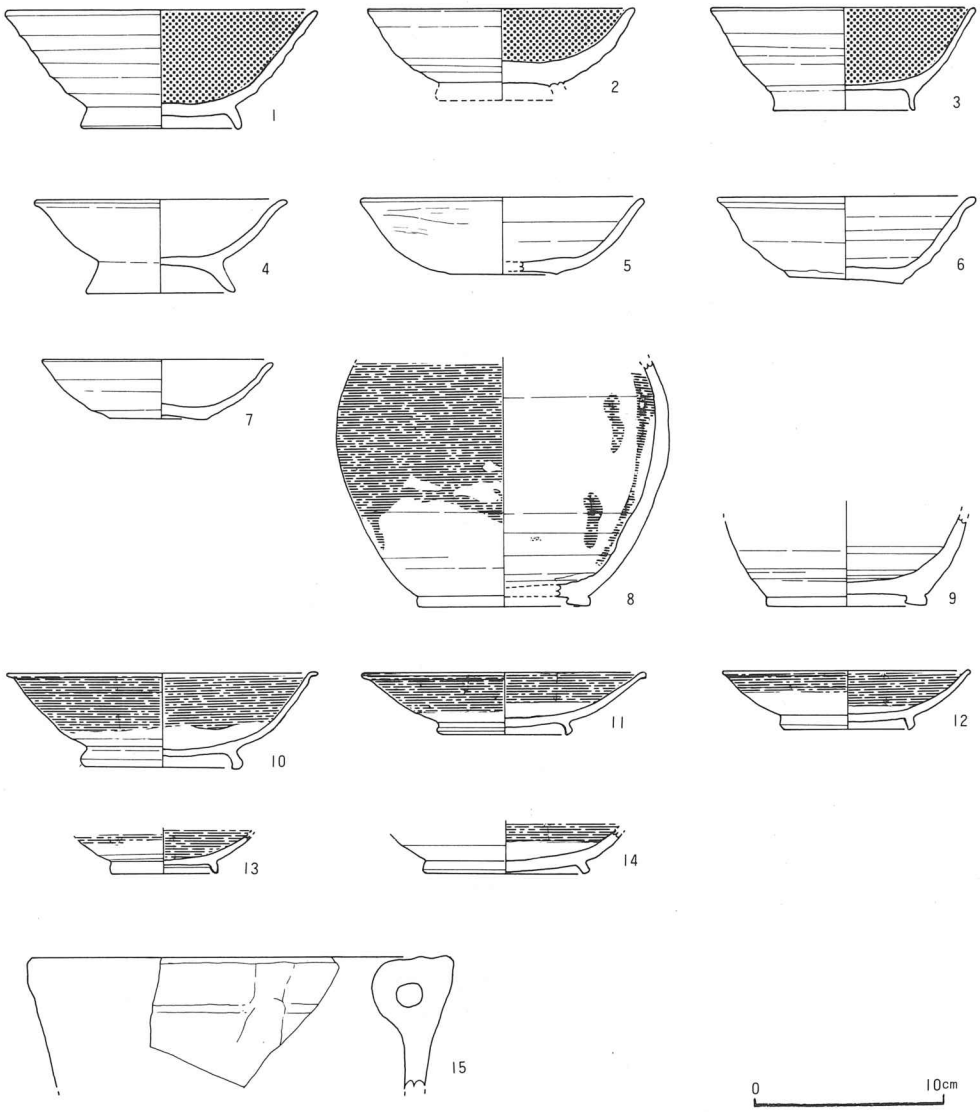
第64図　グリッド出土土器実測図＜1＞



第65図　グリッド出土土器実測図＜２＞



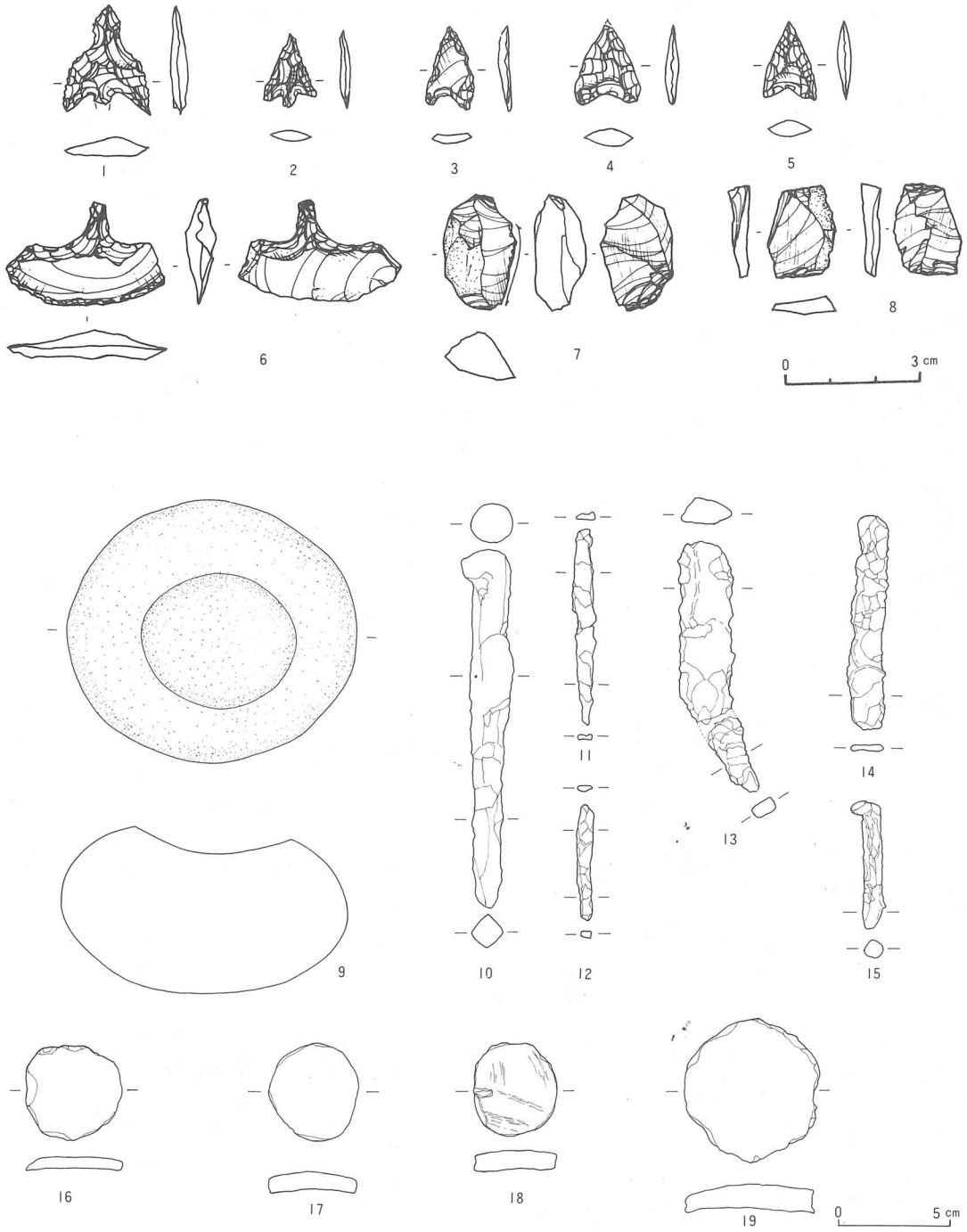
第66図　グリッド出土土器実測図＜3＞



第67図　グリッド出土土器実測図＜４＞

第68図　舞台場遺跡出土石器実測図＜1＞

第69図　舞台場遺跡出土石器実測図＜２＞



第70図　舞台場遺跡出土石器、鉄製品、土製円板実測図

第3表　舞台場遺跡出土土器一覧表

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
Y1	44－1	坏	(15.0) 7.2 (6.8)	口辺部略直線的に外傾し、口縁部内湾する。	内外面・底部　赤色塗彩ミガキ	南西区
Y1	44－2	壺	— 〈 4.9〉 (7.0)	底部のみ	外面　ミガキ　底部磨滅 内部　ハケ　磨滅	褐色 南西区
Y2	44－6	甕	(21.9) 29.9 8.0	口辺部全体に外反し、頸部で収縮湾曲し、胴中位上にかけてゆるやかに張り、内湾気味に底部に窄まる。口径と胴最大径が同じ。	外面　口～胴上半波状文（14本）下半ミガキ 内面　ヘラミガキ	茶褐色 南西区
Y2	44－7	坏	— 〈 3.3〉 (3.4)	口辺部直線的に外傾し、口縁部で内湾気味に直立する。底部平底。	外面　口縁部横ナデ　口辺部ハケ 内面　口縁部横ナデ　口辺部ナデ	褐色 南西区
Y2	44－8	高坏脚	— 〈13.9〉 19.6	脚部はやや外反気味に開き、裾部で大きく開く。三角スカシが四方に設けられる。	外面　赤色塗彩ミガキ 内面　ハケ	南西区
Y2	44－9	壺	(38.2) 〈 3.9〉 —	口辺部のみ。外反気味に大きく外傾。大形品。	口辺部内外面　赤色塗彩ミガキ 口唇部縄文転す	南西区
Y3	45－1	壺	(21.6) 〈12.6〉 —	口辺部が二段階に外反し、口辺下部外傾外反、外稜をもって更に外傾外反し上部は水平に近くなる。頸部は収縮し緩やかに湾曲、胴部は強く張り球形を呈す。	口辺部内外面・胴部外面　赤色塗彩ミガキ　頸部簾状文（16本2連止めの5ヶ所）横線文　胴部内面ナデ	南西区
Y3	45－2	高坏	(12.7) 〈 3.4〉	脚部と思われる。	外面　天井部塗彩　口縁部横ナデ	南西区
Y4	45－3	坏	17.8 7.4 5.3	口辺部内湾気味に外傾し、口辺上部やや直立気味になる。	赤色塗彩ミガキ 底部塗彩磨滅	北東区
Y5	45－4	甑	— 〈 3.4〉 5.2	口辺部直線的に外傾。底部平底。径13㎜の穴あく。	内外面　ミガキ	北西区
Y5	45－5	甕	— 〈 5.3〉 6.4	小形品。	内外面　ミガキ	磨滅著しい。 茶褐色
Y6	45－6	甑	— 〈 5.3〉 4.6	外反気味に底部に窄る。底部1.7㎝の孔あく。	内外面　ミガキ	橙色 中央上面
Y6	45－7	壺	— 〈 1.9〉 (7.8)	底部のみ。	外面　ミガキ 内面　ヘラケズリ	東側
Y6	45－8	鉢	— 〈 6.6〉 5.6	下半のみ残存。底部台状をなし、直線的に底部に窄まる。	内外面　赤色塗色ミガキ　底部ミガキ	北西区
Y6	45－9	甕	15.2 〈 9.3〉 —	口辺部短く強く外反し、頸部は屈曲気味に胴上半が強く張る。最大径は胴径。	外面口辺・胴上半部波状文→頸部横線文（16本） 内面　ミガキ	褐色 南東区上面
Y6	45—10	壺	— 〈26.1〉 —	口辺部外傾外反し、頸部は緩やかに湾曲し無果花状の胴形を呈し、胴中位下に最大径をもち外稜を有す。ややこけて底部に窄まるようである。	外面　頸部櫛描T字文（13本）　口辺内外面・胴外面塗彩ミガキ 内面　剝落著しい	南東区
Y6	46－1	壺	— 〈16.9〉 11.2	胴下半外湾気味ながら略直線的に窄まる。	外面　ヘラミガキ 内面　剝落著しい	南東区
Y6	46－2	甕	(23.4) 28.7 7.0	口辺部長く略直線的に外傾、頸部で湾曲し、胴上半は扁球形に張り、胴下部は直線的に窄まり、底部はやや突出する。口径と胴中位上の最大径は略同値。	外面　口唇部縄文　頸部簾状文（13本1連止め　14ヶ所）　口辺・胴上半波状文　胴下半ヘラミガキ（縦）底部ミガキ　内面　ミガキ（横方向）	茶褐色 南西区床
Y6	46－3	甕	(15.2) 〈 6.1〉 —	口辺部全体に外傾外反する。口辺部のみ。	外面　頸部簾状文（11本　2連止め） →口辺部波状文	茶褐色 外面スス付着 南西区
Y6	46－4	甕	(16.4) 〈 9.8〉 —	口辺部外反して外傾、上部は直立気味になる。頸部で収縮湾曲して胴中位にかけてやや張る。最大径は口径が最大径。	外面　頸部簾状文（12本　2連止め） 口辺・胴上半波状文 内面　ミガキ	外面スス　褐色 内面黒色帯びる 南西区上面

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
Y6	46—5	壺	— 9.6 —	胴上半のみ。略直線的に外方に張る。	外面　ハケ→頸部簾状文（12本　2連止め　18ヶ所）→波状文（断絶、重復して帯）　胴部ミガキ 内面　ハケ　無彩色	淡褐色 炉
Y6	46—6	甕	— 〈4.0〉 6.4		ヘラミガキ	内面黒色変 茶褐色 北西区上面
Y6	46—7	甕	— 〈12.2〉 7.8	胴下半。略直線的に底部に窄まる。大形品。	ヘラミガキ	内面炭化物付着 茶褐色 南西区
Y6	46—8	高坏	(25.8) 〈4.4〉 —	口辺部やや内湾気味に外傾し、口縁部は緩い稜をもって外方に水平に折れ外縁をなす。	口辺部内外面　赤色塗彩ミガキ	南東区
Y7	47—1	甑	— 〈7.6〉 4.2	底部に一孔径9㎜。口辺部は外反気味に窄まる。	外面　ミガキ 内面　ハケ目残してミガキ	橙色 南西区下
Y7	47—2	壺	(29.8) 〈9.2〉 —	口辺部外反して外傾、上部内湾気味に直立。	外面　口縁部波状文　口辺部内外面ミガキ	橙色 南西区壁 SNベルト
Y7	47—3	甕	(15.4) 〈9.2〉 —	小形品。口辺部強く外傾外反する。	外面　ハケ目残し口辺・胴上部波状文→頸部簾状文（16本　1連止め） 内面　ミガキ	赤茶褐色 南西区 SNトレ
Y7	47—4	甕	(16.4) 〈10.0〉 —	中形品。口辺部外反気味に外傾し、胴部で張る。	外面　口～胴上部波状文→頸部簾状文（14本　3連止め） 内面　ミガキ　口唇部面取り縄文	黒茶褐色 P6
Y7	47—5	甕	(21.6) 〈11.3〉 —	大形品。口辺部やや外反気味に外傾し、上部で内湾気味となる。頸部は収縮し屈曲気味胴部に至る。	外面　口唇部面取り、縄文　口辺部波状文→頸部やや波状を帯び軽く止める程度で横線文様に連続させる　2周	橙、茶褐色 SNベルト
Y7	47—6	甕	— 〈15.1〉 8.0	大形品。底部は内湾気味にややふくらみをもって底部に窄まる。平底。	外面　胴上半波状　胴下半ミガキ 内面　ミガキ	橙色 P6上面
Y7	47—7	甕	11.2 〈10.5〉 —	小形品。口辺部外反気味に外傾し、口縁部直立気味。頸部緩く収縮し胴形は扁球形を呈す。	外面　頸部簾状文（7本　2連止め）→口・胴部波状文 内面　ミガキ	内面茶褐色 外面灰褐色 南東区
Y7	47—8	甕	— 〈7.0〉 5.2	小形品。	外面　胴中位波状文　胴下部ミガキ 内面　ミガキ	茶褐色 北東・南東区
Y7	47—9	甕	— 〈4.5〉 6.4	大形品。	内外面　ミガキ	褐色 北東区
Y7	47—10	甕	— 〈4.1〉 7.0	大形品。	外面　ミガキ 内面　ミガキ	茶褐色 南東区床
Y7	47—11	甕	— 〈5.0〉 6.0	小形品。	外面　ミガキ磨滅 内面　ミガキ	赤茶褐色 SNベルト南
Y7	47—12	片口坏	15.0 6.7 4.3	底部突出し、直線的に外傾し口縁部直立する。片口が付く。	内外面　赤色塗色ミガキ　底部ミガキ	南西区上
Y8	47—13	壺	33.7 〈7.2〉 —	口辺部全体に外反して外傾。	内外面　赤色塗彩　ミガキ	
Y8	47—14	壺	— 〈6.0〉 (12.8)	大形品底部。	内外面　ハケ	褐色
Y8	48—1	甕	20.4 29.6 7.8	口辺部外傾して外反、頸部で収縮湾曲し、器高中位下にかけて張り、内湾気味に底部に窄まる。口径と胴最大径が同値を示す。	外面　口唇部刻目　頸部簾状文と横線文（10本）　ハケ目残して胴上半・口辺部波状文　下半ミガキ（縦） 内面　ミガキ	外面スス付着 橙色
Y8	48—2	甕	13.5 13.6 5.6	小形品。口辺が短かく外傾、頸部で収縮し肩部で張り、内湾しながら底部に窄まる。	外面　口唇部刻目　頸部簾状文（12本　3連止め）　口辺・胴上半波状文 胴下部ミガキ（縦） 内面　ミガキ（横）	胎土緻密 橙色（内面） 褐色（外面） P4上面
Y8	48—3	甕	(23.0) 〈5.4〉 —	口辺部外傾外反する。	外面　口唇部面取り縄文→波状文	南西区

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
Y8	48—4	甕	13.8 17.3 5.0	小形品。口辺部外反外傾、頸部で収縮し、器高中位下にかけて張り、直線的に底部に窄まる。	外面　頸部簾状文（8本　3連止め） 口辺・胴上半波状文　胴下ミガキ（縦方向）　内面ミガキ（横方向）	胎土緻密 褐色 北西区
Y8	48—5	壺	(11.0) 16.0 6.2	口辺部外傾外反、頸部で緩く収縮し、胴中位にかけて張り緩い稜をもって底部に窄まる。口径と胴最大径が同値を測る。	外面　口辺部ミガキ　頸部簾状文（7本　2連止め　6ヶ所）　波状文（3帯）　下部ミガキ	乳褐色 胎土雑 南西区床
Y8	48—6	深鉢	— 〈3.0〉 5.4	底部平底。	内外面　赤色塗彩ミガキ　底部ミガキ	中央床
Y8	48—7	坏	— 〈3.0〉 5.0	底部台状に突出し、口辺部内湾気味に外傾する。	赤色塗彩ミガキ　底部塗彩	
Y9	49—1	甑	18.9 〈12.5〉 —	口辺部は略直線的に外傾。	内外面　ミガキ	褐色
Y9	49—2	甕	12.8 〈7.0〉 —	口辺部強く外反。	外面　波状文 内面　ミガキ	茶褐色 北東区
Y9	49—3	甕	— 〈22.0〉 7.4	頸部で収縮、湾曲し、胴中位にかけて張り底部に窄まる。	外面　波状文　磨滅　下部ミガキ	茶褐色 北西区
Y10	49—4	高坏	— 〈12.3〉 (14.4)	脚は直線的に外傾し開き、裾部で外反する。	外面　赤色塗彩ミガキ 内面　ハケ　裾部横ナデ	上面
Y11	49—5	甕	(12.6) 〈7.0〉 —	小形品。口辺部長く外傾外反し、頸部直立する。	外面　頸部横線　口辺部波状文	床
Y11	49—6	甕	(18.2) 〈7.1〉 —	口辺部外傾し外反する。	外面　口辺部波状文→頸部簾状文　口唇部刻目	床
Y11	49—7	甕	(17.8) 〈7.6〉 —	口辺部やや外反気味に外傾。頸部で収縮する。	外面　口辺部波状文→頸部簾状文	褐色 床
Y12	49—8	甕	(17.2) 〈11.7〉 —	口辺部外傾し強く外反する。頸部で収縮、湾曲し、胴上部にかけて張る。最大径は口径にあるものと思う。	頸部簾状文（10本　3連止め）　口辺・胴上部波状文 内面　ミガキ	淡褐色 焼成良好 南西区
Y12	49—9	甕	11.0 〈8.3〉 —	口辺部外傾し外反、頸部で収縮し、胴部でわずかに張る。最大径は口径。	頸部簾状文（11本）　口・胴部波状文	床
M1	50—1	壺	23.4 〈28.1〉 —	口辺下部直立し、上部で大きく外反外傾し、口縁部外稜をもって短かく直線的に外傾し、有段をなす。胴中位にかけてゆるやかに張る。	外面　口縁部波状文　頸部簾状文・波状文　口辺及び胴上部赤色塗彩　ミガキ　内面　口辺部赤色塗彩　胴部ハケ	M1西側上面
グリッド	50—2	浅鉢	29.4 10.0 11.0	口辺部直線的に外傾。口縁部でわずかにそる。	外面　ケズリ 内面　ミガキ	茶褐色 こ—22G
D6	50—7	甕	— 〈11.8〉 6.7	胴上部内湾気味に底部に窄まる。底部平底。	外面　胴中位斜状文　下部ミガキ 内面　ミガキ	褐色
グリッド	50—8	坩	— 〈9.9〉 2.0	胴部全体に扁球形を呈し、小さい底部はややくぼむ。	外面　赤色塗彩　ミガキ 内面　ナデ	さ—22G
グリッド	50—9	高坏(脚)	— 〈7.2〉 13.8	脚部全体に外反して開く。	外面　赤色塗彩　ミガキ 内面　ハケ　内黒ナデ	こ・さ—17・18G
H7	51—1	坏	12.6 (4.2) —	丸底の底部。口辺部全体に内湾。	外面　口辺部横ナデ　底部へラケズリ 内面　ミガキ	赤茶褐色
H7	51—2	高坏	— 〈8.5〉 10.8	脚上部は柱状をなし、下部は外反して開き、裾部は大きく外反して水平に延びる。	内外面　磨滅	黄褐色
H7	51—3	高坏	18.6 〈5.7〉 —	坏部のみ。水平に近く下部はのび、外稜をもちやや直立し、内湾気味に外傾する。	外面　暗紋様ミガキ（放射状）	茶褐色 南東区

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
H 7	51—4	高坏	— 〈 7.4〉 11.6	脚部のみ。やや内湾気味に外傾し開き、裾部で外反気味に折れて水平に裾部をなす。	外面　ミガキ 内面　ヘラケズリ　裾部横ナデ	茶褐色 南東区
H 7	51—5	高坏	— 〈 7.5〉 12.3	脚部のみ。脚直線的に外傾して開き、裾部で水平に折れる。	外面　ミガキ 内面　横のヘラケズリ　裾部ナデ	茶褐色 南東区床
H 4	51—6	甕	18.0 26.8 —	長胴甕、口辺部短かく強く外反、頸部でやや収縮湾曲し胴中位上で張り丸底状の底部に窄まる。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　内面ヘラケズリ	北東区
H 4	51—7	短頸壺（須）	10.5 8.3 （ 6.8）	口辺部やや外傾気味に直立し、頸部で屈曲し、肩部に直線的に張り、内湾気味に底部に窄まる。底部は丸底気味の平底。	外面　口・胴部ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　上部ロクロ横ナデ　下部ナデ	灰色　肩部外面自然釉付着 カマド 北東・北西区床
H 13	51—8	甕	16.0 〈20.0〉 —	口辺部は内湾して外傾、頸部で「く」の字に屈曲して球形の胴半球形を呈し、下部は直線的に窄まる。	外面　ハケ　口辺部横ナデ 内面　ナデ	堅緻な焼成 褐色　外面黒色部あり 南側
H 13	51—9	小甕	13.8 18.8 6.0	口辺部短く外傾し、頸部で屈曲、胴肩部にかけて緩やかに張り、不安定な底部に窄まる。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラナデ 内面　ナデ	赤褐色 器肉厚い 輪積痕残る カマド
H 13	51—10	甑	13.4 11.0 6.0	口辺下部は内湾気味に立ち上がり、上部外反気味に外傾、甕形土器を転用したか。底部平底。一孔あり。	外面　口辺上部横ナデ　中位は緩いヘラケズリ　下部はハケ目を残してミガキ　内面　口辺上部横ナデ　中位ハケ目残してミガキ　下部　ミガキ	茶褐色 胎土緻密 輪積痕残る
H 13	52—1	甑	24.0 19.2 （ 9.0）	口辺部内湾して外傾し最大径をもち、頸部で折れて胴中位上で張り内湾気味に底部に窄まる。底部全体甑孔。	外面　口辺部横ナデ　胴上部ハケ　胴下部ヘラケズリ 内面　ハケ目　一部ミガキ　下部はヘラケズリ	褐色 粘土帯1.5～2.0cm幅 輪積痕残る。 貯蔵穴
H 13	52—2	甕	（25.0） 28.0 7.5	口辺部内湾気味に外傾、頸部で屈曲し、胴上部はほとんど張らず中位から中位下にかけてわずかに張り、胴高⅓の地点で外稜をもって外反気味に台状の底部に窄まる。	外面　口辺部横ナデ　胴部輪積痕を残してヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　胴部ナデ	褐色 粘土帯1.5～2.0cm幅 貯蔵穴
H 13	52—3	スプーン	8.1 4.4 13.6	土製品。	ミガキ	52—2甕内
H 16	52—4	甕	16.5 〈 7.5〉 —	口辺部外傾し外反気味。「く」の字状を呈し頸部で屈曲し、胴部で張る。	外面　口辺部横ナデ後ミガキ　胴部ミガキ 内面　口辺部横ナデ後ミガキ　胴部ナデ	褐色
H 16	52—5	甕	— 〈 8.5〉 7.4	小さい平底の底部に略直線的に大きく開いた胴下部が窄まる。	外面　ハケ後ミガキ 内面　ハケ	茶褐色
H 16	52—6	小甕	13.0 〈14.5〉 —	口辺部外傾外反「く」の字状を呈して頸部で屈曲し球に近く張る胴形を呈す。	外面　口辺部横ナデ後ミガキ　体部ミガキ 内面　口辺部横ナデ後ミガキ　胴部ナデ	内外面とも熱をうけたため赤褐色
H 16	53—1	小甕	14.5 17.5 6.2	口辺部短かく外傾外反、頸部わずかに収縮し、胴部は長胴形を呈し、平底に窄まる。	外面　口辺部横ナデ胴上部ヘラケズリされたと思うが磨滅。胴下部ヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　胴部ナデ	橙色 南西区
H 16	53—2	坏	15.1 7.5 —	口縁部外傾外反し、口辺部は内湾気味に直立し、底部は丸底を呈す。	外面　口辺部横ナデ後ミガキ　底部外面ヘラケズリ後ミガキ	褐色 南西区
H 16	53—3	坏	14.0 7.1 —	口縁部わずかに外傾外反し、底部は丸底。	外面　ミガキ　口縁部外面黒色研磨 内面　黒色研磨	
H 16	53—4	高坏	— 〈 9.8〉 （11.0）	坏部は内湾気味に大きく開き、中位で直立。脚部は円錐形を呈し、やや外反気味に開き裾部で短かく折れて水平になる。	外面　ミガキ 脚内面　横ナデ	赤茶褐色
H 16	53—5	手捏	7.8 3.6 3.0	口辺内湾気味に外傾。	外面　ヘラケズリ 内面　指頭痕　口辺部横ナデ	暗褐色
H 17	53—6	甕	18.4 8.4 —	口辺部外傾し外反気味で、頸で屈曲し「く」の字状を呈し丸味を帯びた胴形。	外面　口辺部横ナデ　胴部ナデ 内面　口辺部横ナデ　胴部ヘラナデ	褐色
H 17	53—7	小甕	15.6 16.9 7.8	口辺部短かく外傾、頸部で収縮、肩部にかけて緩やかに張り、ふくらみをもって底部に窄まる。平底。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ（斜）底部ヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　胴部横ナデ・ナデ	褐色
H 17	53—8	甕	22.4 〈 9.0〉 —	口辺部外反して、大きく外傾。胴部は直線的に垂下する。	外面　口縁部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口縁部横ナデ　胴部ナデ	褐色

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
H17	53—9	小甕	14.4 11.9 5.5	口辺部外傾、頸部でわずかに収縮し、筒状から丸底気味の底部に窄まり底部はわずかに台状に突出する。	外面　口辺部横ナデ　ハケ目残してヘラケズリされる 内面　口辺部横ナデ　胴部ハケ　ナデ	外面磨滅 橙色 器肉厚い
H17	53—10	坏	13.2 4.3 —	底部は丸底。口縁部内稜をもって短く外傾。	内外面　ミガキ	橙色
H18	53—11	小甕	13.2 〈 8.5〉 —	口辺部外反気味に外傾し頸部で屈曲して、胴上部で張る。	外面　口辺部横ナデ　磨滅著しく不明 内面　口辺部横ナデ　ナデ	赤黒褐色 カマド
H19	53—12	甕	(13.0) 〈 7.5〉 —	口辺部外反し口縁部で強く外反、頸部で屈曲し、胴上部で張る。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　内面ナデ	褐色 カマド
H23	54—1	甕	— 〈23.5〉 6.8	胴下部半球形状に内湾して底部に窄まる。底部は台状を呈す。	外面　ミガキ 内面　ナデ	褐色 床
H23	54—2	甑(須)	24.2 19.3 (11.7)	下部内湾気味、上部外反気味ながら略直線的にわずかに外傾する。底部平底穴あき、把手は欠損してなし。	口縁端部面取り　口辺部横ナデ　胴中位は縦方向　下部は横方向のヘラケズリ	黄褐色
H23	54—3	坏	10.8 3.2 —	口辺部内湾して直立。底部丸底。	外面　口縁部横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　ナデ	黄褐色
H24	54—4	坏	12.4 4.4 —	丸底で全体に内湾し、口縁部外反して外傾。	外面　口縁部横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　口縁部横ナデ　ナデ	
H25	54—5	坏(須)	14.0 4.3 4.2	たちあがりは直線的に内傾するものと思われ、受部は短く外方にのび、端部は尖る。底部は浅く丸底を呈す。	外面　底部上波状文　下部ヘラケズリ 内面　ナデ	外面灰色　内面灰色を主に一部黒色
H25	54—6	甕	— 〈 7.8〉 8.2	底部平底。	外面　ヘラケズリ 内面　ナデ	黄褐色 磨滅著しい 底部厚手
H25	54—7	甕	— 〈17.4〉 8.0	胴下部内湾して底部に窄まる。底部平底。	外面　ヘラケズリ 内面　ハケ　内黒ナデ	外面スス付着 内面黄褐色 底部薄手
H25	54—8	甕	— 〈 8.9〉 (6.9)	胴中位ふくらみをもって内湾し、底部に窄まる。底部平底。	外面　ハケ 内面　ナデ	黒茶褐色
H9	55—1	小甕	(13.0) 11.8 7.0	口辺部短く直線的に外傾し、頸部で屈曲し肩部から胴中位にかけて張り、平底の底部に窄まる。口径と胴中位上に最大径をもつ。	口辺～胴部内外面ロクロ横ナデ　底部静止糸切り	橙褐色 胎土密 焼成良好 北東区
H9	55—2	小甕	(12.4) 〈 6.4〉 —	口辺部短く全体に外傾外反し、頸部は湾曲気味に収縮し胴中位にかけて張る。	口辺部内外面ロクロ横ナデ	肌色 胎土密 P6
H9	55—3	坏(須)	(11.8) 3.8 8.4	口辺部直線的に外傾し、底部丸底気味の平底。	口辺部外面・内面ロクロ横ナデ　底部ヘラ切り→緩いヘラケズリ→周辺部横ナデ	灰色 砂粒含 北東区
H9	55—4	横瓶	(11.2) (23.4) —	口辺部直線的に外傾、端部は面取りされやや凹む。	口辺部ロクロ横ナデ　胴部平行叩き目文　一部にロクロ横ナデ　内面指頭痕ロクロ横ナデ	灰黒色 外面自然紬 黒緑 最大幅(39.0)
H10	55—5	甕	(22.0) 〈12.9〉 —	口辺部外傾し、口縁部で外反。頸部で「く」の字の屈曲中位にかけて緩やかに張る。	外面　口辺部横ナデ　胴部縦→横のヘラケズリ 内面　ミガキ	褐色 北東区
H10	55—6	坏	15.2 5.2 5.6	口辺部長く、深いもので全体に内湾して外傾、底部は平底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　ミガキ　一部黒色	褐色 北東区
H10	55—7	坏(須)	10.2 3.9 5.6	口辺部直線的に外傾。	外面　ロクロ横ナデ　底部手持ちヘラケズリ	青灰色 『止』の刻印あり ベルト南
H12	55—8	坏(須)	15.6 5.3 10.2	底部は平底を呈し、口辺部は略直線的に外傾。	口辺・内外面　ロクロ横ナデ　底部回転ヘラ切り後緩いヘラケズリ	青灰色 南東区上面
H12	55—9	手捏	6.0 4.4 3.3	丸味をもつ底部に、口辺部はやや外反気味外傾（器肉は8㎜）口辺上部（折り返し）肥厚。	ナデ	褐色 南側

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
H37	56—1	甕	19.4 〈12.0〉 —	口縁部外反し、胴部は湾曲少ない。	外面　口縁部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口縁部横ナデ　胴部ハケ	黄褐色 胴部薄手
H37	56—2	埦	18.0 12.2 —	丸底。口縁部短く外反。	外面　胴・底部ヘラケズリ 内面　ミガキ　黒色研磨	外面黄褐色 カマド
H37	56—3	坏(須)	10.8 4.6 (8.0)	口辺直線的にわずかに外反し、口縁外反気味。底部丸底気味の平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転ヘラ切り 内面　ロクロ横ナデ	底部肥厚 灰青色 カマド
H37	56—4	坏(須)	10.0 3.6 5.8	口辺やや内湾気味に外傾。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　ロクロ横ナデ	灰青色
H1	56—5	甕	(23.8) 〈10.8〉 —	短い口辺部が外傾し頸部で「く」の字に屈曲、胴部中位にかけて張る。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラナデ（縦） 内面　胴部ナデ	黄褐色 カマド内1層
H1	56—6 56—7	鉢	(23.6) (14.0) 15.4	短い口縁が外反し、胴部は直線的に直立、丸味帯びて大きい平底に移る。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　ミガキ	淡褐色 北東区
H1	56—8	坏	(13.9) 〈 5.0〉 —	口辺部内湾して外傾。	外面　ロクロ横ナデ 内面　黒色研磨	カマド内1層
H1	56—9	坏(須)	12.2 3.7 5.5	口辺下部内湾気味に外傾し、上部は直線的に外傾。底部は平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　ロクロ横ナデ	
H3	56—10	高台付坏	14.8 4.9 6.4	口辺部内湾気味に外傾して大きく開き、口縁部外反する。貼り付け高台。	外面　ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ	淡褐色 石英粒0.5mm大含む 胎土そろう
H3	56—11	坏	15.1 5.5 6.9	口辺部内湾して外傾、口縁部外反、底部は平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　黒色研磨	淡褐色
H3	56—12	坏	13.8 5.6 6.7	口辺部内湾して外傾、底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部糸切底 内面　黒色研磨	淡褐色 ½残
H5	57—1	小甕	11.4 〈10.4〉 —	短い口辺部が外傾し、胴部は略直線的にやや内傾する。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　ナデ	橙色
H5	57—2	小甕	— 〈 5.3〉 —	平底ではあるが丸味を帯びる。	外面　ヘラケズリ 内面　ナデ	橙色
H5	57—3	坏(須)	13.6 3.8 8.1	口辺部内湾して外傾、口縁部外反肥厚、やや上げ底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	青灰色 南東区床
H5	57—4	坏(須)	(14.2) 4.2 8.3	口辺部やや内湾気味に外傾し、口縁部外反する。底部平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	青灰色 北東区床
H5	57—5	坏(須)	13.9 4.0 7.3	口辺部内湾して外傾、口縁部外反、底部は平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	青灰色 南東区
H5	57—6	坏(須)	— 〈 2.5〉 8.2	底部は平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	青灰色 カマド
H5	57—7	坏(須)	— 〈 1.5〉 7.7	底部は平底。	外面　底部回転糸切り	青灰色 北東区
H5	57—8	坏(須)	(14.2) 4.2 8.3	口辺部は内湾気味ながら略直線的に外傾し、口縁部外反気味となる。底部は平底であるが底部周辺・口辺下部が丸味を帯び丸底に近いものである。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転ヘラ切り後緩いヘラケズリ	青灰色 北東区
H5	57—9	坏(須)	13.7 3.3 8.0	口辺部は略直線的に外傾、底部は平底。内湾気味に。	口辺部内外面ロクロ横ナデ　底部回転ヘラ切り	暗赤褐色 カマド
H6	57—10	高台付坏(須)	— 〈 2.9〉 6.1		ロクロ横ナデ	灰青色

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
H 6	57—11	高台付坏（須）	— 〈 3.1〉 5.6		ロクロ横ナデ	灰青色
H 6	57—12	蓋(須)	(9.7) 〈 2.0〉 —	つまみは扁平で中央でわずかに突出、天井部水平、外縁で直角に折れる。	ロクロ横ナデ　天井部外面回転ヘラケズリ（左）	灰黒色
H 6	57—13	蓋(須)	(17.9) 3.6 —	つまみは径3.5cmの中央が凹み、天井部も扁平で内湾気味に開き、外縁は短く直角に折れる。	ロクロ横ナデ　天井部外面上部右まわり回転ヘラケズリ	灰白色
H 8	57—14	短壺(須)	12.8 15.0 11.5	口辺部短く外傾外反、頸部屈曲し肩部にかけて張り内湾気味に底部に窄まる。最大径を肩部にもつ。底部は平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部ナデ	灰青色
H 8	57—15	坏(須)	14.6 3.6 8.7	口辺部内湾気味に外傾し、上部外反気味に外傾。底部は平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り　周辺部一部ヘラケズリ	灰青色 カマド
H 8	57—16	坏(須)	14.0 3.3 8.6	口辺部やや内湾気味に外傾し上部は外反気味に外傾底部は平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部糸切り後（？）ヘラケズリ	褐色 北西区
H 11	58—1	甕	— 〈 7.6〉 11.4	平底の底部に直線的に窄まる。	外面　ロクロ横ナデ　底部ヘラナデ 内面　ミガキ	褐色
H 11	58—2	甕	— 〈 4.0〉 7.4	平底の底部に大きく外傾し、内湾した胴下部が窄まる。	外面　ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　ロクロ横ナデ　ミガキ（？）	明褐色
H 11	58—3	甕	(16.4) 9.8 9.0	口辺部外反気味に外傾し最大径をもつ、頸部で収縮屈曲して胴肩部でやや張り内湾気味に底部に窄まる。底部は平底でやや上底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	褐色
H 11	58—4	埦	12.8 5.5 —	底部は丸底を呈し、口辺部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。	外面　ミガキ　底部磨滅 内面　黒色研磨	褐色
H 11	58—5	坏	12.6 4.0 5.2	口辺部内湾して外傾し、口縁部外反気味となる。底部は平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部手持ちヘラケズリ 内面　黒色研磨	褐色
H 11	58—6	坏	13.6 4.5 5.4	口辺部全体に内湾して外傾、底部小さく平底を呈す。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ミガキ	橙色
H 11	58—7	坏(須)	13.6 4.3 7.5	口辺部はやや内湾気味に外傾。底部は平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	灰青色
H 11	58—8	坏(須)	14.8 3.7 8.0	口辺部は内湾気味に外傾し、口縁部外反、底部は平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	青灰色
H 11	58—9	坏(須)	14.0 3.9 6.6	口辺部内湾気味に外傾。底部は平底でやや上底気味。	口辺部内外面ロクロ横ナデ　外面ロクロによる凹凸残る　底部回転糸切り	灰青色
H 11	58—10	坏(須)	13.2 3.5 6.5	口辺部内湾して外傾。底部は平底、上底気味。	口辺部内外面ロクロ横ナデ　外面ロクロによる凹凸残る　底部回転糸切り	青灰色 火だすきあり 略完形
H 11	58—11	坏(須)	(13.0) 4.1 (7.2)	口辺部は内湾気味に外傾し、口縁部で外反気味となる。底部は平底。	口辺部内外面ロクロ横ナデ　底部糸切り	灰青色 ⅓残
H 11	58—12	坏(須)	(13.4) 3.9 (6.2)	口辺部はやや内湾気味に外傾し、口縁部で外反する。底部は台状を呈す平底。	口辺部内外面ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	青灰色 ⅓残
H 11	58—13	坏(須)	(14.4) 3.7 (7.8)	口辺部内湾気味に外傾し、口縁部で外反気味となる。底部は平底を呈しやや上底気味。	口辺部内外面ロクロ横ナデ　底部回転糸切り後、周辺部手持ちヘラケズリ	青灰色 内面自然釉 外面火だすきあり
H 11	58—14	高台坏（須）	— 〈 2.2〉 (9.6)	平底ではあるが丸味を帯びた底部。口辺部は外稜をもって折れて直線的に外傾する。端部が外に反る低い高台が付く。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転ヘラケズリ	茶褐色
H 11	58—15	埦(須)	15.4 11.2 10.8	器高の深いもので、口辺部は直線的にわずかに外傾し、口縁部外反する。底部は周辺部が丸味を帯び中央が肥厚する。外傾する柱状の底部が付く。	口辺部内外面ロクロ横ナデ　底部回転ヘラケズリ	赤褐色 ½残

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
H 11	58—16	鉄火鉢（須）	(23.0) 12.0	底部は尖底で内湾して外傾し、上部で湾曲して内傾、端部面取りされる。	上部　ロクロ横ナデ　下部回転ヘラケズリ	青灰色 ⅓残
H 14	58—17	坏	13.5 4.6 6.7	口辺部内湾して外傾し、口縁部で外反気味に外傾。平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ミガキが施されかつては黒色を呈していたと思われる。	褐色 カマド
H 14	58—18	坏	13.2 3.8 5.0	口辺部内湾して外傾し、口縁部で外反気味に外傾。平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	茶褐色
H 14	58—19	高台付坏	(12.2) 3.8 (6.8)	口辺部略直線的に大きく外傾、高台は直線的に開く、貼り付け高台。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部回転糸切り後高台とともに横ナデ 内面　底部黒色研磨	茶褐色
H 14	58—20	手捏	4.1 2.8 1.6	口辺部は略直立し、底部平底。	ナデ	黄褐色
H 15	59—1	坏	17.2 5.3 6.0	口辺部は内湾気味に外傾し、底部は平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	褐色 カマド
H 15	59—2	坏	(14.0) 3.9 (6.2)	口辺部内湾して外傾し、口縁部外傾、底部は平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　黒色研磨	茶褐色 カマド
H 15	59—3	坏(須)	13.3 4.7 7.0	口辺部は底部から折れて内湾気味に外傾し、上部で外反する。底部は平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	灰褐色 軟質須恵 カマド
H 15	59—4	坏	13.0 4.0 —	口辺部内湾気味に外傾。底部は平底。	外面　ロクロ横ナデ　凹凸が激しい底部回転糸切り 内面　黒色研磨	茶褐色 南東区
H 20	59—5	坏	14.2 4.7 6.0	口辺部内湾して外傾、底部平底。	外面　ナデ　底部糸切り後緩いケズリ 内面　黒色研磨	茶褐色
H 20	59—6	坏	14.3 4.3 5.8	口辺部内湾して外傾、底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	茶褐色
H 20	59—7	坏	15.2 4.8 (7.8)	口辺部内湾して外傾、底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	茶褐色 覆土
H 20	59—8	耳皿灰釉	6.9 3.1 4.4	口辺部が内側に2ヶ所折れている。貼り付け高台。	外面　上部灰釉 内面　灰釉	床
H 21	59—9	甕	(15.2) 〈 6.3〉 —	口辺部外反外傾、頸部「く」の字を呈し、胴上部が張る。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　ナデ	褐色
H 21	59—10	坏	13.5 4.0 4.8	口辺部内湾して外傾し、上部直立気味になる。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	褐色
H 21	59—11	坏	14.4 〈 4.8〉 —	口辺部内湾気味に外傾。	外面　ロクロ横ナデ 内面　黒色研磨	褐色
H 21	59—12	手捏	6.2 4.0 2.6	口辺部内湾気味に直立。	内外面　ミガキ	褐色
H 22	59—13	坏	13.5 4.0 4.8	口辺部内湾して外傾、底部平底。	外面　外面ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	覆土
H 28	59—14	甕	(24.0) 6.1 —	口辺部外傾し、頸部で収縮し、あまり張らずに垂下する。	外面　ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ	上面
H 28	59—15	坏	(11.4) 3.8 (4.2)	口辺部内湾して外傾し、口縁部外反する。	ナデ　底部回転糸切り	黄褐色 上面
H 30	60—1	坏	12.8 3.9 6.0	口辺部内湾して外傾し、口縁部で外反する。底部上底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	東側

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
H30	60—2	灰釉皿	12.2 2.5 7.2	貼り付け高台。口辺部やや内湾気味に大きく外傾。	外面　ロクロ横ナデ	灰白色 北側
H30	60—3	坏	(9.0) 2.2 5.4	やや上底。口辺部短くやや内湾気味。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	褐色 北側
H31	60—4	小甕	8.0 5.2 4.4	口縁部短くわずかに外傾し、頸部で収縮し胴肩部でやや張り、底部に窄まる。底部平底。口径に最大径をもつ。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	黄褐色 北側土壙
H31	60—5	小甕	8.2 5.4 4.8	口縁部短くわずかに外傾し、頸部で収縮し胴肩部でやや張り、底部に窄まる。底部平底。口径に最大径をもつ。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	黄褐色 北側土壙
H31	60—6	小甕	7.6 5.5 3.7	口縁部短くわずかに外傾し、頸部で収縮し胴肩部でやや張り、底部に窄まる。底部やや上底。口径に最大径をもつ。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	黄褐色 北側土壙
H31	60—7	小甕	9.1 5.9 4.8	口縁部短くわずかに外傾し、頸部で収縮し胴肩部でやや張り、底部に窄まる。底部平底。口径に最大径をもつ。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	黄褐色 北側土壙
H31	60—8	小甕	8.0 4.5 3.6	口縁部外反し、胴部内湾して底部に窄まる。口径に最大径をもつ。	内面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	黄褐色 北側土壙
H32	60—9	甕	(15.4) 〈8.7〉 —	口辺部全体に外反し、わずかに外傾。胴上部で張る。最大径は胴径。	外面　ヘラケズリ　ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ	茶褐色 北側床
H32	60—10	甕	— 〈5.2〉	丸底。	外面　ヘラケズリ後ミガキ 内面　クシ歯状工具によるナデ	茶褐色 北側床
H33	60—11	甑	12.6 7.0 —	口辺部短く外傾、口辺から底部にかけて内湾して窄まる。丸底底部に一孔あり。	内面　横ナデ　ヘラナデ	褐色 溝内
H33	60—12	高台付坏	14.1 5.4 6.2	口辺部全体に内湾して外傾。張り付け高台。	外面　ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ	褐色 全体に磨滅 P4上
H33	60—13	坏(須)	14.6 〈3.7〉 —	口辺部直線的に外傾。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	内外面火だすきあり 青灰色 P7
H33	60—14	坏(須)	14.6 〈4.1〉 —	口辺部全体に内湾気味に外傾。	外面　ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ	青灰色
H33	60—15	小壺	(7.2) 4.9 4.6	口辺部短かく内湾して直立。内稜をもち、胴部内湾気味に底部に窄まる。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	黒赤褐色
H34	60—16	高台付坏	(15.4) 6.1 6.1	貼り付け高台。口辺部内湾して外傾し、口縁部外反する。	外面　ロクロ横ナデ 内面　黒色研磨	褐色 覆土　No.2
H34	60—17	坏	(13.2) 4.1 6.6	口辺部内湾して外傾し、口縁部外反する。底部平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	茶褐色
H35	60—18	坏(須)	(12.6) 3.6 (4.6)	口辺部略直線的に外傾し、底部平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	黒褐色
H36	61—1	坏(須)	(13.0) 3.7 (5.8)	口辺部やや内湾気味に外傾。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	口縁部に油煙付着
H36	61—2	坏	— 〈2.6〉 6.2		外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面黒色	外面黄褐色
H36	61—3	カワラケ	(9.6) 2.5 (5.6)	器高低く短い口辺が内湾気味に外傾。底部平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	褐色
H36	61—4	カワラケ	(8.8) 1.7 (5.6)	器高低く短い口辺が直線的に外傾。底部上底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	黒褐色

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
H36	61—5	灰釉埦	— 〈2.1〉 7.8	貼り付け高台	内外面　ロクロ横ナデ	灰青色
H38	61—6	甕	(19.6) 〈6.3〉 —	口辺部「く」の字状を呈す。	外面　横ナデ 内面　横ナデ　やや下にヘラナデ	赤褐色 口辺部⅓残
H38	61—7	坏	13.0 4.2 5.3	口辺部全体に内湾気味に外傾。底部やや上底。	著しい磨滅により調整不明　底部回転糸切り	赤褐色 ¼残 磨滅著しい 覆土
H38	61—8	坏	13.6 4.4 6.4	口辺部全体に内湾気味に外傾。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	外面褐色 内面黒色 ⅔残　磨滅著しい
H38	61—9	坏	15.2 〈4.7〉 —	口縁部やや外反。	外面　ロクロ横ナデ 内面　黒色研磨	
H39	61—10	高坏(？)	11.4 〈5.5〉 —	口辺部内湾する。	ミガキ	磨滅著しい
H39	61—11	高坏	11.6 〈7.2〉 —	坏部全体に内湾する。	外面　ナデ　ヘラケズリ 内面　細かい横ナデ	器形の歪大
H39	61—12	カワラケ	7.8 2.4 6.3	器高低く短い口辺がわずかに外傾する。底部平底。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り	口縁部に油煙付着
D7	61—13	壺	(17.4) 〈5.4〉 —	口辺部は外反外傾し、外稜をもって直立する。	内外面　ミガキ	褐色
D9	62—1	小甕	13.4 11.3 5.4	口径と胴部最大径が等しく、口辺部が「く」の字に外反する。	外面　横ナデ　胴部・肩部ミガキ　ハケその下にヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　胴部ハケ	赤褐色　一部焼成により黒褐色に変色
D9	62—2	坏	10.2 5.9	丸底。口縁部、胴部から湾曲して自然に内湾。		磨滅が著しい　口縁部茶褐色　胴部黄褐色　底部黒色
D9	62—3	坏	11.7 5.3	丸底。口縁部やや外反。	外面　口縁部横ナデ　胴部ケズリ 内面　口縁部横ナデ　ミガキ	外面赤褐色、黄褐色 内面赤褐色、黒色
D9	62—4	坏	(12.8) 5.0	丸底。口縁部外反する。	内面　わずかにミガキが見られる	磨滅著しい
D9	62—5	坏	(13.2) 6.1	丸底。口縁部外反する。	外面　口縁部～胴部ナデ　わずかにミガキあり 内面　口縁部横ナデ　胴部ヘラナデ後ミガキ（縦）	
D9	62—6	甕	13.0 8.3	丸底。口縁部内湾して外反。	内面　胴部ハケ	磨滅著しい　外面赤褐色・茶褐色 内面赤褐色・黒色 砂礫多含　No.5
D9	62—7	坏	13.2 7.1	丸底。口縁部内湾して外傾。	外面　口縁部横ナデ　胴部クシ歯状工具によるケズリ（磨滅している） 内面　口縁部横ナデ　胴部ミガキ	外面赤褐色・黒色 内面黒色
D15	62—8	坏	(14.4) 5.7 6.6	口縁部やや外反し、内面底部中央に凸面がある。	外面　胴部ハケ　底部ケズリ　底部回転糸切り	外面黄褐色 内面黒色 内面磨滅著しい
D15	62—9	坏(須)	— 〈2.2〉 8.0	高台付。	外面　ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ	灰青色
D12	62—10	坏(須)	13.4 4.4 6.4	口辺部やや内湾気味に外傾。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	灰青色
T1	62—11	甑	24.0 24.8 8.0	全体に逆「八」字型を呈し、口辺部やや外傾外反する。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口辺部横ナデ　胴部ナデ	暗褐色
T1	62—12	鉢	— 〈8.2〉	丸底を呈す。	外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	赤褐色　一部黒褐色

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
T1	63—1	甕	24.0 40.0 11.0	胴中央部に最大径があり、口辺部外傾外反、左右非対称が著しい。	外面　縦方向のミガキ　黒斑あり 内面　口辺部ナデ	口縁部一部欠損 胴部約½欠損
T1	63—2	甕	16.2 31.5 6.7	口辺部直線的に外傾、胴中位下にかけてゆるやかに張る長胴甕。底部台状に突出する。	外面　口辺部横ナデ　胴部ヘラケズリ（縦） 内面　口辺部横ナデ　胴部ナデ	褐色
T1	63—3	埦	14.7 6.9	口辺部内稜をもって外傾外反し、一端直立し丸底底部を呈する。	外面　口辺部ナデ→ミガキ　胴部ミガキ 内面　ミガキ	茶褐色
T1	63—4	埦	13.7 5.9	同　上	同　上	茶褐色
T1	63—5	坏	13.2 4.5	丸底を呈し、全体に内湾し口辺部内傾する。	内外面　ミガキ	黒褐色
T1	63—6	坏	12.7 4.8	同　上	同　上	赤褐色、一部黒褐色
F4	63—7	甑(須)	— 〈13.2〉 (13.8)	胴下部直線的に底部に至る。底部平底。	内外面　ロクロ横ナデ 外面平行横線あり	灰白色
グリッド	64—1	壺	16.0 〈 6.4〉 —	口辺上部外反、口辺下部直立。	外面　ミガキ 内面　ミガキ	褐色 こ—21G
グリッド	64—2	小壺	4.8 6.2	口辺部内湾気味に外傾、胴中位下にかけてやや張り、不安定な底部に窄まる。	内面　ナデ	磨滅著しい 褐色 お—29G
表採	64—3	坏	15.3 6.2	丸底。口辺上部で内稜をもって短く外傾する。		
グリッド	64—4	甕	(23.2) 〈15.7〉 —	口辺部外反して外傾、胴上部は張らずに垂下する。最大径は口径。	外面　口辺部横ナデ　胴部縦のヘラケズリ 内面　口縁部横ナデ　胴部ハケ	暗黄褐色 く—19G
表採	64—5	甕	17.6 26.9	口辺部短く肥厚して外傾し、胴肩部でやや張り、丸底気味の底部に窄まる長胴甕。	外面　口縁部横ナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口縁部横ナデ　胴部ヘラナデ	黒褐色ないし褐色
グリッド	64—6	甕	18.1 〈10.4〉 —	口辺部外反外傾し、胴部で張る。	外面　口縁部横ナデ　胴部斜めのヘラケズリ 内面　口縁部横ナデ　胴部ナデ	褐色 口辺部¼残 こ・さ—17・18G
グリッド	64—7	甕	17.6 〈 9.6〉 —	口辺部外反外傾し、胴部で張る。	外面　口縁部横ナデ　胴部斜めのヘラケズリ 内面　口縁部横ナデ　胴部ナデ	褐色 き—9G
グリッド	64—8	甕(須)	16.5 〈 4.7〉 —	口辺部直線的に大きく外傾し、頸部収縮し、胴上部で張る。	外面　口辺部横ナデ 内面　胴部ナデ	暗褐色 口辺部⅙残 ろ・あ—20G
グリッド	64—9	甕	— 〈 8.0〉 7.8	丸胴甕。内湾して底部に窄まる。	外面　斜めのヘラケズリ 内面　ナデ	底部付近のみ残 茶褐色 あ—21G
グリッド	64—10	小甕	(14.6) 〈11.2〉 —	口辺部内湾気味に外傾　頸部でわずかにくびれ、胴下部にかけてわずかに張る。	外面　横ナデ　胴部ハケ 内面　横ナデ　胴部ハケ	外面黄褐色 内面黄褐色
グリッド	64—11	小甕	— 〈10.0〉 6.6	底部平底。	外面　胴部ヘラケズリ　底部木葉痕 内面　ナデ・ハケ	外面暗褐色 内面スス付着 お—18G
グリッド	65—1	高坏	11.1 7.5 8.0	坏部全体に内湾し、口縁部直立。脚上部直線的に外傾、中位でさらに大きく外傾し、外反して開く。	外面　坏部ヘラケズリ→ミガキ　脚部ミガキ 内面　坏部黒色研磨　脚上部ナデ　裾部ミガキ	外面明褐色 け—34G
グリッド	65—2	坏	13.0 4.8 4.0	底部丸底。口辺部内湾内傾する。	外面　ミガキ　底部ハケ 内面　ミガキ（塗彩？）	暗赤褐色 お—18G
グリッド	65—3	坏	(12.0) 〈 5.0〉	口辺部直立、外稜をもち底部は丸底を呈す。	外面　口辺部ミガキ　底部ヘラケズリ 内面　ミガキ	褐色 え—14G

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
グリッド	65—4	坏	(14.6) 〈5.0〉	口辺部やや外反気味に外傾、外稜をもち底部丸底を呈す。	内外面　ミガキ	口縁部約⅙残 淡褐色 う—15 G
グリッド	65—5	坏	(16.4) 〈5.4〉	口辺部直線的に外傾し、内稜をもって底部丸底を呈す。	内外面　ミガキ	¼残 黄褐色 い—12 G
グリッド	65—6	壺(須)	6.2 10.6 5.2	口辺部外反気味に外傾し、胴肩部直線的に張り、内湾して底部に窄まる。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　胴下部へラケズリ　底部手持ちへラケズリ 内面　口縁部ロクロ横ナデ	黒灰色 外面肩部自然釉 か—21 G
グリッド	65—7	坏(蓋) (須)	11.6 — —	天井部は丸味を帯び、するどい外稜をもって外縁直立する。	内外面　ロクロ横ナデ	口縁部約⅙残 灰青色 外面自然釉付着 う—15 G
グリッド	65—8	埦(須)	16.2 〈6.2〉 —	口辺部全体に内湾して外傾。	外面　上部ロクロ横ナデ　天部へラケズリ 内面　ロクロ横ナデ	灰青色 か—9 G
表採	65—9	高坏	— 〈7.3〉 —	坏部全体に内湾。脚部直線的に開く。	外面　ハケ 内面　ナデ	黄褐色
グリッド	65—10	高坏(?)	(3.3) 〈4.8〉 9.8	外友気味に開く。脚部か?	外面　ヘラナデ 内面　ナデ	褐色
グリッド	65—11	高坏(?)	4.5 3.8 11.8	直線的に開く。脚部か?	外面　ヘラナデ 内面　ナデ	茶褐色 う—16 G
グリッド	65—12	坏(須)	12.6 3.4 7.4	口辺部内湾気味にわずかに外傾し、上部で外反気味になる。底部平底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部糸切り後へラケズリ 内面　ロクロ横ナデ	灰青色 け—21 G
グリッド	65—13	坏	13.4 4.4 7.2	口辺部内湾気味に外傾、口縁直立。	外面　ロクロ横ナデ　坏下部・底部手持ちへラケズリ 内面　黒色研磨	外面淡褐色 う—16 G
グリッド	65—14	高台付坏 (須)	14.4 4.4 9.6	坏部は浅く、口辺部外反気味にわずかに外傾、底部は丸味を帯びた平底。貼り付け高台、高台部柱状。	外面　口辺部横ナデ　底部回転糸切り・周辺部回転へラケズリ 内面　ロクロ横ナデ	灰青色 こ・さ—21 G
グリッド	65—15	高台付坏 (須)	(14.0) 4.3 (8.4)	口辺部直線的に外傾。底部平底。貼り付け高台。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転へラケズリ 内面　ロクロ横ナデ	灰青色 こ・さ—17・18 G
グリッド	65—16	坏	13.7 4.9 6.7	口辺部内湾して外傾。	外面　ロクロ横ナデ　底部磨滅により不明 内面　ミガキ	淡褐色 お・か—23 G
グリッド	66—1	甕	(22.4) 〈17.9〉 —	口辺部内湾気味に外傾し、胴中位にかけてゆるやかに張る。	外面　ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ	褐色 れ—12 G
グリッド	66—2	甕	19.0 〈10.2〉 —	口辺部内湾して外傾、胴上部でわずかに張る。	外面　ロクロ横ナデ　胴下部へラケズリ(縦) 内面　ロクロ横ナデ	黄褐色 口辺部¼残 れ—12 G
グリッド	66—3	甕	14.8 8.1 7.3	胴下部やや内湾気味に底部に窄まる。底部平底。	外面　胴部ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	内外面赤味を帯びた黄褐色 お—18 G
グリッド	66—4	坏	16.4 6.6 (6.0)	器高深く、口辺部やや内湾気味に外傾。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	黒茶褐色 口縁部¼残 え—16・う—15 G
グリッド	66—5	坏	14.3 5.3 6.7	口辺部やや外反気味に外傾。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部へラケズリ 内面　黒色研磨	淡褐色 う—15 G
グリッド	66—6	坏	16.0 5.0 7.0	口辺部内湾気味に外傾。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部へラケズリ 内面　黒色研磨	淡褐色 こ・さ—17・18 G
グリッド	66—7	坏	12.6 4.9 4.0	口辺下部内湾して外傾し、上部外反気味となる。底部平底。	外面　ロクロ横ナデ　底部へラケズリ 内面　黒色研磨	淡褐色 お—18 G
グリッド	66—8	坏	13.6 4.6 5.2	口辺部内湾して外傾、底部やや上底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　十字の暗紋あり　黒色研磨	淡褐色 う—15 G

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
グリッド	66—9	坏	13.4 4.5 5.5	口辺部内湾して外傾。底部やや上底。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　十字の暗紋あり　黒色研磨	淡褐色 お—18 G
グリッド	66—10	坏	13.8 4.7 5.7	同　上	外面　同上 内面　黒色研磨	淡褐色 う—15 G
グリッド	66—11	坏(須)	13.4 3.8 6.5	同　上	外面　同上 内面　ロクロ横ナデ	灰褐色 れ—15 G
グリッド	66—12	坏	13.6 4.2 5.6	同　上	外面　同上 内面　黒色研磨	淡褐色 き・く—9・10 G
グリッド	66—13	坏	13.4 4.0 6.8	同　上	内面に9本の暗文 同　上	褐色 う—15 G
グリッド	66—14	坏	12.9 3.9 5.9	同　上	内面に暗文あり 同　上	淡褐色 う—15 G
グリッド	66—15	坏	(14.0) 4.0 (6.4)	口辺部内湾して外傾し、口縁部外反気味となる。底部平底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　黒色研磨	褐色 い・う—12 G
グリッド	66—16	坏	11.6 4.4 6.5	口辺部内湾して外傾。底部平底。	同　上	褐色
グリッド	66—17	坏	12.8 4.1 7.1	口辺部内湾して外傾。底部やや上底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	褐色 け—20 G
グリッド	66—18	坏	12.1 3.7 6.4	口辺部内湾して外傾し、上部直立気味。底部平底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部ヘラケズリ 内面　黒色研磨	褐色 い—13 G
グリッド	66—19	坏	11.5 4.1 4.4	小さい底部から、大きく外傾し、内湾する。口縁部外反気味。底部平底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	暗褐色 れ—16 G
グリッド	66—20	皿	(11.8) 2.6 5.4	器高低く、口辺部は大きく外傾し、上部で外反して直立気味となる。底部平底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	褐色 ろ—13 G
グリッド	66—21	坏	12.2 4.1 6.2	口辺部内湾して外傾。底部平底。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ミガキ	褐色 内面黒味を帯びる れ—15 G
グリッド	66—22	坏	12.8 3.9 6.0	口辺部内湾して外傾。底部平底。		褐色 磨滅著しい う—21 G
グリッド	66—23	坏	12.7 4.0 5.2	同　上	底部回転糸切り	褐色 磨滅著しい い—21 G
グリッド	67—1	高台付坏	(16.2) 6.3 8.2	器高大きく、口辺部やや内湾気味、上部は外反気味に外傾。　貼り付け高台。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　黒色研磨	褐色 こ・さ—17・18 G
グリッド	67—2	高台付坏	14.2 〈 4.2〉 —	口辺部内湾して外傾。高台部欠損。貼り付け高台。	同　上	褐色 き—9 G
グリッド	67—3	高台付坏	(14.0) 〈 5.4〉 (7.6)	口辺下部内湾気味、上部外反気味に外傾。貼り付け高台。	同　上	褐色 い—13 G
グリッド	67—4	高台付坏	13.2 5.0 7.8	口辺下部内湾気味、上部は大きく外反する。高台部高く外反気味に開く。貼り付け高台。		褐色 磨滅著しい ろ—20 G
グリッド	67—5	坏(須)	(15.0) 4.0 (5.6)	下部内湾気味、上部外反気味に外傾。底部やや上底。	外面　ロクロ横ナデ・ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	灰白色 い—12 G
グリッド	67—6	坏(須)	13.4 4.5 6.0	口辺下部内湾気味、上部やや強く外反し外傾する。	外面　ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ	灰褐色 う—18 G

出土位置	挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
グリッド	67—7	坏(須)	12.0 3.1 5.1	器高低く、口辺下部内湾し上部で外反し大きく外傾する。	外面　口辺部ロクロ横ナデ　底部回転糸切り 内面　ロクロ横ナデ　一部に暗紋様のミガキあり	灰白色 ろ—20 G
グリッド	67—8	瓶(灰釉)	— 〈13.0〉 9.2	高台付き。	外面　口辺部ロクロ横ナデ 内面　ロクロ横ナデ 胴外面上部灰釉・内面底部灰釉あり	白色 き—9 G
グリッド	67—9	瓶(灰釉)	— 〈5.0〉 8.4	同上	内外面　ロクロ横ナデ 内面底部灰釉あり	白色 き—9 G
グリッド	67—10	埦(灰釉)	(16.4) 5.1 7.9	口辺部内湾して大きく外傾し、口縁部強く外反する。貼り付け高台。	内外面　ロクロ横ナデ　底部回転ヘラケズリ　口辺部内外面釉あり	白色 え—15・16 G
グリッド	67—11	高台付坏(灰釉)	(15.0) 3.3 (7.2)	口辺部内湾して大きく外傾、口縁部外反する。貼り付け高台。	内外面　ロクロ横ナデ　口辺部内外面釉あり	白色 え—16 G
グリッド	67—12	高台付坏(灰釉)	(13.0) 3.1 (6.6)	口辺部内湾して大きく外傾、口縁部外反する。貼り付け高台。	同上	白色 い—12 G
グリッド	67—13	坏(灰釉)	— 〈2.4〉 5.5		同上	白色 こ・さ—17・18 G
グリッド	67—14	埦(灰釉)	— 〈2.8〉 8.4		同上	白色 き—9 G
グリッド	67—15	土鍋	(22.0) 〈6.9〉 —	口から胴部にかけて垂直におり、内側に耳が付く。	内外面　横ナデ・ナデ	外面黒茶褐色・ス付着　胎土砂質 内面茶褐色 え—24 G

第4表　舞台場遺跡出土石器一覧表

挿図番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	出土遺構	備考
68—1	剝片	粘板岩	8.8cm	6.3cm	1.8cm	H—24	
68—2	打製石斧	〃	7.1	7.0	2.1	け—18	刃部に磨耗痕あり
68—3	〃	ホルンフェルス	10.0	6.6	2.1	こ—18	
68—4	〃	玄武岩	11.6	5.8	3.2	け—18	刃部はチョッピングトゥール状を呈する。
68—5	〃	〃	11.15	6.9	2.2	F—1	
68—6	〃	?	6.2	4.2	1.2	D—6	
68—7	〃	粘板岩	15.3	10.3	3.3	き—19	刃部相当部位はあまり加工が進んでおらず、未成品と考えられる。正背両面に残存する剝離痕は双方ともにネガティブであり核素材であることをうかがわせる。
69—1	磨製石斧	輝緑岩	7.7	3.3	1.2	え—15	刃部に刃こぼれ有り
69—2	〃	輝緑凝灰岩	10.2	4.7	1.5	H—39	未成品である。
69—3	砥石	輝緑岩	10.2	4.65	2.5	H—24	使用不能となった磨製石斧を利用
69—4		硬砂岩	17.5	5.9	4.05	表採	上・下両端に敲打痕剝落あり
69—5	〃	砂岩	11.6	4.7	2.8	Y—8	スタンプ形石器に近似
69—6	〃	粘板岩	10.6	2.8	2.1	H—24	
69—7	〃　?	?	9.5	4.0	3.4	Y—8	顕著な敲打痕は認められない。
69—8	砥石	流紋岩	11.2	7.2	5.3	H—24	四面とも利用（中砥）
69—9	〃	〃	6.7	3.4	2.2	表採	〃　（仕上げ砥）
69—10	〃	〃	10.1	4.25	3.3	H—10	〃　（　〃　）

69—11	〃	〃	7.1	3.3	3.8	T—1	〃 （ 〃 ）
69—12	凹　石	角閃安山岩	8.8	7.7	4.4	Y—8	表裏に凹を有する。
70—1	石　鏃	黒　耀　石	2.4	1.95	0.4	Y—7	有茎（飛行機鏃）
70—2	〃	〃	1.64	1.21	0.25	Y—2	有茎
70—3	〃	〃	1.85	1.02	0.22	H—1	
70—4	〃	〃	1.7	1.5	0.3	H—5	
70—5	〃	〃	1.7	1.2	0.35	Y—8	
70—6	石　匙	頁　　岩	3.5	2.2	0.65	え—18	正面は素材の主要剝離面
70—7 70—8	楔形石器 〃	黒　耀　石 〃	2.55 2.1	1.6 1.55	1.0 0.5	Y—8 Y—7	石器の上下両端には細かなつぶれ状の剝離痕が看取できる。縦断面は双方ともに紡錘形を呈する。石器の正背両面には交錯する大きな剝離痕が残存する。さてピエス・エスキーはとかく問題の多い石器であるが、その消長を見ると、先土器時代でも少なくともＡＴ層準以前にすでに出現しているようである。時代は下って奈良県等では弥生時代に及んでも石器組成の一部として登場してくる事例がある。
70—9	凹　石	？	12.5	11.0	7.6	H—11	凹は比較的浅い

（各石器と出土遺構との共伴関係は明瞭ではない）

第５表　舞台場遺跡出土鉄製品一覧表

挿図番号	器　種	残存状態	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	備考
70—10	角　釘	完　　形	H—30	16.0cm	1.5cm	1.5cm	75.8g	
70—11	刀　子	先端部欠損	き—18G	8.7	0.8	0.2	7.5	
70—12	不　明		え—15G	5.2	0.7	0.3	4.1	
70—13	〃		え—17G	11.4	2.2	1.1	31.5	
70—14	刀　子	両側欠損	H—4	6.3	1.5	6.2	21.9	
70—15	角　釘	完　　形	H—34	5.6	0.9	0.8	10.2	覆土

第６表　舞台場遺跡出土土製円板一覧表

挿図番号	出土遺構	径	厚さ	特　　徴
70—16	Y—6	4.2cm	0.5cm	表・裏とも赤色塗彩されており、大形の高坏部を利用したものと思われる。側面の２次加工は凹凸がはげしく不整形の円形を呈している。
70—17	Y—8	4.0	0.8	無彩の土器を使用しており、側面の２次加工はていねいである。
70—18	H—6	3.8	0.9	胎土が赤みをおびており、側面の２次加工はていねいである。
70—19	H—25	6.5	1.1	側面の２次加工は凹凸がはげしく、かなり雑な仕上げである。

V 総　　括

検出された遺構は竪穴住居址42棟、土壙22基、溝状遺構2基、掘立柱建物址4棟、特殊遺構1基であり、弥生時代と古墳から平安時代に渡るものである。遺物は縄文式土器・弥生式土器、土師器、須恵器、土師質土器、土鍋、石製品、鉄製品、古銭等である。

遺構

住居址を中心に述べてみたい。

弥生時代の住居址は13棟を数え、台地の北側に分布している。後代の遺構により壊され、Y3・6・7・12・13号住居址の5棟がほぼ全形の知れるものである。これらの住居址は隅丸長方形を呈し、規模460～626㎝×376～490㎝を測る。13棟の主軸方位は、Y3・8・12号住居址が東西に、他は南北方向に長軸をもち、北方向に主軸を指すものが多い。炉址は北側柱穴間に位置し、Y7号住居址のみ中央にある。炉の掘り込みは浅く、わずかに焼土のある地床炉で炉縁石もないが、Y6号住居址は壺形土器の埋設炉が1例ある。柱穴の配列はY6・7号住居址で検出された主柱穴4、棟持柱1、入口側に並列する柱穴2、貯蔵穴を備えるパタンを示すものと思われるが、検出されないものも多い。また、Y12号住居址は小柱穴が計15個あり、住居址空間の使用の差異が窺える。

Y2とY3号住居址における重複関係はあるものの、遺物等より大きな時間差はなく弥生時代後期後半に営まれた集落と位置づけることができると思う。佐久市内で同期の遺跡として、下小平[(1)]、清水田[(2)]、西近津[(3)]、一本柳[(4)]、西一里塚[(5)]、後沢遺跡[(6)]が調査されている。この期は隅丸長方形を呈し、炉は大半が北側の柱穴間にあり、主軸方位は北方向を指す住居址が一般的である。住居址面積は計測できた38棟のうち20㎡以下8棟21%、20～30㎡17棟45%、45～50㎡6棟17%と30～45㎡は計7棟18%と割合的に少なく、20～30㎡の標準的規模の住居址と45㎡以上の大形住居址の構成がみられる。ここで注目されることは各遺跡によって面積の分布にかたよりがあることである。清水田、一本柳、下小平遺跡は全般に大きい規模をもち、後沢、舞台場、西一里塚遺跡は小形であり、西一里塚、舞台場遺跡はその規模の大小の幅がない。西一里塚遺跡は、重複関係が著しいため時期的には幅があり、小形均一化ということを時間的推移と結びつけることはできないが、舞台場遺跡については、後述するが遺物等に弥生末期的な要素も含むことから、均一小形化の傾向がいえるものと思う。

炉址については、林氏も指摘しているように、下小平、清水田、一本柳、西一里塚遺跡（千曲川右岸域）と舞台場、後沢遺跡（千曲川左岸域）との間で差異がみられる[(7)]。前者は、壺・甕・高坏形土器を埋設ないし敷いており、その大半は壺形土器胴下部から底部をそのまま利用している。

第７表　舞台場遺跡住居址一覧表

遺構	平面プラン				主軸方位	カマド・炉	ピット	時期	備考
	形態	東西	南北	面積					
Ｙ１		cm	cm	m²		cm		箱清水	
2	隅丸長方形	560	420	25.60			6	〃	住居址範囲不明確
3	〃	500	376	17.02	N－90°－E	地床炉(東) 30×20×4	主４ 貯１	〃	周溝あり
4	〃(？)							〃	H9号住居址により大半破壊
5	〃(？)						主２ 他２	〃	H10、11号住居址により西側破壊
6	〃	416	460	17.93	N－７°－E	壺埋設炉(北) 36×32×14	主４棟持１ 貯１入口２	〃	
7	〃	490	626	28.84	N－12°－W	地床炉(中央) 82×52×３	主４棟持１ 貯１入口２	〃	
8	〃	760	(572)	33.41	N－68°－E	地床炉(北西) 60×36×7	6	〃	
9			250			地床炉(北) 40×22×７		〃	東側のみ
１０		366					主２ 他４	〃	南側残存
１１							主３ 他３	〃	南西部残存
１２		544	430	21.92	N－80°－W	地床炉(西) 66×56×５	主４ 他15	〃	
１３	隅丸方形	510	460	23.39		地床炉(中央)	主４	〃	
Ｈ１	隅丸長方形	638	524	33.16		カマド(北・東)	主４ 貯１	国分期	
2	方形(？)	312	300					〃	床面のみ
3	方形(？)	380						〃	床面のみ
4	隅丸長方形	594	328	15.72	N－６°－E	カマド(北)	主２	鬼高期	
5	隅丸方形	432	500	19.00		カマド(東)	主４	真間期	周溝あり
6	〃(？)	360					主４	〃	北側プラン不明確
7	〃	600	590	34.95	N－２°－E	カマド(北)	主４ 他１	鬼高期	
8	〃	390	390	14.30	N－７°－W	カマド(北)	主４	真間期	
9						カマド(北)	主４ 他１	〃	
１０	隅丸方形		(740)		N－102°－E	カマド(東)	主１	〃	H11号住に大半壊される
１１	〃	550	550	29.30	N－０°	カマド(北)	主４ 他２	〃	
１２	〃	570	578	32.33	N－３°－W	カマド(北)	主４ 他３	〃	
１３			390			カマド(北)	貯１	鬼高期	

遺構	平面プラン				主軸方位	カマド・炉	ピット	時期	備考
	形態	東西	南北	面積					
H14	隅丸方形	320	320	9.71		カマド(北)		国分期	
15						カマド(東)	2	〃	
16	隅丸方形	510	490		N－9°－W	カマド(北)		鬼高期	住居址範囲のみ
17	〃		310		N－14°－W			〃	住居址範囲のみ
18	〃	430	430	17.53	N－9°－W	カマド(北)		〃	住居址範囲のみ
19						カマド(東)		〃	カマドと東側床面確認
20	隅丸長方形	350	480	15.68		カマド(北)		国分期	住居址範囲のみ
21								〃	北床面のみ残る
22		480					主2 他1	真間期	南側攪乱、D20号土壙により攪乱
23		432					主2	鬼高期	北側攪乱
24			560		N－8°－E	カマド(北)	主2 他5	〃	西側区域外
25								〃	南側残存
26								国分期	西側南壁残存
27								〃	西側残存
28			370					〃	
29	隅丸長方形	360	490				1	〃	
30			620		N－0°		主6	〃	東壁畦畔により攪乱
31	〃	360	388	14.09	N－28°－E		6	〃	
32	隅丸長方形	520	410	20.49	N－6°－E		主3	〃	
33	隅丸方形	500	526	25.55	N－2°－W		主7 他6	〃	
34	〃		472				13	〃	
35	〃	320	266		N－3°－E	なし	4	〃	
36	隅丸長方形	600	500	30.15	N－3°－E		6	〃	
37	〃	450	320	14.50	N－6°－E	カマド(北)	主8	真間期	
38		307			N－8°－E	カマド(北)	2	国分期	南側攪乱
39			590				主3	〃	東側畦畔により攪乱

第８表　佐久地域弥生時代後期後半住居址一覧表

遺跡名	住居址	形　態	規　模			主軸方位	炉	時　期	備　考
			東西	南北	面積				
小諸市五ヶ城	１号住	隅丸長方形	6.9	8.7	58.54	北	小器敷炉 炉縁石	箱清水	壺胴部片利用
佐久市戸　板	Ｙ１	隅丸胴長方形	3.8	（２）		中央	地床炉	〃	
佐久市下小平	Ｙ１	隅丸長方形	5.56	8.96	47.36	北	地床炉(北) 埋設炉(南東)	〃	甕胴部～底部片利用
〃	Ｙ２	〃	5.82	9.42	54.37	北	地床炉(南東) 壺埋設炉(北)	〃	胴下半底部埋設
〃	Ｙ３	〃	4.6	5.5	22.94	北	地床炉(北)	〃	
〃	Ｙ４	〃	5.37	8.73	45.95	北	甕埋設炉(北)	〃	胴下半～低部埋設
〃	Ｙ５	〃	(4.4)	5.92		北	〃	〃	〃
佐久市清水田	Ｙ２	〃	4.2	5.3	23.27	北西	壺埋設炉 炉縁石	〃	
〃	Ｙ３	隅丸方形	6.6	7.4	48.39	北	壺埋設炉	〃	胴部片利用
〃	Ｙ４	隅丸長方形	5.8	7.9	46.85	北	壺埋設炉 炉縁石	〃	胴部片埋設
〃	Ｙ６	隅丸方形	4.3	4.0	17.7	西	高坏埋設炉	〃	
〃	Ｙ７	隅丸長方形	4.4	5.5	22.71	北	壺・甕埋設炉 炉縁石	〃	壺底部４個体
〃	Ｙ９	〃	4.6	5.5		北	地床炉	〃	
〃	Y10	〃	4.6	5.5	(23.13)	北西	甕高坏埋設炉 炉縁石	〃	
佐久市西近津	Ｙ１	〃	2.8	3.5	(9.71)	北	埋甕炉	〃	壺頸部～胴部逆位に埋設
佐久市一本柳	Ｙ１	〃	4.8	6.8	33.60	西	土器敷炉	〃	壺頸部～胴部片
〃	Ｙ２	〃	6.4	8.0	49.60	北	埋甕炉	〃	壺埋設
〃	Ｙ３	〃	5.6	8.4	46.40	北	〃	〃	甕？ 底部埋設
〃	Ｙ４	〃	4.8	6.4	28.80	北	〃	〃	壺底部埋設
〃	Ｙ５	〃	8.0			北	〃	〃	壺底部埋設
佐久市西一里塚	Ｙ１	隅丸方形	4.4	4.8	21.52	北北西		〃	
〃	Ｙ５	隅丸長方形	4.3	6	25.40	北北東	土器埋設炉	〃	壺底部埋設
〃	Ｙ６	〃	4.9	6.8	(26.80)	北	〃	〃	壺頸部～胴部片
〃	Ｙ７	〃	4.9	5.85	(28.00)	北東	〃	〃	
〃	Ｙ８	隅丸方形	4.25	4.7	17.80	西	〃	〃	壺底部埋設
〃	Ｙ９	隅丸長方形？				北西	〃	〃	壺口縁部～胴部片
〃	Y11	隅丸長方形	5.0	5.95	(27.80)	北西	土器埋設炉	〃	壺底部埋設

遺跡名	住居址	形　態	規　模			主軸方位	炉	時　期	備　考
			東西	南北	面積				
佐久市後沢	Y 4	方　形	3.1	3.14	8.85	中央	地床炉	箱清水	
〃	Y 5	隅丸長方形	5.4	7.4		東	〃	〃	
〃	Y 6	長方形	2.5	3.0		西	〃	〃	
〃	Y 7	隅丸長方形	5.2	7.0		北東	〃	〃	
〃	Y 8	〃　?				北西	〃	〃	
〃	Y11	隅丸長方形	3.4	3.94	13.06	北東	〃	〃	
〃	Y12	〃	4.6	5.66	25.39	北	〃	〃	
〃	Y14	〃	6.0	6.6		北	〃	〃	
〃	Y15	〃	5.5	6.6	36.10	北西	〃	〃	
〃	Y16	隅丸方形	5.0	5.4		中央	地床炉 炉縁石	〃	
〃	Y17	隅丸長方形	4.4	5.4		中央	地床炉	〃	
〃	Y18	〃	4.8	5.86		北	〃	〃	
〃	Y19	隅丸方形	3.76	4.2	15.55	中央	〃	〃	
〃	Y20	隅丸長方形	4.2	5.7	23.37	北東	〃	〃	
〃	Y21	〃	3.26	4.64	14.24	南西	〃	〃	
〃	Y24	〃	5.0	5.72	27.14	北東	〃	〃	
〃	Y25	隅丸方形	5.0	6.0		北西	〃	〃	
〃	Y26	隅丸長方形	6.1	7.1	42.28	中央	地床炉 土器敷炉	〃	壺胴部片 炉縁石
〃	Y27	〃	5.14	6.24	30.39	北西	地床炉	〃	
〃	Y28	隅丸方形	4.26	4.8			〃	〃	
〃	Y29	隅丸長方形	5.9	7.5	38.85	北東	〃	〃	
〃	Y30	隅丸方形	4.1	4.5		中央	〃	〃	

それに対し後者は圧倒的に地床炉が多く、炉縁石もほとんど置かれず貧弱な炉址である。舞台場でも1例埋設炉がみられるのみである。こうした炉址のあり方は地域性によるものと思われる。

古墳時代前期及び中期の住居址は検出されていない。

古墳時代後期（鬼高期）の住居址は10棟あるが、全体のプラン・規模の明らかなものは、H 4・7号住居址の2棟である。2棟は隅丸長方形と隅丸方形を呈すが、全般には隅丸方形を呈する。

カマドは北壁中央に設け、残存状況は良好ではないがH 4・H 7は粘土により構築され、直立する支脚石を残している。H 13号住は馬蹄形に礫を一列に並べてカマドの基部を形作っている。

奈良時代（真間期）の住居址は9棟あり、H5・8・11・12・37号住居址の5棟がプランも明確で残存状況も良い。形態は隅丸長方形と隅丸方形がある。カマドは北に設け、天井・袖部に礫を利用し、甕•坏形土器片が出土する。柱穴はやや不規則ながら4本方形に配列され、H37号住居址は壁外柱穴を持つ。規模は長軸が4～6mを測るものである。

平安時代（国分期）の住居址は20棟を数えるが残存状況が悪く、プラン及び柱穴、床面等についても不明確な点が多い。規模の大きい住居址で6m前後、小さいもので4m前後を測る。主柱穴の検出されたのはH1・30・32・33・34・39号と少数である。カマドはH1・14・15・20・38号住居址の5棟に検出され、北及び東に位置し、炭化物を含む黒褐色土範囲が残存し、土器片を多量に出土する。H31・H32・H33・H34・H35号住居址はカマドが検出されない住居址である。

古墳時代から平安時代の住居址が重複し、しかも浅いことからその新旧関係の不明瞭なもの、形態の不明瞭なものが多く、資料的には良好とは言えない。ただし、佐久市内でも舞台場遺跡に展開された各期の遺跡の類例[8]をみることができるが、このように長期に渡って集落が継続し、その上重複している遺跡は上ノ城遺跡[9]があげられるのみであり、この舞台場という地点は何らかの要所として位置していたのではと推測されてる。

遺物

弥生時代の土器は甑・壺・甕・坏・高坏形土器がある。

甑形土器は点数が少なく全器形の明らかなものはない。底部中央に一孔をもち直線的に外傾する。無彩で内外面ミガキ調整される。

壺形土器は口辺部内外面及び胴上半外面塗彩されるものが多く、大・小あり、4形態に分類される。L＝大形品、S＝小形品

La　口辺部全体が大きく外傾外反し、胴中位下にかけて張り外稜をもってややこけて底部に窄まるものと思う。口辺部内外面、胴上半塗彩ミガキ、頸部T字文、口唇部に縄文をころがすものもある。（44―9、45―10）

Lb　口辺部が強く大きく外傾外反し、口縁部で内湾直立する。胴形は胴中位下にかけて、ゆるやかに張るものと思われる。無彩品、ミガキ、口縁部外面波状文。（47―2）

Lc　口辺部がつよく大きく外傾外反し、口縁部で外稜をもって短いが直線的に外傾する口縁。胴部は中位にかけて大きく張り、最大径をもつ。口辺部内外面、胴上半塗彩、口縁部外面波状文、頸部簾状文・波状文が施こされる。（50―1）

Ld　口辺部外傾外反し、中位で外稜をもって更に大きく外反する。胴形は比較的強く張り、球形に近くなる。口辺部内外面、胴上半塗彩、頸部に文様帯をもち、簾状文と横線文を施す。（45―1）

Se　口辺部外傾してやや外反する。胴上部直線的に張り、胴中位で湾曲して直線的に底部に

窄まる。無彩品、ミガキ、頸部簾状文、胴上部波状文。(48—5)

甕形土器は大・小あり8形態に分類される。甕形土器の調整は、口辺部外面・胴上半に波状文、頸部簾状文、口唇部に縄文をころがしているものが多く。胴下半底部、内面はミガキである。

La　口辺部が比較的長く頸部から直線的に外傾し、頸部屈曲して胴部上半が扁球状に張り、下部は直線的に底部に窄まる。最大径は口径。(46—2、47—5)

Lb　口辺部外傾外反し、頸部で湾曲、器高の中位から中位下にかけて張る。最大径は口径と胴最大径がほぼ同値を測る。(48—1)

Lc　比較的短かい口辺部が外傾外反、頸部の収縮度が弱く、器高中位に最大径をもつ。口径も胴最大径に近い数値をもつ。(44—6)

Lc′　cと器形的には似るが頸部の収縮度が強い。(49—8)

Ld　口辺部外傾外反し、頸部屈曲して胴上部にかけて強く張り最大径をもち、口径が最大径よりかなり小さい。(45—9)

Se　口辺部が比較的長く外傾外反し、口径に最大径をもち、比較的細身の小甕。(49—5)

Sf　口辺部短かく外傾外反して口径に最大径をもち、頸部は湾曲して器高中位下にかけて張り、口径に近い胴最大径をもつ。(47—3)

Sg　口辺部わずかに外反して外傾し、口径に最大径をもち、胴肩部にかけて張り胴最大径を肩部にもつ。(48—2)

Sh　口辺部長く上部外傾外反し、口辺下部直立気味となる。(48—4)

坏形土器は塗彩品が主であり、2形態に分類される。

a　口辺部直線的に外傾し、口縁部内湾直立する。(44—1・7、47—12)

b　全体に内湾して外傾する。(45—3)

高坏形土器は塗彩されている。完形品はない。

坏部a　口辺部全体がやや内湾して外傾し、口縁部が内稜をもって短かく外方に早平に折れる。(46—8)

脚部a　脚全体が外反気味に開く。

b　わずかに外傾して直線的に開き、裾部で外反して大きく開く。(49—4)

c　外反気味に開がる脚が裾部で外稜をもち外反して直立する。(45—2)

ここで問題とされる点を列挙してみることにする。まず、壺dは箱清水式土器の中に類例をみることができず、後代の土師器壺形土器の有段口縁の壺形土器に共通するものである。また壺eの器形文様構成は佐久地区ではあまり例をもたず、群馬県剣ヶ崎遺跡[10]等に類形があり、搬入品の可能性があるのではないかと思われる。甕形土器については斜状文を施こす甕が1例あるのみで後沢遺跡も同傾向である。他の箱清水期に比定される遺跡でかなりの割り合いを占めているのと異なる。折り返し口縁の甕形土器も数例の破片のみである。甕d類の器形も新たに出てきたもの

であろう。[11]

塗彩の盛行、甕形土器の波状文の施文、また器形的にも箱清水式土器の範疇に含まれるものであるが、壺d、甕d等新しい形もみられ、臼田武正氏の佐久の弥生時代後期の四分類[12]に従えば佐久第四類の時期まで下がるのではないかと思われる。

古墳時代初頭のものとして、グリッド出土の塗彩された坩形土器がある。球形の胴部形を呈し、底部は小さく、凹むものである。(50—8)

次に中期と思われる複合口縁の壺形土器口辺部がある。(61—3、64—1)

古墳時代前期から中期の資料は少なく、該期の住居址は検出されず土壙よりの出土があるのみである。

古墳時代後期

古墳時代後期は土師器と須恵器がある。土師器は甑・甕・小甕・埦・坏・高坏形土器及び手捏、須恵器は、甑・短頸壺・坏(身・蓋)形土器の器種がある。

土師器

甑は大・小あり、口辺部横ナデ、胴部ヘラケズリ調整される。

LA　内稜をもって口辺部が内湾外傾し、端部が面取りされ最大径をもち、胴下部は垂下し、中位下にかけて内湾して窄まり、底部全体が甑孔となる。(52—1)

B　全体に逆「ハ」の字形をなし、口辺部わずかに外傾外反し最大径をもつ。胴部全体に内湾して窄まり底部全体が甑孔となる。(62—11)

SC　口辺部直線的に外傾し、頸部でわずかに窪み、肩部で少し張り内湾気味に平底底部に窄まる。底部中央には焼成後、孔があけられ、小甕を転用したものと思われる。(51—10)

長胴甕は口辺部横ナデ、胴部ヘラケズリされる。

A　口辺部内稜をもってやや内湾気味に外傾し、胴上部垂下し中位下にかけてやや張り、緩い外稜をもって外反気味に平底底部に窄まる。輪積痕残る。(52—3)

B　口辺部外傾外反し最大径をもち、頸部でわずかに収縮し、胴上部でやや張り、内湾して丸底底部に窄まる。(51—6)

C　口辺部直線的に外傾し、頸部で収縮屈曲し、胴下半にかけてゆるやかに張り、下半に最大径をもち台状の平底底部に至る。(63—2)

D　口辺部強く外反して外傾、胴上部は垂下する。最大径は口径。(53—8)(56—1)

丸胴甕は口辺部横ナデ、胴部ヘラミガキと胴部ハケ目のものがある。

A　口辺部ほぼ直線的に外傾、頸部で屈曲し、胴中位にかけて大きく張り最大径をもつ。(54—1、63—1)

B　口辺部内湾外傾し、胴部は球形に近く張り下部は直線的に窄まる。　(51—8)

小形甕は4形態ある。口辺部横ナデ、胴部ヘラケズリされる。

A　口辺部短かく外傾し、頸部で屈曲収縮し、器高中位にかけて張り最大径をもち、丸味を帯びた平底底部に窄まる。(51―9)

B　口辺部が「く」字状を呈し、内稜をもって口辺部外傾外反し、胴部が球状に近く張り、丸味を帯びた台状の底部に至る。(52―4、52―6、53―6、53―12、62―1)

C　口辺部短かく外傾外反し、頸部でわずかに収縮し胴下部にかけてゆるやかに張り台状の丸底底部に窄まる。(53―9)

D　口辺部短かく外傾外反し、胴部は筒状に垂下し丸味を帯びた平底に至る。(53―11、57―1)

埦形土器（器高が口径の½より深いものを便宜的に埦とする。）

A　素縁のもの、底部は半円形を呈す。(62―2)

B　内稜をもって口辺部は外傾し、底部は半円形の丸底を呈す。(62―3・5・6・7、63―4・5)

C　口辺部が短かく外傾外反し、頸部でやや収縮し丸底底部を呈す。(53―2、53・3)

坏形土器　外面ヘラケズリ、内面ミガキ

A　素縁のもので底部は丸底を呈す。　1、口辺部内傾（63―6）

2、口辺部直立（51―1、54―3、63―7）

B　丸底底部で内稜をもち口縁部が短かく外傾するもの（53―10、62―4）

C　丸底底部が中位で外稜をもって直立する。(65―3)

D　丸底底部が器高中位で内稜をもって外傾する口辺をもつ。(65―5)

高坏形土器

坏部A　坏部が坏A形をなすもの（61―11）

B　丸味を帯びた坏下部が外稜をもっていったん凹み、内湾気味に外傾する。(51―3)

脚部A　裾部全体が外反気味に開く。(53―4)

B　脚中位がやや張り、内稜をもって裾部が外反して開くもの。(51―4)

C　脚が直線的に開き、内稜をもち直線的に裾部が開くもの（51―5）

D　やや外反気味に開く脚が裾部で大きく外反する。(51―2)

須恵器は量的に少なく、把手つき甑（54―2）、丸底を呈したちあがりをもつ坏身（54―5）、丸味を帯びた天井部が外稜をもって垂下する蓋形土器があり（65―7）、短頸壺等がある。

以上古墳時代後期の土器についてみたが、甑A・長胴甕A・丸胴甕B・小甕AはH31号住居址の出土であり、口辺部が内湾して外傾する例は佐久地域では初見である。[13] H7号住居址の埦B・坏B・高坏坏部B・脚A・B・C等は暗紋様のミガキが施こされ、和泉期に続くものと思われる。T1号特殊遺構からの長胴甕B・C、丸胴A・B、埦A・B、坏A・B、高坏坏部A等は前半に

位置づけられる。後半としてＨ16号住居址の小甕Ｄ、埦Ｃ、坏Ｃ等が該当し、長胴甕Ｄ、坏Ｄ類は鬼高末にあたると思われる。

奈良時代は土師器と須恵器がある。土師器甕・小形甕・鉢・坏形土器があり、須恵器は横瓶、広頸壺・瓶・鉄火鉢・坏・高台付坏・埦形土器がある。

土師器

甕形土器は長胴の口辺部「く」の字状に外反する薄手のものと、丸胴のものがある（55―５）。

小形甕

Ａ　口辺部がやや内湾気味に外傾し最大径をもち、頸部で屈曲し肩部にかけて張り内湾して底部に窄まる。ロクロ横ナデ調整され底部は静止糸切りである。（55―１）

Ｂ　口辺部外反気味に外傾し、頸部で屈曲し肩部にかけて張り、内湾して底部に窄まる。内面黒色研磨、外面ロクロ横ナデ。（58―３）

鉢形土器は、口辺部が短かく外傾外反し、頸部でわずかに収縮し、中位にかけてわずかに張り丸味を帯びた底部に至る。内面黒色研磨、外面ヘラケズリ（56―２）

坏形土器は底部丸底で口辺部は外反気味に外方にのびる。内面黒色研磨、外面ヘラケズリ（54―４、58―４）

須恵器

横瓶は完形品はないが、外面胴部に平行叩目の施こされ樽形を呈す。（55―４）

広頸壺は口辺部外傾外反し、肩部は内湾気味に張り湾曲してややあげ底気味の底部に窄まる。（57―１）

瓶は口辺部外反気味に外傾し肩部は直線的に張り外稜をもって内湾気味に底部に至る。（65―６）

鉄火鉢　口辺部内傾し端部直立、肩部から底部にかけて内湾して尖底底部に窄まる。

埦は口辺部直立し底部平底で高台が付き、器高の深いもの。（58―15）

坏　Ａ　底部は丸味を帯びた平底で底部と口辺部の境は丸味を帯び、口辺部は直線的に外傾するが口縁部はやや外反。底部は回転ヘラ切り後、緩いヘラケズリ。（56―３）

Ｂ　底部は平底で回転ヘラケズリが施こされ、口辺部全体に内湾気味に外傾し、口縁部外反気味になる。（57―１・５・４・８・９・15）

Ｃ　底部はヘラ削りされ、口辺部直線的外傾する小形品　「止」の刻印あり。（55―７）

高台付坏は平底底部に外反する高台がつき、口辺部は直に折れて口縁部外反する。

蓋形土器　Ａ　つまみは中央が窪み、天井部内湾気味に広がり口縁部短かく折れて直立する。天井肩部ヘラケズリ　（57―13）

Ｂ　天井部水平で口縁が短かく直立する。

須恵器が量、器種共に最も豊富であり、岸野相浜の石附窯址[14]より遺物は若干下がるが地元でこれらの須恵器が焼かれたのではないかと思われる。H5・H6・H8・H9・H10・H11・H12・H37号住居址の出土遺構はこの期に比定され、H7・H37号住居址がやや古く、H5・H11は奈良末期ないしは次期にまたがるものと思われる。

平安時代の土器は土師器、土師質土器、須恵器、灰釉陶器がある。遺物の量は多いが、浅くプランが把めなかったこともあり、土器セットに良好な例がない。

土師器内面黒色研磨の坏と口辺部形態「コ」の字状の薄い長胴甕と須恵器回転糸切り底の坏形土器が共伴するH1、H14・H15等の住居址から、土師質土器の小皿と灰釉陶器が共伴するH30・H36号住居址まである。この期の重複関係が明確で残存状況が良ければ、平安期の土器変遷もつかむことができたであろうと思われる。なお本遺跡の灰釉陶器は東濃系の搬入品で11世紀に比定されるという[15]。

また土鍋片があり、掘立柱建物址の時代については決定資料を欠くが、中世の遺構の可能性をもち、長くこの地に歴史が展開されたようである。　（工藤かよ子・林幸彦）

注1　佐久市教委　『下小平』　1982　佐久市岩村田字下小平、湯川左岸の第2の河岸段丘上にあり、弥生時代の住居址5棟、古墳時代1棟、方形周溝墓2基、他に土壙、溝状遺構が検出される。

注2　佐久市教委　『清水田』　1981　佐久市岩村田字清水田にあり、微高地の西端にあたり住居址13棟のうち弥生時代は10棟が検出される。他に土壙等あり。

注3　西近津遺跡は、佐久市長土呂字西近津にあり、4棟の住居址のうち1棟が弥生時代の住居址。他に土壙、溝状遺構がある。

注4　佐久市教委　『一本柳』　1972　佐久市岩村田字一本柳にあり、湯川の左岸の河岸段丘上にあたる。住居址12棟のうち弥生時代は5棟ある。他に土壙、掘立柱建物址がある。

注5　臼田武正　『西一里塚調査概報』　佐久市岩村田字西一里塚にあり、微高地上にあたり住居址11棟　弥生時代の環濠が検出されている。

注6　佐久市小宮山字後沢の舌状丘陵上に営まれた大集落で住居址53棟のうち弥生時代は32棟ある。縄文～平安時代までわたっており、方形周溝墓3基を数える。「後沢遺跡」『長野県史考古資料編集全一巻㈡主要遺跡（北・東信）』1982

注7　林幸彦・花岡弘　「弥生時代の炉―千曲川流域を中心として―」　（『信濃』第35巻4号）1983

注8　佐久市教委　『北近津』　1972　4棟　『市　道』　1976　7棟　『戸板』　1971　4棟　『一本柳』　1972　10棟

『上桜井北』	1978	8棟	鬼高期
『跡部町田』	1978	5棟	
『清水田』	1981	3棟	
『周防畑A』	1980	1棟	真間期
『周防畑B』	1981	11棟	
『小金平』	1981	1棟	

『三塚鶴田』	1975	4棟	国分期
『上桜井北』		7棟	
新田子字和田上南	和田上南2棟		
『蛇塚B』	1979	5棟	
『周防畑A』		4棟	
『周防畑B』	A、C地点8棟		
『兵士山』	1979	1棟	
『小金平』	1981	1棟	
岩村田北西久保	北西久保7棟		

注9　佐久市教委　『うえのじょう―佐久市岩村田上ノ城遺跡調査概報』 1974　鬼高期15棟、国分期34棟の住居址が検出されている。また現在、上の城遺跡群西八日町遺跡においても鬼高・真間・国分にわたって重複する住居址群が検出されている。

注10　井上唯雄・柿沼恵介　「入門講座弥生土器―関東・北関東3」　(『考古学ジャーナル』) 143　1977

注11　下小平遺跡Y3、HM1等の遺構で検出され、HM1は土師器と共伴しており、箱清水式土器の清水田、一本柳、後沢遺跡等にはない。

注12　臼田武正　「佐久地方の後期弥生式土器について」　(『信濃』32―4)

注13　注8に列挙した鬼高期の出土遺跡にはなく、『土師式土器集成2』によれば東日本では少ないとしている。

注14　林幸彦　「石附窯址」　『長野県史―考古資料編全一巻(二)　主要遺跡(北・東信)』　1982

注15　愛知県陶磁資料館学芸員浅井員由氏の御教授による。

樽崎彰一　「瓷器の道(1)」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』1968

引用参考文献

笹沢　浩　「箱清水式土器発生に関する一試論」　（『信濃』III 22—11）　1970

桐原　健　「北信濃後期弥生式土器—箱清水式土器とその発生について」　（『一志茂樹博士喜寿記念論文集』）　1971

大塚初重・杉原荘介　『土師式土器集成II～IV』　1972～1974

佐久市教育委員会　『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』　1971

〃　『岩村田一本柳』　1972

臼田武正　『佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報』　1974

笹沢　浩　「弥生式土器—中部・中部高地３」　（『考古学ジャーナル』　134）　1977

臼田武正　「佐久地方の後期弥生式土器について　（『信濃』32—４）1980

千曲川水系古代文化研究所　『箱清水土器』　1981

佐久市教育委員会　『下小平遺跡』　1981

林幸彦・花岡弘　「弥生時代の炉—千曲川流域を中心として—」　（『信濃』　35—４）　1983

佐久市教育委員会　『市道』　1976

花岡　弘　「佐久平における土師器の概観」　（『周防畑遺跡』）　1980

上野純司　「南関東における古式土師式土器編年試論」　（『史館』第９号）　1977

臼田町教育委員会　『井上遺跡』　1980

佐久市教育委員会　『上桜井北』　1978

小諸市教育委員会　『関ロＢ』　1980

〃　『宮ノ北１・２次』　1981

〃　『五ケ城』　1981

福田健司　「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」　（『考古学雑誌』第64巻第３号）　1978

玉口時雄　『シンポジウム盤状坏—奈良時代土器の様相』　1981

利根川章彦　「古墳時代集落構成の一考察」　（『土曜考古』５号）　1982

佐久市教育委員会　『蛇塚Ｂ』　1979

〃　『三塚鶴田』　1976

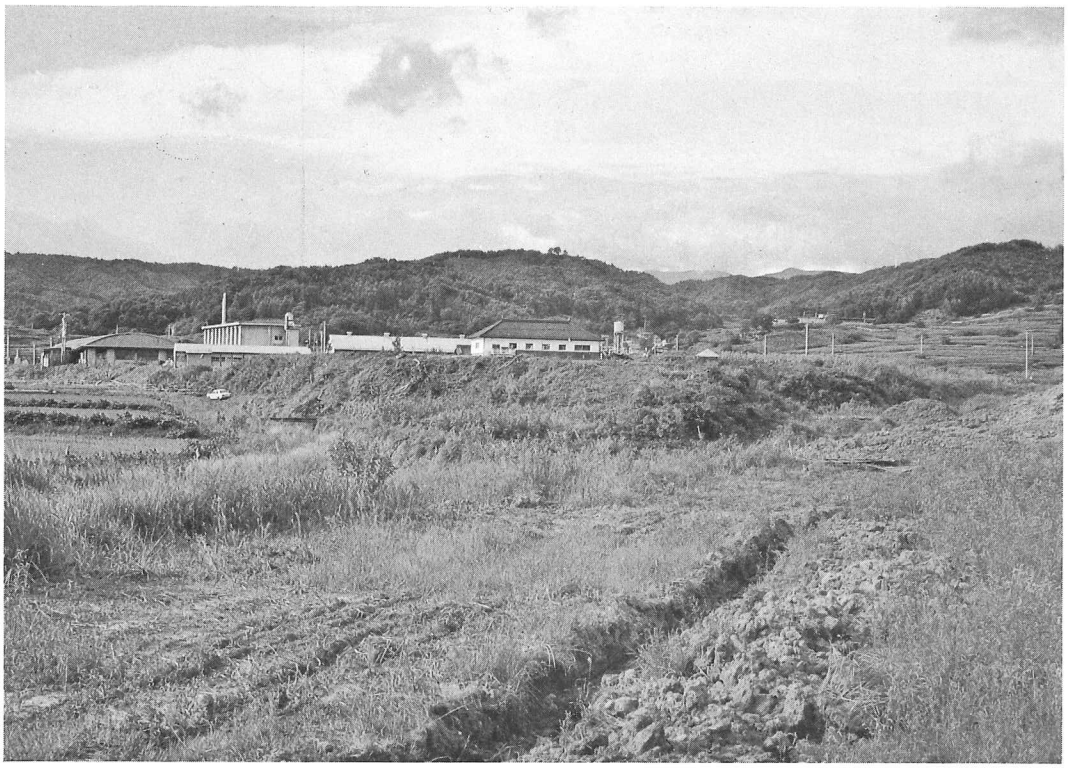
群馬埋文　『清里・陣馬』　1982

楢崎彰一　「瓷器の道（１）—信濃における灰釉陶器の分布」　（『名古屋大学文学部二十周年記念論集』）　1968

図版一

舞台場遺跡航空写真

図版二



1．舞台場遺跡遠景（北方より）

2．舞台場遺跡全景（北方より）

1．舞台場遺跡全景（北方より）

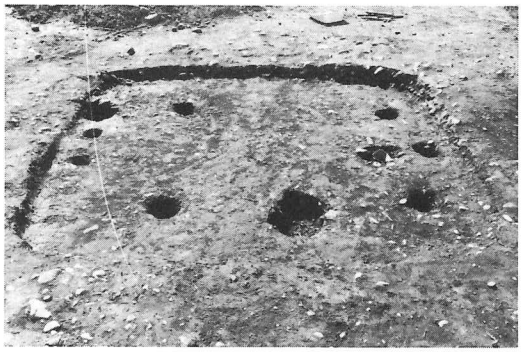
2．Y1·13，H1号住居址

4．Y3号住居址

3．Y2号住居址

5．Y5，H10・11号住居址

図版四

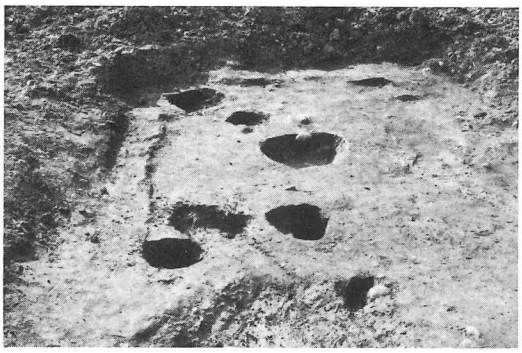


1．Ｙ６号住居址

2．Ｙ７号住居址

3．Ｙ７号住居址貯蔵穴

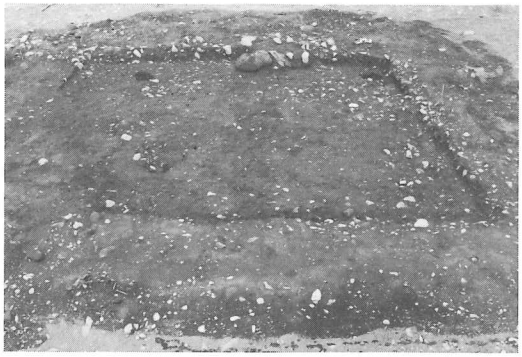
4．Ｙ９号住居址



5．Ｙ10号住居址

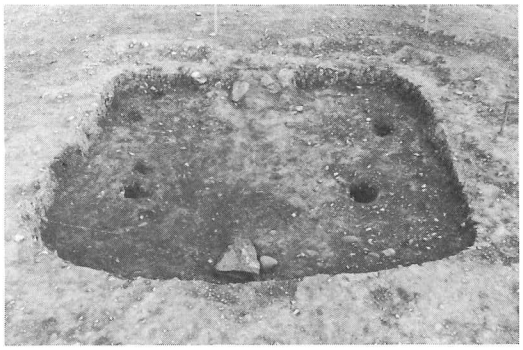
6．Ｙ12号住居址

7．Ｈ４号住居址



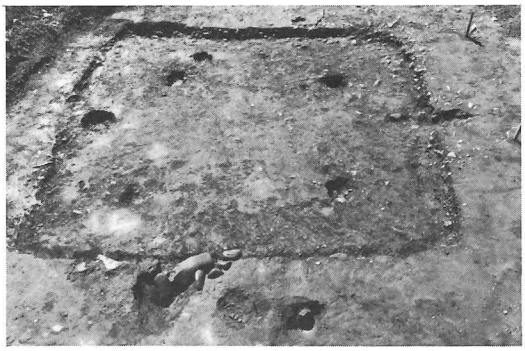
8．Ｈ５号住居址

図版五



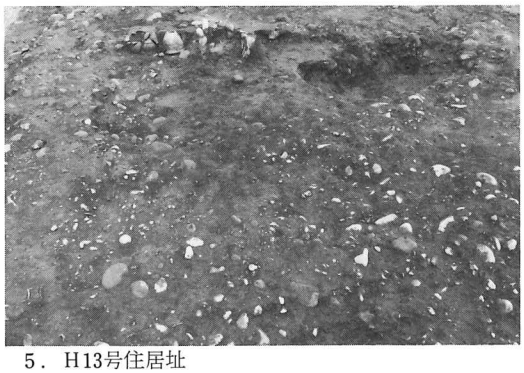
1．Ｈ８号住居址

2．Ｈ９号住居址



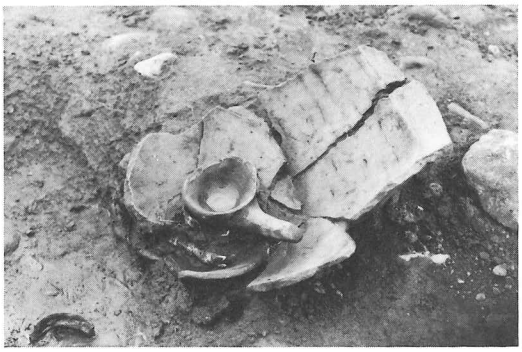
3．H11号住居址

4．H12号住居址



5．H13号住居址

6．H13号住居址カマド

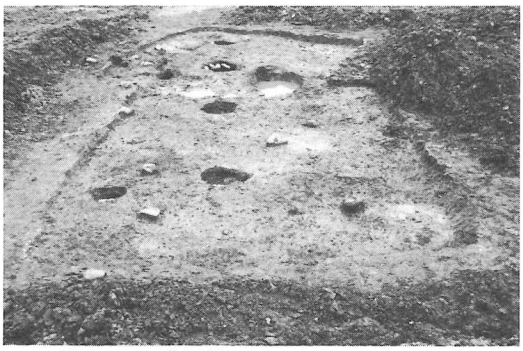


7．H13号住居址遺物出土状態

8．H23号住居址

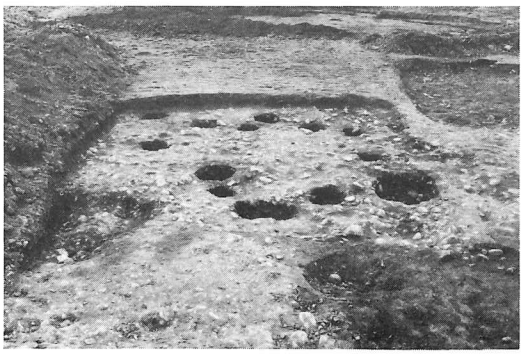
図版六

1．H28・30・39号住居址



2．H31・32号住居址

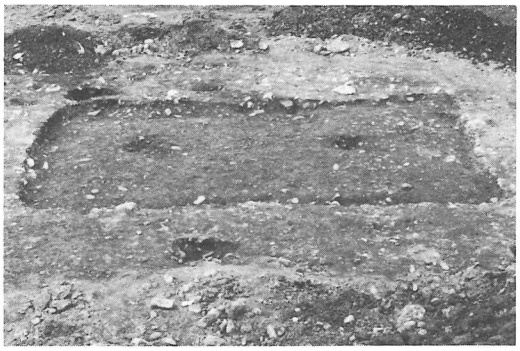
3．H33号住居址



4．H34号住居址

5．H35号住居址

6．H36号住居址



7．H37号住居址

8．D２号土壙

図版七

1．Ｄ９号土壙遺物出土状態

3．Ｄ20号土壙

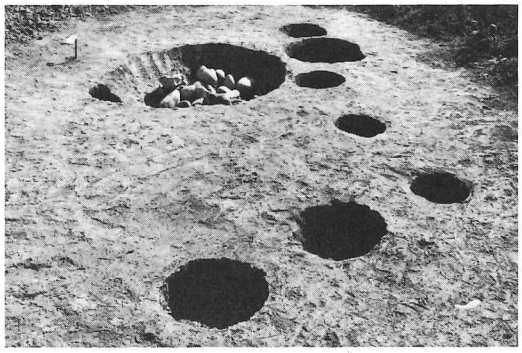
2．D12・13・14・15号土壙

4．Ｆ１号掘立柱建物址

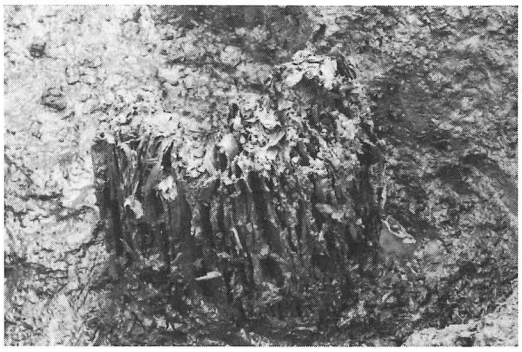
5．掘立柱建物址，溝状遺構全景（南方より）

図版八

1．Ｆ２号掘立柱建物址



3．Ｆ３号掘立柱建物址

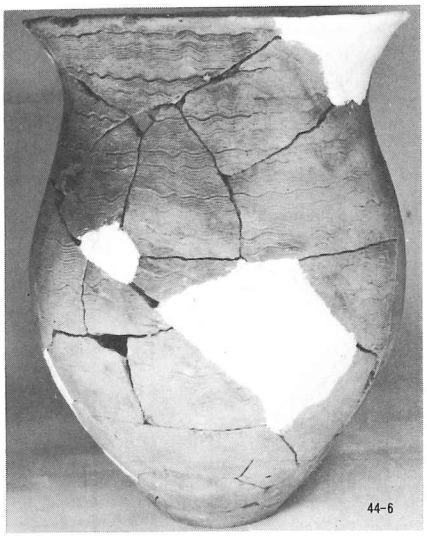


2．Ｆ２号掘立柱建物址柱痕

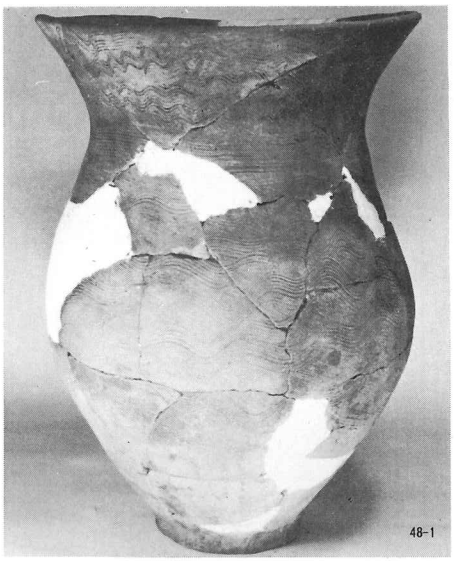
4．Ｆ４号掘立柱建物址

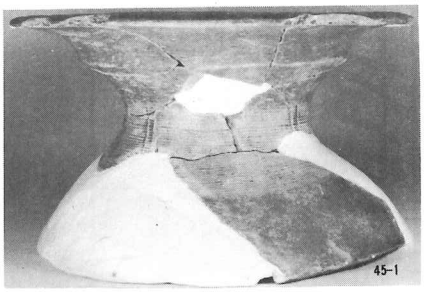
5．舞台場遺跡発掘調査団

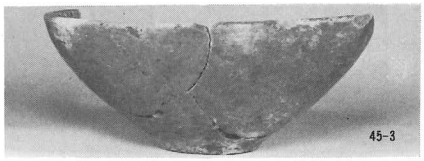
図版九

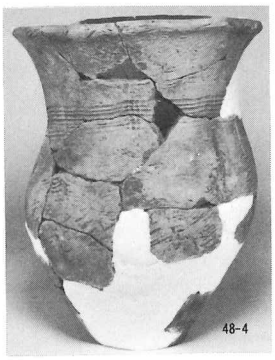

44-6

47-12

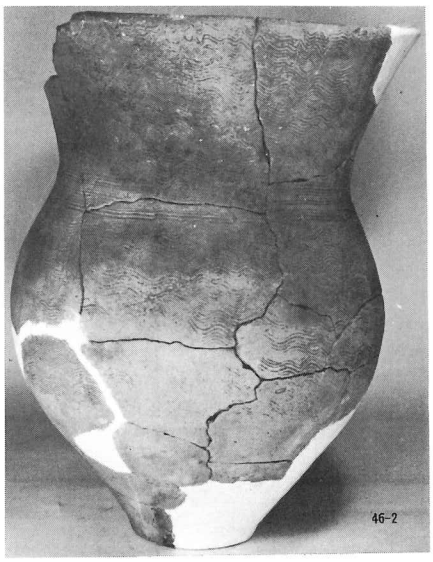

48-1

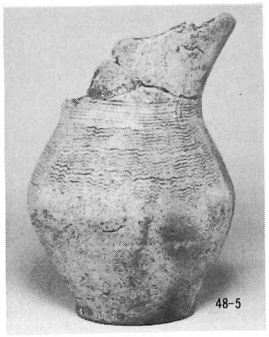

45-1

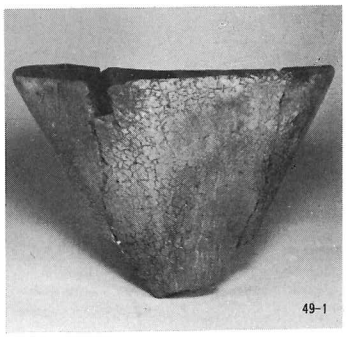

45-3


48-4

48-2


46-2

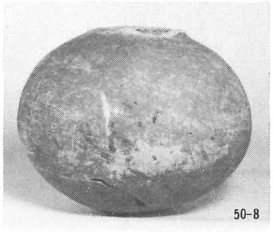

48-5

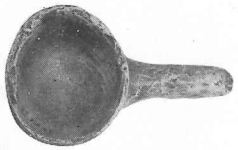

49-1

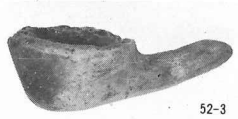
図版十

50-1

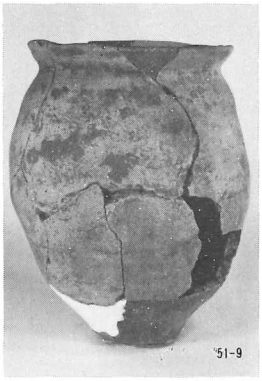
50-2

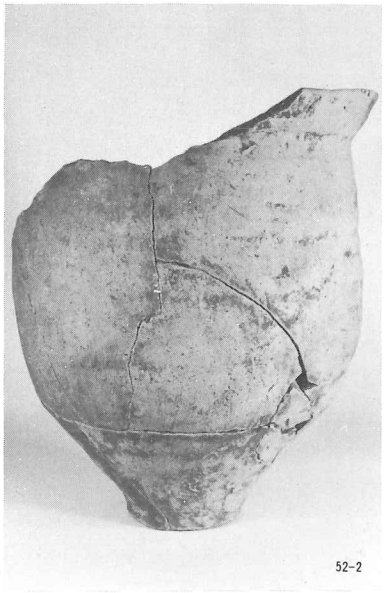

50-8

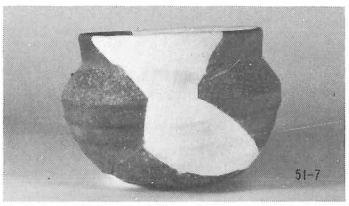



52-3

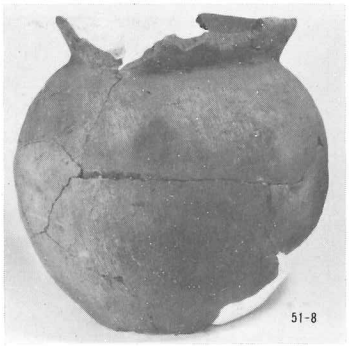
51-6


51-9


52-2


51-7

51-10


51-8

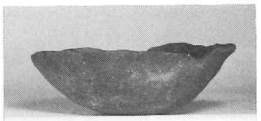
52-1

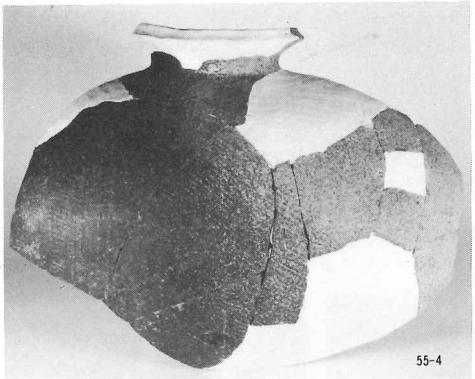
53-2

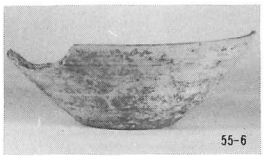
53-3

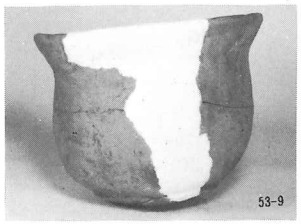
図版十一

53-7

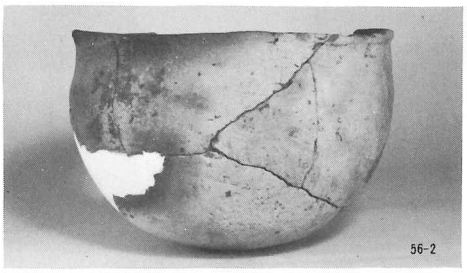

54-4


55-4

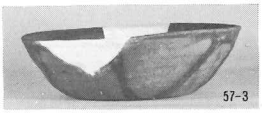

55-6

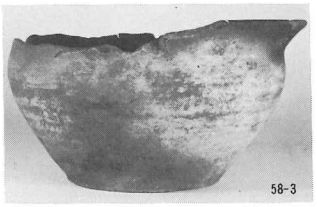

53-9

55-9

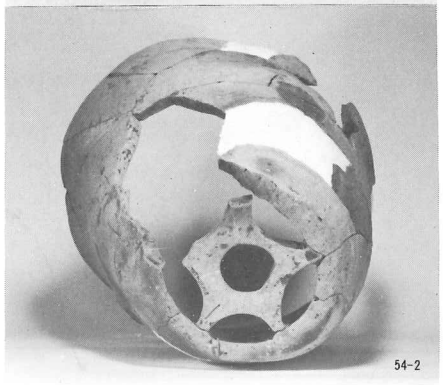

56-2

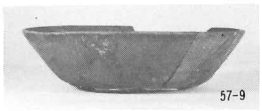
58-20


57-3

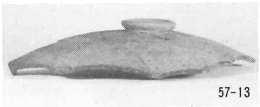

58-3

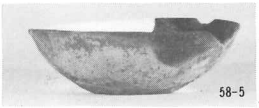
57-5

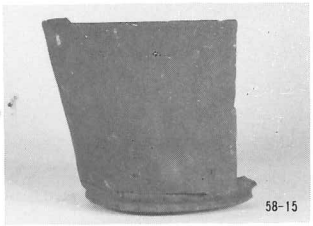

54-2

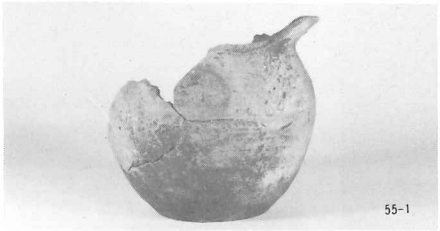

57-9

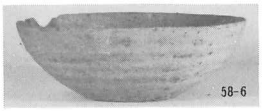
57-14

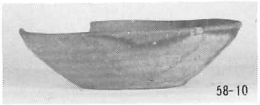

57-13


58-5


58-15

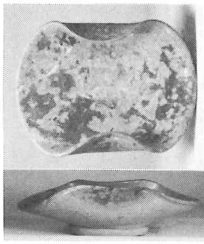

55-1

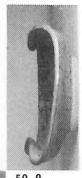

58-6

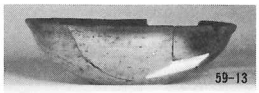

58-10

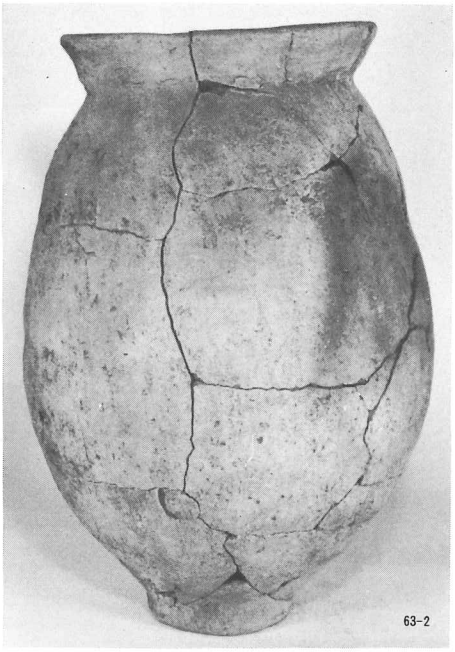
58-17

図版十二

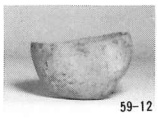

59-8




59-13


63-2

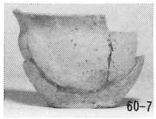
60-11

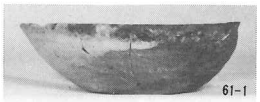

59-12

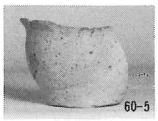
60-6

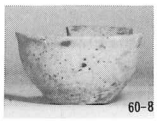
60-16

60-4

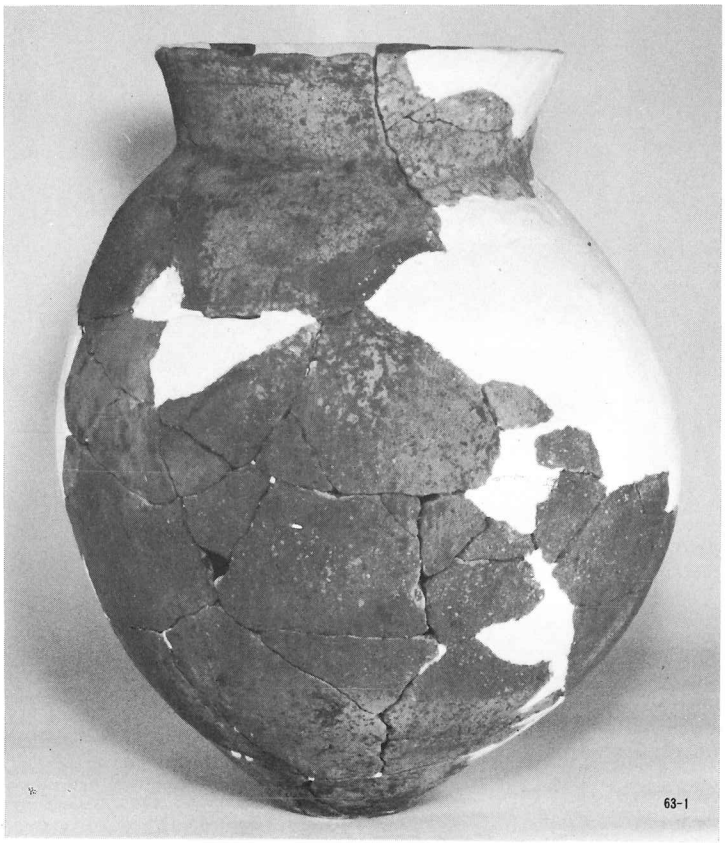

60-7

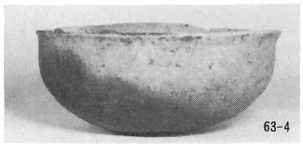

61-1

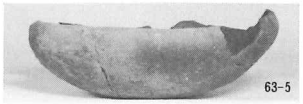

60-5


60-8

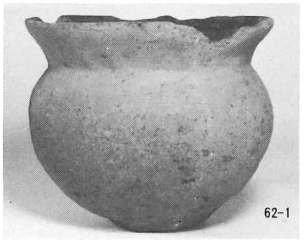
61-12

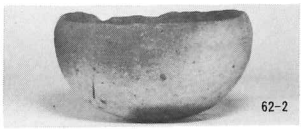

63-1


63-4


63-5

63-6


62-1


62-2

62-3

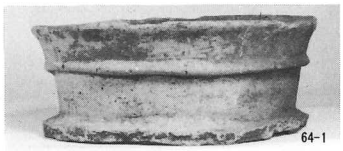
図版十三

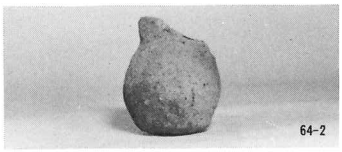
62-5

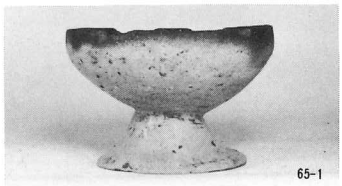
62-6

62-7

62-10

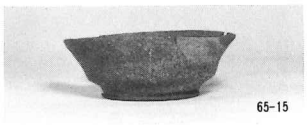

64-1

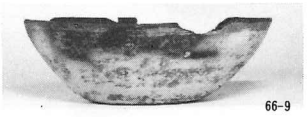

64-2

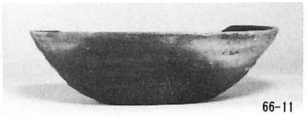

65-1

65-6

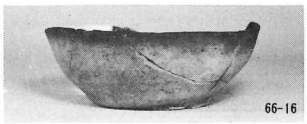
65-14

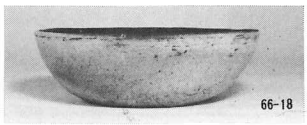

65-15


66-9


66-11

66-14

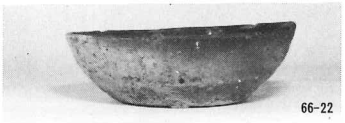

66-16

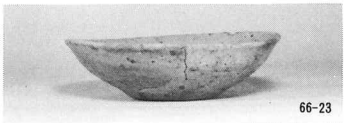

66-18

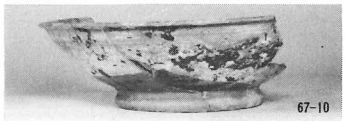
67-1

66-19

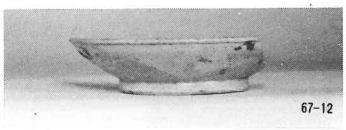
66-21


66-22


66-23


67-10

67-11


67-12

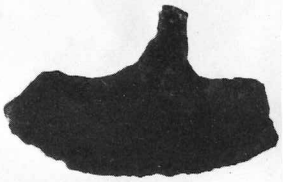
70-1

70-2

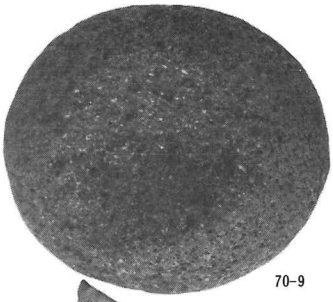
70-3

70-4

70-5

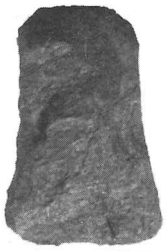

70-6

図版十四


70-9

68-1

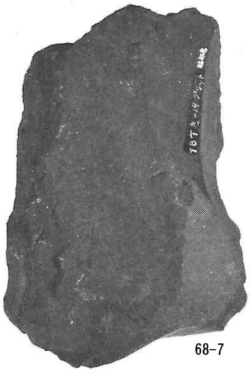
68-2


68-3

68-4

68-5

68-6


68-7

69-1

69-2

69-3

69-6

69-4

69-5

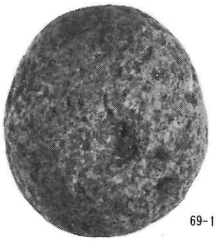
69-7

69-8

69-9

69-11

69-10


69-12

長野県佐久市舞台場遺跡

昭和58年7月1日発行

編 集 者　舞台場遺跡発掘調査団

発 行 者　長野県佐久市教育委員会

印 刷 所　株式会社　佐久印刷所